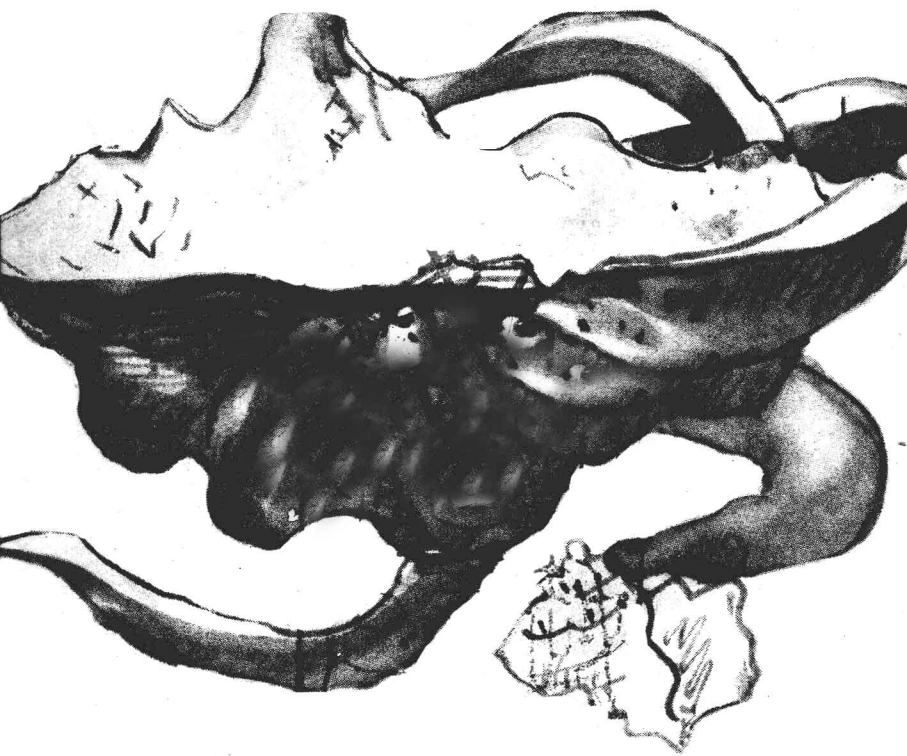


確證

小谷剛著

確 證

小 谷 剛



改 造 社



昭和二十四年七月二十五日印刷
昭和二十四年七月三十日初版發行
昭和二十四年八月二十五日再版發行

著者

小谷剛

發行者

平田貫一郎

印刷者

加藤新

發兌

改造社

東京都中央区京橋一ノ三
振替東京八四〇二
電話京橋(59)五一六一九〇

定價 百九拾圓

(小高製本)

社 會 株 式 配 給 出 版 日 本 2 / 9 町 路 淡 田 神 區 田 代 千 元 給 配
社 會 株 式 印 刷 文 化 1 / 4 町 保 神 神 區 田 代 千 元 所 印 配

目次

自辱……………三

或は一婦人科醫の獨白

麻薬……………七

確證……………一三

装幀 熊谷九壽

自

辱

或は一婦人科醫の獨白

患者への憎悪。

そして、憎悪が私を病氣とたゝかわせる——

つかえていた心の凝りを吐き出すにも似た思いで、その夜私は亂暴な文字を日記に書きこんだが、しかしこうした散漫な二行をならべてみると、私にも早あとに續けるべき言葉を見失わなければならなかつた。いちにち、私を落着きない焦燥に追いつめていたものの正體も、所詮は小森すゞの死という一事に過

ぎなかつたとすれば、いまさらにもなつて、この種の些事に拘泥してゐる自分のおろかさを、私はいそいで苦つばい笑いのなかに取り捨てようと試みるのであつた。私はペンをおいた手で、たばこを取り出した。

なるほど、小森すゞの死に關して私の内部に滑りこんだ灰色のかげは、確かに多くの、しかもかなり根本的な問題を含んでゐるには違ひない。だがそれにして、結局それは、醫者としては餘りに初歩的なことでしかないのだ。いつてみれば、私が自分の受持つた患者の一人の死に遭遇したというだけのことにはすぎない。私が小森すゞに對して四カ月の間とつてきた冷酷な態度を、彼女の生命が終焉した今になつて反省してみることが、無駄という以上に嘔うべき感傷であつた。私は既にこのようなことになら、醫師としての良心をとつくのむかしに忘却してしまつてゐるはずであつた。私は今の所に婦人科を開業してから、もう二年餘りになり、そしてこの二年という時間は、私の身體から開業醫

としての商人に近い狡猾さを匂わせるのに、決して短かすぎるようなことはなかつた。成程、今年二十五歳という私の年齢は、名古屋市内開業醫中の最年少者のひとりということになつてゐる。しかしそれだからと言つて、それは私が青年らしい情熱にみたされた醫者であるという説明にはならない。私は卒業證書とともに「仁術」というしかつめらしい言葉を額のなかにおさめこんだまま、再びかえりみることもなかつた。三月と経たないうちに、夜の往診をことわるすべを覚え、私達仲間で口頭療法ムンデラと呼ばれる口先の治療法も器用に體得した。おどろく程の早さで騰貴する薬價を次々とおぼえこまなければならなかつたし、モルヒネ中毒患者をことわることと、ふみ倒されそうな治療費を請求することとに忙殺された。その上婦人科醫の私としては、少くとも週に二件は必ず依頼のある、墮胎手術の應接のコツまでも會得しなければならなかつた。思わす暴露される患者の家庭の秘密にも、眉一つ動かしてはいけない。そして死亡診断

書は機械的に書く。——これが、二年間につくりあげられた私の姿であつた。青春を忘失した顔だ、と、美校出の友人は或時そうした私にむかつて、あわれみをこめた眼で言つたことがある。忘失する青春が私にあつたかどうかは解らないが、言われてみれば、私の頬はそげ、狭い眉間に、癩性のすじがぎざまれ、笑うと老人のようにしわがよる。私の顔はたしかに醜惡であつた。

今朝、小森すゞが子宮癌で死亡した。前夜、私は戦時中から大切に残しておいた最後のモカを、二杯もブラックで飲んだせいか、殆ど夜明け近くまでまどろむことができなかった。便所にはかり數回立つた。そしてやつと熟睡に入リかけたと思う頃、私は往診の依頼にたゞき起された。「様子が變つたで、すぐと来てまえんかなも」奥までつゝ抜ける小森すゞの亭主のだみ聲に、私は眉をひそめて枕許の時計をみた。それでもいつの間にか七時近くになつていた。私は不機嫌な心に乗せて自轉車でかけつけた。だが私の行つた時には、患者はも

う息を引き取つたあとであつた。眼を半ば見開いたまゝ、その顔は幾分苦痛にひきゆがんでいた。彼女をつゝんでゐる垢びかりのしたふとんはひどくかさが低く、その下にたつたいま魂を喪失したばかりの肉塊が横たわつてゐるとは、どうしても信じられなかつた。嘔氣をもよおさせる悪臭はまだ部屋に充滿してゐた。障子の破れをかさかさと鳴らして、寒い風が吹きこんだ。家族の者はみんなしんと黙りこくつてゐた。私は形式的に脈を取つただけで、聽診器を握るうとはしなかつた。私には悪液質カヘキシの爲に枯渴し切つた彼女の肉體を、改めてみるだけの勇氣がなかつた。私は七十日ものあいだ日ましに羸瘦ろたうの目立つて來る彼女を診察しつゞけ、そしてそうした彼女への憎惡に耐えつゞけて來たのだ。彼女の肋骨は次第に一本一本をはつきりと數えることができるようになり、その肋骨に餘りにびつたりと密着した皮膚は、かえつて不氣味な蠟色の光澤をさえ放つて來た。反對に、陥没した肋間部には茶褐色の垢が層をなしてたまり、

指先でつゞけば音を立てて破れそうな感じだつた。最初診た時から、彼女はもう施すすべもない患者だつた。私は型通りに患者の死を家族に告げた。彼等はやはり黙つていたが、私はその瞳から彼等の感じているものを讀みとることができた。一様に、厄介者から解放された安堵であつた。私は狼狽しないわけには行かなかつた。私自身もまた、その時患者からの解放に内心ほつとしていたのだ。相手の表情から自分の表情を教えられた狼狽であつた。小森すゝの亭主は出口まで私を見送つて、今日中に葬式を出してしまいたいから、死亡時間を昨日の三時頃にしてくれないかと頼んだ。へんに非情な響きだつた。私は怒りをこめた聲で、無愛想にそれを拒絶した。私は矛盾した義憤を、ふいと彼に覺えた。だが小森すゝの家を出た途端、私の心にはすぐに空白がのしかゝつて來た。私は解放の安堵に代る苦いあと味をかみしめなければならなかつた。私は彼女の細い、あえぐような聲を思い起した。

「先生、殺して下さい」——彼女が私に向つて言つた最初の言葉がそれだつた。そしてその後四カ月のあいだ、彼女は私の顔をみるたびに執拗にそれをくりかえした。彼女は再び醒めることのない睡眠薬を求めつづけた。私はそれに取り合おうともせず、毎日無言で毒にも薬にもならない注射をうつて歸つた。私は患者からのこうした哀訴には既に馴れていた。殺してくれという言葉の妥協性を知つていた。それは、自慰と、介抱人へのゼスチュアを含んだ言葉にすぎないのだ。けれど小森すゞの場合に於ては、私はやがてそうした私の經驗を全く裏切るものであることを知つた。彼女は眞に死を渴望していた。彼女は不治の病の桎梏から脱れ得る唯一のみちとして、褐色の注射液を上膊の皮下にうつてもらうことを、心から願つていた。彼女は一日もかゝさず殺してくれと反復した。そして次第にこの言葉を口にする時の彼女の眼には、烈しい憎悪がこもつて來た。私の憎悪が相手に反映したのか、それとも相手の瞳によつて反射的に

私が彼女を憎悪したのか——私と患者とは心の底からお互いをにくみあつた。私達は毎日敵意に満ちたまなざしを光らせて、氣ますく向い合わなければならなかつた。「先生、殺して下さい」——私は彼女の、最後の、そしておそろく唯一の望みを無情に拒み通した。もし小森すゞの求めていたものゝ本態が「救い」であつたとするならば、私は遂に死に至るまでそれをかなえてやろうとはしなかつたのだ。しかも私には、たとえそれが安易な方法であるにせよ、彼女の擇んだものが最上のものでないとは斷言できなかつた。勿論それは、彼女のどうにもならないあきらめから來ているものには違いなかつたし、或はまた、私は醫者という職業が、人間の幸福に對して何一つとしてプラスになるものではないことも知つていた。だが、結局私の胸先につかえた滓のようなものは、いつまでも消え去ろうとはしなかつた。

患者への憎悪。

私は通りの悪い濕つたたばこをもみ消して、再び日記の上に眼を移した。

憎悪し合つた二人が、一應形の上では、一方は病を救う者として、一方は救われる者として、七十日ものあいだ顔を合わせて来たことは皮肉だつた。私は何故そんなにも憎悪に耐えなければならなかつたのだろうか。ビタミンや強心劑のアンブルを切る代りに、思い切つて致死量の毒藥を手に取りさえすれば、私と、患者と、そしてその家族までも、一時にそれぞれの立場における解放が得られたのではなかつただろうか。それとも、自己の憎悪に耐えることによつて愚かにも自虐の快感を覚えていたのだろうか。

だが考えてみれば、私の生活は畢竟患者への憎悪か、さもなければ病氣自體への憎悪でしかあり得ない。憎悪が私を病氣と闘わせているのだつた。小森すゝ

の場合は、言わばたまたま形にあらわれた、一つの例にしか過ぎない。私は私
の前で蒼白な顔をしている人間に無性に腹が立つて来る。私が健康である限り、
患者と私とは結局相容れない世界の人間同志である。いかに努力したところで、
患者の苦痛をほんとうの意味に於て知ることとはできない。彼女達は私に向つて、
自分の苦痛を臆面もなくさらけ出し、しかもそれはしばしば誇張されてさえ語
られるのだ。診察室のなかでは人間の弱さと醜悪さとだけが話される。そして
やがて彼女達は私の前にその患部を無作法に露出する。糜爛した粘膜。分泌液。
悪臭。私はそれらを烈しく嫌悪する。心から怒る。躍起になつてカメレオン水
で洗滌し、スルファミンを射つ。

そして、憎悪が私を病氣とたゞかわせる――

私は日記をとじた。それをしまおうとして机の抽出をあけた時、ふと昨日受取つた美智子からの手紙に氣がついた。私は花里と姓だけの書かれた角封筒を取出した。小森すゝの死が、一時このことを忘れさせていたのだ。私は明日美智子に會わなければならなかつたことを思い出した。

私はもう一度美智子の手紙を読み返した。それによつて患者への不快な思い出からのがれようとしてみた。

美智子が私に頻繁に手紙を寄越していた當時、彼女はいつもす綠色の野の引かれたレターペーパーを使つていた。だが、いまのこれはノートか何かの切れ端だつた。私はそんな所に現在の二人の距離を考えた。

御相談したいことがあるから別紙のところまでおこし下さい、とその文字は白々しく機械的だつた。そして同じノートの切れはしに、家の道順を示した略圖が添えてあつた。勿論それは美智子の家ではない。私はそこに書かれた佐伯

春恵という名前の、豫備知識さえなかつた。

けれど實際は、美智子の手紙がそうした機械的なものであつたからこそ、私は明日彼女の指定通りに出かけて行く氣になつたとも言えるだろう。私はこの手紙から今の美智子を知ることもしなければならない、無論私への感情を推測することもできない。機械的であることは、誇張された技巧よりも、むしろ無限の未知を含んでいる。

もつとも私が過去の女からの手紙を受取つたのは、決して美智子が最初ではなかつた。私は學生時代、随分と頹廢的な生活を送り、不良の仲間入りまでもしていた。というのは、私は、醫學校へ入學した當時、或る女から手ひどく裏切られ、それ以來、私はわざと自分で自分を惡魔的に處理して行こうとしていた。そして何人もの女を移り歩いた。復讐というあるヒロイックな言葉に、單純にあげられる年齢であつた。そのせいか、私は結婚してからも多くの女から

の、うらみごとや、甘言や、のろいや、その他それに類する手紙をつきつけられねばならなかつた。なかにはわざわざ私の家庭まで訪ねて来た女さえあつた。だが、私は今までそうした手紙に對して、一度だつて返事を書いたことはなかつた。私は彼女達の手紙が、言葉の烈しさにもかゝわらず、結局は多分に虚構をまじえたものであることを知つていた。私がそれに取り合ひさえしなければ、あとはそれなりでけりがついてしまうことを知つていた。私の家を訪問して来た女にしても、豫想に反して餘りに平凡な私の妻をみると、輕蔑と勝利とに安堵した顔ですぐ歸つて行つた。彼女達は異つた世界の人になつた私に對する、一時のからかいと好奇心だけしか持ち合わせていなかつたのだ。彼女達は一人として眞劍になつて私の結婚生活を破壊しようとはしなかつた。だが勿論、そうしたことには私の方にそれだけの原因があつた。私と知り合つた女たちは、私との交際を通じて、私から一片の夢も與えられはしなかつたはずである。私

はたゞの一度も異性に愛の言葉を捧げたことはなく、利那的な性慾の満足以外には、女に支拂おうとはしなかつた。そして、そうした私という男の正體は、おそらく相手の女達にも始めから割り切れていたはずであり、割り切れていながらも、彼女達は私との遊戯を拒絶しようとはしなかつた。だから、今の私がおもはや彼女達には何の興味もないのと同様に、彼女達が私に對してからかいだけの興味しかないのも當然のことと言わなければならない。情慾の意識外に屬する結果の分擔を、私ひとりが背負いこむというのではなかつた。

ところが、昨日受取つた美智子の手紙は、今までの女達の例に反して、餘りにも事務的であつた。そこにはからかいも、うらみごとくも、發見できなかつた。それが私には逆に異常に感じられた。私は卽座に彼女に會う決心をした。

私は火の氣の少くなつた火鉢に氣がつくと、それまで猫ごたつにあたりながら靴下をつくろつていた妻に、炭を持つて來るようにいつけた。

もうおそいからおやすみなさいよ、と、妻は立上りながらあくびをかみ殺した。

あゝ、と私は生返事をしたまゝ、美智子の手紙をゆつくりとしまつた。そして何故かまだ床に入る気にもなれず、私はぼんやりとスタンドの光を眺めながら、明日美智子の所へ出かけて行く口實を考えていた。妻はいつも私の往診時間を測つており、私はその時間を利用してどこかへ脱線して來るのを警戒しているのだつた。

美智子と妻とは以前同じ会社に勤めており、私はこの二人を同時に知つた。性格のまるで違つた女だつた。私は自分の結婚について考えた時、すぐにこの二人を思い起した。私が知つた女のすべてが、喫茶ガールや、女給や、不良少女ばかりであり、そうした影を持たない女といえば、わずかに彼女達二人きりであつた。私は兩者の選擇にかなり迷つた。美智子は理想的な女であり、それ

でいて教養と情熱とをあわせて持つており、幾分我まゝではあつたが、友達としてでは申し分のない女であつた。妻は一口に言つて無智に近かつた。結婚するまで私と美智子との關係を知らないような女だつた。けれど、結局私は美智子をえらばなかつた。美智子は私と訣れた後に於ても自己處理のして行ける女であり、その上私は既に彼女の肉體を知つていた。妻はそれとは反對であつた。

私達の夫婦生活は單調だつた。だが、美智子との生活にしたところで、それ以上のものになるとは思えなかつた。つまりは結婚生活などというものは、すべて平凡でしかないのだ。結婚生活に胸をときめかすようなものがあるとすれば、それはお互の自己欺瞞によるのではないだろうか。

私は一旦とじた日記を開くと、再びペンを執つて残りの空欄に書きなぐつた。

夫婦間における憎惡。

夫婦生活を「愛」の言葉で説明することは滑稽だ。しかし、もし兩性を結合するきすなを愛に求めないとすれば、お互が相手の憎悪にどれだけ耐え得るかと、夫婦生活を繼續させる要因になつていのではないだろうか？

2

私は美智子の送つて來た略圖を頼りに、佐伯春恵の表札をさがした。略圖は距離の觀念を正確に傳えてはくれず、同じような建て方の家を一軒一軒のぞきこむようにして歩いた。ラヂオはその朝氣温が氷點下になつたと報じ、雪を思わせる空が低く垂れ下つていた。外套のポケットに入れた手が冷たく、影はにぶくアスファルトの上に搖れた。私と美智子とをへだてた距離は、もう二年半にもなつていたのでつた。私は彼女が既に結婚しているかどうかさえ知らな

つたし、まして彼女が今更になつて私を呼び出した理由を豫測することはできなかつた。

私はみちみち美智子と訣れた時のことを考えていた。それは私にとつて一番不手際な、氣まずい結末のつけ方であつた。私はそれを思い出すたびに、きまつて後味の悪い苦笑を覺えずにはいられなかつた。もつとも、私にはこれまで「さよなら」を告げた上で訣れた女は一人もなく、會わなくなつたときがその女と訣れた時だと、勝手にきめていた。だから、美智子のときも私としてはやはりそのつもりで、妻との結婚がきまつてからも、美智子には知らぬ顔をして過していた。ところが、丁度妻のもとへ結納を持つて行くことになつていた前日のことだつた。當時、空襲のはげしかつた頃で、その前夜、私の附近一帯は一晚のうちに焼土になつた。翌日美智子は私の身を案じてすぐ見舞に駆けつけて來た。幸い、私のところだけが奇蹟的に類焼を免れたが、焼け出された知

人の家族が避難して來ていて、家のなかはごつたがえしていた。私は美智子を物置代りになつてゐる二階へ案内したが、階段のある居間を通る時、美智子は目ざとく私の結納に眼をとめた。取りこんでいたし、私もそこまでは氣がつかなかつた。美智子は二階へ上るとすぐに、「相手はどなた？」と、まともからきいた。詰問する口調でもなく、意外に落ち着いた瞳だつた。私は狼狽したが、事實を話すより他になかつた。けれど、私が妻の名前を告げても、美智子はわずかに視線を伏せただけであつた。心の準備のない私は、秩序を失つた言葉で喋りつゞけた。私は自分が如何にこれまで不徳漢であつたかを彼女に話し、私のような男とこれ以上交際してはいけないという意味のことを言つた。それは自分で自分を踏みつけてみせ、それを美智子の救いにしてやろうとする身勝手ではあつたが、私にはそれ以外の適當な方法が見當らなかつた。美智子は終始だまりこくつたまゝ涙さえみせなかつた。だが、そうなつてみると、私はいつ

そ美智子が泣いてくれた方がよかつた。無言は心の中をすつかり見すかされて
いるようでもあり、自責を強いられる思いであつた。私はやがて美智子の肩を
抱きよせた。美智子は侮蔑とあわれみをこめた眼で私をみた。けれど彼女はこ
ばまなかつた。

細い舗装道路が切れて一帯の焼け跡に移りかけた所で、ようやく訪ねる家を
みつけた。二階建てのかなり廣そうな家だつた。約束の二時はとづくにすぎで
いた。

何度か聲をかけて、やつと三十くらいの女が出て來た。二階でレコードをか
けていたものですから氣がつきませんでして、と、その女は派手な顔に表情を
一杯つくつて、愛想よく迎えた。成程、言われてみれば、玄關に入つた時から
テンポの速い音楽がどこかから聞えていた。ちよつと戸惑いしていると、さき

程から離れの方でお待ちしておりますからどうぞこちらへ、と、彼女は早口に喋つて立ちかけたが、そこで思いついたようにくるりと振返つて、私、佐伯春恵です、美つちやんの叔母ですの、と、あとは意味のないつくり笑いをして軽く頭を下げた。濃く眉を引いて居り、身に合つた洋装が和服とはちがつたなまめき方だつた。

離れは最近になつて建て増したらしく、木の香が新しかつた。案内してくれた佐伯春恵が障子をひらくと、視野一杯に赤いふとんがひろがり、そのふとんにくるまれたこたつに和服の美智子が背を丸くしてもたれていた。一寸待合にでも来たような錯覺だつた。私は敷居際につゝ立つたまゝ、美智子は私の方に瞳をむけたまゝ、しばらく二人とも口を利かなかつた。どうぞお入り下さい、と、佐伯春恵が言葉を残して去ると、待つていたように美智子が「おあたりにならない？ さむかつたでしよ」と、僅かに身をにじらせた。以前、美智子と

二人でこたつにあたる時には、きまつて同じ側に並んで手を入れたものだが、無意識にしたのか、或はわざとしたのか、美智子は昔と同じように、私の爲にその横をあけてたけれど私はそのむかえ側に膝を入れた。私達は心のわだかまりをはさんで向い合つた。それは埋めることのできない、二年半のブランクでもあつた。私はすぐに美智子の觀察を始めた。彼女の變りない若さのなかから、彼女が私以後に知つた男の匂いをかぎ出そうとしていた。

佐伯春恵が茶を運んで来て、二階にお客様がありますから、と、すぐに出て行つた。

「派手なひとでしょ」美智子が叔母を見送りながら言つた。

「先々月から二階を改造して、すっかりダンスに熱を上げてているの。會員制で、教師を二人交替で呼んでいるのだけど、許可がおりないものだから、内緒でやつてるのよ。叔母さん、以前は保険の外交員をやつてたことがあるの。御主人

はこの離れを建てるとすぐに亡くなつたけど、可愛そうなくらいだつたわ、まるで猫みたい、——若くみえるでしょう、あれで三十五になるの」

會話はそんな所から始まつた。六疊の部屋には季節外れの軸がかけられた床の間があるきり、何の調度もなかつた。平素は餘り使つていないらしく、何か清潔すぎる感じだつた。この離れまではレコードはきこえなかつたが、裏の家から調子外れの浪花節が流れて來た。だが、これはラヂオだ。

「いきなりお手紙なんか出して、びつくりなまつた？」

「封筒の字をみた時にわかつたけど、……やつぱり意外だつた」

「私、何度迷つたか、……ほんとうは二度とあなたにお會いする氣はなかつたの」

「まるで警察の呼出状みたいだつたよ」

「あれ以上書く勇氣がなかつたの」

御相談したいことがあるから来てくれという美智子の手紙が、單に私に會つてみたい爲の虚構でないことは始めからわかつていた。あゝした訣れ方をした私から、再び昔の仲を期待するような美智子だとも思えなかつたし、私としてもそこまで自惚れてみる氣にはなれなかつた。けれどそれにしても、彼女が今頃になつて、思い出したように私に持ちかけて來た相談というのは、全く見當もつかないことだつた。美智子の氣持としては「二度と會いたくない」と言つた今の言葉が恐らく正直なものに違ひなく、私に手紙を書くまでには、棄てられた男への屈辱を味あわなないではいられない彼女の氣性だつた。私はたばこをくわえると、それをくゆらしながら、なるべく口數少なになるように努めた。美智子の態度があきらかに何かを言ひよんどんでいるように見えたので、彼女を話しやすくする爲にも、だまつている方がいゝと思つた。私の吐いた煙が美智子の襟もとを這い上つた。美智子は、奥さんお元氣？ とか、あの手紙みつか

「らなかつた？ とか、お玄關の方いそがしい？ とか、そんな質問を途絶え勝ちにきいていたが、それも一しきり終つてしまうと、あとはこわばつた表情で口をつぐんだ。私はからになつた湯呑みを片手でもてあそびながら、いつまでも根氣よく美智子の言葉を待つた。

だが、結局美智子は話さなければならぬことがあるのだ。美智子はやがてきゆつと下唇を噛んだ。それが何かを決意したときの彼女のくせであつた。

「ね、磯谷さん、無理を承知で、あつかましい女だと言われることも覺悟で、おねがいがあるの」

美智子の言葉に、私はそれとなく緊張した。美智子はすつかり思いつめたままなざしになつていた。

しかし、すぐに期待は裏切られた。いよいよ何か重要な用件に入ると思つた豫想に反して、美智子の言葉は意外だつた。美智子は、彼女の姉が今どんなに

氣の毒な身の上にあるかについて話し始めたのである。姉の主人が先々月急病で亡くなつたとか、姑が氣むずかしい人なのでとても一緒にやつて行けそうもないとか、そしてその姑がどんな風にして姉をいじめるかまでも、こまかく説明し始めるのであつた。私はそんなありきたりの人情話を聞かせる美智子の眞意を疑つた。美智子の姉にはこれまでに二度ばかり會つてはいたが、こうした身上相談めいたことを持ちかけられるおぼえはなく、勿論私はそんなことには一向に不得手な方であつた。

私は美智子の話に次第に退屈してくと、その言葉をいゝかげんに聞き流しながら、記憶にある彼女の姉についておもつていた。すると、次第に私の心に、美しい肢體の持ち主であつた姉の幻影がひろがり始めるのであつた。美智子自身、私に狂暴な抱擁を強いる女だつたが、姉の方は、最初の印象から既にそうしたものを想像させる女であつた。

美智子の言葉はつゞいていた。

「ふたこと目にはお前のような嫁は早く出て行つてくれと言わぬばかりのことを言うの、……だけど、姉さん、今ではもう實家へ歸るにも歸られない身體になつてゐるの」

私はその時はつとして美智子を見返した。私はやつと彼女の言おうとしてゐる内容に氣がついた。私は自分が鈍感だつたことを思つた。考えてみれば、彼女のさつきからの話は、既に始めから一つの依頼を私に暗示しながら進められて來てゐるのだつた。それに第一、私は診察室のなかで、これと同じような遠廻しな切り出し方をする人達を、もう何人も經驗してははずだつた。たとえは、母親か何かゞつきそつて來、そして、「先生に折入つて御相談が」と言えば、もう大抵は間違ひなかつた。家庭の紛争や不和をくどくどと並べた舉句、きまつて最後は非合法的な手術の依頼だつた。私は婦人科醫としての自分の心

を取りもどした。そしてそれと同時に、裏切られたような憤りをおぼえずには
いられなかつた。よくせき考えあぐんだ上で書いた美智子の手紙であることは
理解できても、結局は利用されたという気持はどうすることもできなかつた。

「わかつたよ」私はこれ以上美智子に喋らせることの無駄を思つて、彼女をさ
えぎつた。「君の頼みの内容は想像がついたよ、——だけど……」

私はそこで言葉をのんだ。すげない拒絶の言葉を喉まで出しかけたが、ふい
と起つた別の考えの爲に迷つた。私は自分の思考をまとめるかのようにたすね
た。

「いつ、とまつたんだね」

「十月の二日ごろに、ほんのしるしがあつたきりなんですつて」

再び、私ははつきりと美智子の姉の幻影を心に描いた。そして同時に、私は
この手術に對して本能的な魅惑をおぼえずにはいられなかつた。それくらい、

私にとつて彼女の姉の記憶は、いつまでも強烈な鮮度で思い起すことのできるものがあるのだつた。私は美智子の姉の肉體に、金屬性の器具を挿入する時の自分を、そつと想つてみた。

私は最初、美智子の姉にはその婚家で會つた。美智子は當時私との交際を家族の者にも話して居り、兩親というのがそつとしたことには全々開放的であつたため、私はよく招かれて美智子の家に遊びに行つた。美智子としてはそつとして異性の友達を大びらで家族に紹介できるのが、自慢でもあるふうだつた。姑さんさえいなければ姉さんにも一度紹介するのだけど、と、美智子は時折そんなことを言つていたが、そのうちに機會があつて、私は美智子と二人で姉の家を訪問した。丁度姉の主人は會社の用事で旅行中であり、姑の方は岐阜の親戚へ出かけたとかで、家には彼女ひとりきりであつた。容貌も氣性もよく似た姉妹で、初對面の私に戀愛論をやつたり、音樂や繪について話したり、とにかく一

應話題も豊富であり、大いに私を歓迎してくれた。たゞその時も、姑の氣むすかしさを話のついでに聞かされた。が、それは別のこととして、私はその折美智子の姉の肉體に眼をみはづた。私は彼女の全身から來る、或種の印象におどろかないではいらなかつた。もつとも、私達は日常、女性の顔や外觀によつてその女の素肌の美しさを推察したり、豐滿な肢體からすぐに性的なものを思ひ起したりすることは、しばしば經驗してゐるけれど、そのとき私が美智子の姉から受けたものは、そうした種類のものとは可成りことなつたものであつた。やはり無意識のうちに養われて來た婦人科醫としての嗅覺がはたらいていたのかも知れないが、言わばもつと解剖學的なものに結びついた、……たとえば、局所の脂肪の沈着とか、粘膜上皮の柔軟さとか、隨意筋の發育とか言つたものに、關聯したものであつた。「姉さん、綺麗なひとでしよ」と姉の家を辭したあとで美智子が言つたが、私は別な意味でそれに同意した。二度目は美智子と

觀に行つた映畫の歸りに、廣小路かどこの街角で出あつたが、立話しだけでわかれた。しかしそのときも何氣ない會話のうちに示す彼女の肢體から、私は同じものを感じた。

そうした姉であつただけに、美智子の依頼する手術によつて、私の描いていた姉の幻影を、じかに視覺や觸覺によつて裏付けてみたい慾望があるのだつた。だが、一方、私の心のどこかには、それを否定する別な聲があつた。それは彼女が全く未知の女でないだけに、私の行爲がかえつて一層不潔に思われて來る爲の自制であつた。

矛盾した二つの思いに迷つてみると、美智子が決心を強いるように言葉をかさねた。

「磯谷さん、無理なことばかりお願ひするようだけど、もう一つきいていただきたいの、……ここで、このお家でやつていたゞけないかしら？」

「なぜ？」

「行きたくないの、私、あなたの奥さんを見て平気でいられる自信ないわ」

「姉さんひとりでいゝじゃないか」

「それじゃ姉さんが可哀そうだわ——ね、何もかも叔母さんにお話ししてあるの、このお家を借りるように頼んであるの」

私は心のふんざりがつかぬままに、するすると美智子の意中に縛られて行く自分を感じていた。

「消毒に困るんだが、……器具は僕が運ぶとしても、寝臺や、洗滌液や、……」

「お願い、——私、無茶をいうようだけど、……」

いきなり美智子が私の左手を取った。それまで、何か殻一つをへだてたぎこちなさで話していた美智子が、急に示した變化であつただけに、私は多少狼狽した。彼女のうるんだ視線が、訴えるように私をみていた。私は美智子の泣き

出しそうな顔を始めてみたのだつた。美智子の手が汗ばんで來るのがわかつた。

「どんなにしても御恩は返すつもり、——私、もうどうなつてもいいの」

美智子は私の手をとつたまゝこたつの上につゝ伏した。身近かに髪が匂つた。嗚咽しているのかとも思つたが、白い襟あしは大きく息づいているだけであつた。美智子の觸感と彼女の姉の幻影とが、私の頭のなかでもつれあつた。私は美智子が私の前に投げ出しているものが何であるかを知つた。私は美智子の身體が柔く弛緩しているのを見た。私が今、彼女にとられた手をそつと引き寄せさえすれば、私達の間に起る結果がなんであるかはわかつていた。だが、私はすぐに美智子への慾念を打消した。美智子を抱いたあとに、おそらく眞先に私の心を襲つてくるものの豫想がこわかつた。それが、彼女の姉についての代償を得たというだけの、空白感でないとは斷言できなかった。私はかつて美智子との訣れ際に經驗したような氣まずさを、再びこゝでくりかえしたくはなかつ

た。私はとられた手を離すと、美智子から眼をそらして言った。

「あさつて、二時ごろ、こゝへ来るよ」

「引き受けて下さるの？」

美智子が顔をあげた。その眼には安堵と同時に、まだ幾分の疑いがこめられていた。私はそれにおつかぶせるように、消毒やその他の當日の用意を早口に説明した。それは前線病院のような疎略な準備だった。

「私、本當に無理なことをお願いして、——勿論だめだと思つていたわ。けど、やつぱり、どうしてもきいていたゝかなきあいけないと思つていたの、——でもうれしかつた」

私は美智子の言葉を聞き流して、こたつに入つたまゝ外套と手袋とを引き寄せた。

「お歸りになるの？」

美智子が意外そうにきいた。あゝ、と私はぶつきら棒にこたえた。

「お忙しいの、ゆつくり話して行つて下さらないの？」

「だけど、もう僕達の用事はすんだのだよ」

私は必要以上にかたくなになつていた。私は立上ると、まつすぐに障子の方に歩いた。

「あなたは、患者の家へ来たお医者さんのまゝで歸つて行こうとなさるの？」

美智子の言葉が私を追いかけた。平手打ちをくつたような思いで私は振返つた。

「冷たくなつたのね、磯谷さん」

美智子も立上つていた。その顔がゆがんで、口許が僅かに痙攣していた。私はこたえられなかつた。

「お医者さん以外のあなたを期待していた私がいけなかつたのかも知れないけ

ど、……」喘ぐような、訴えるような聲だった。「顕微鏡が、きつとこんなにも磯谷さんを冷たいひとにしてしまったのね」

美智子はそこでほつと歎息してうなだれた。が、すぐに彼女の表情が變つた。彼女の瞳に敗北感への烈しい怒りがこみ上げて來た。

「歸つて、磯谷さん、——姉さんのことはお願いするわ」

私は廊下へ出た。障子が二人をへだてた。美智子は送り出ようとはしなかつた。

3

出迎えに出た妻の表情は崩れていた。おかえりなさいと言うのがやつとで、私の鞆を受取ると、顔をかくすようにして奥へ入つた。妻の様子から、私は美

智子に會つたことが露見したのに違くないと直感した。日記か、手紙かを讀んだのであろう。何時も私の机の抽出に注意している妻だつた。私はわざと妻には取り合はず、外出から歸つた時の習慣で、診察室に入つてクレゾール石鹼液で手を洗うと、冷えたストローブを焚きつけにかゝつた。薄いベニヤの單板がばちばちと音を立て、すぐに焰が上つた。私は手頃なまきを二三本投げこんだ。妻は夕餉の仕度をはじめたのか、食器の觸れ合う音が臺所の方から聞えた。

私はさつき別れ際に、美智子の言つた言葉について考えてみた。美智子は顯微鏡が私を冷たい男にしたのだと言つていた。その語調には、彼女のあきらめと、屈辱と、そして同時に私へのあわれみがこめられているのだつた。それにつけても、私は醫者と言う職業を通して私をみる、第三者の眼について思わずにはいられなかつた。私は或意味に於て、世間の人から好奇心を持つてみつめられてゐるのだ。醫者である人間が、しばしば彼等の眼からは特異なものよ

うに思われているのだつた。ときには世故にたけた粹人のように、ときにはバ
スツールのような大科學者に、またときには人體についての専門的知識を持つ
故に、心の秘密までも熟知しているようにさえ思われているのであつた。そし
てその爲に、私は冷たいとか、論理的だとか、その他それに類する多くの言葉
を聞かされていた。勿論、私の個性が醫者としての職業的なものに影響されて
いないとは言えない。しかし、私が今までに體得したものは、前にも言つたよ
うに、その殆どが開業醫としての狡猾さであり、少くとも美智子が形容したよ
うな、「冷たい」と呼ばれるものではなかつた。第一、私は開業以來、かぞえ
る程しか顯微鏡をのぞいた經驗は持たないのだ。今かりに、私の白血球の數の
分類測定をさせたら、たつぷり一時間はかゝるに違いないし、その上、その結
果がかなりな誤差がないとは受け合えなかつた。——いや、それよりも、私に
は「冷たい」という言葉が既に不可解であつた。冷たさとか、熱情とかは、一

體なを標準にしていうのだろうか？

部屋があたたまつて來た。たそがれが私の周圍をつゝみはじめた。妻が入つて來て私の後に立つた。

「電燈もつけないで、何してらつしやるの」

「寒い。すつかり冷えこんだ」

「勿體ない、ストーヴなんか焚いて、もうすぐお夕飯よ」

「あゝ、腹が減つた」

「美つちやん、まだ結婚してないの？」

妻がためらうようにきいた。それが妻としては精一杯の皮肉をこめた言葉だつた。

「知らないよ、きかなかつたから」私は平氣をよそおつて答えた。

「何の御相談だつたの」

「たゞつまらない話をしてわかれただけさ、相談なんてないよ」

「やつぱり、あなたにおあいしたかったのね」

「さ、御飯にしよう」

「なぜお手紙が来たこと私に言つてくれなかつたの」

「うるさいな。へんな邪推をされたくなかつたからだよ」

「私、叱られるかも知れないけど、……日記を讀んだの」

ふん、と鼻でこたえて、私は新しいまきをくべた。妻は私の意向をはぐかるようにそのまゝ黙つた。私はさり気なく机の上の新聞を取ると、薄暗い光を頼りに目を通した。妻が電燈をつけた。

「難病は無苦痛致死」——ふいに私の眼がこの小さな見出しに吸い寄せられた。

「ニューヨーク十四日發UP・ニューヨークの醫師たちは不治の病に悩む患者が自己の死を選ぶことを合法化せよとの陳情書を州議會にだした」活字の上に、

忘れていた小森すゝの顔が再び浮び上つて來た。傍からのぞきこむようにして
いる妻の視線が、私の思考を妨げる。私は僅かに頭を振つた。「患者が本人の
意志で死を選べば無苦痛致死させ、それには患者の署名入歎願書がある——」

小森すゝは七十日ものあいだ、私に死を懇請しつゞけた。彼女の聲は今だに
私の耳に残つてゐる。彼女は歎願書への署名を、どんなに喜んで書き入れたこ
とだろう。小森すゝ——たつた四字を、衰えた指に托して書くことによつて、
彼女はすべての苦痛から解放されたはずだつた。私は一つの課題に勇敢に解決
を求めて行くアメリカの醫師達を、うらやましく思わないではいられなかつた。
不治の病、子宮癌、——私はその他にも不治の病の名をいくつか知つてゐる。
私は今後もそれらに遭遇しなければならぬ。そして、私の患者への憎惡はい
つまでもつゞくのだ。

「私達の結婚、まちがつていたのかしら」

妻の言葉が私を引きもどした。私は新聞をおいて妻をみた。

「あなたは、私を憎悪していらつしやるの」

え？ と、私はきゝかえしたが、すぐにそれが昨日私の書いた日記について言つてゐるのだとわかつた。

「そうかも知れない」私は意地悪く答えた。が、その言葉にみるみる涙を浮べて來た妻をみると、私は幾分後悔しないではいられなかつた。

「私のような馬鹿な女が、あなたと結婚したのがいけなかつたのかも知れないのね。私、あの日記をみてそう思つたの。あなたにはやつぱり美つちやんのよなひとがよかつたのよ、——でも、私、愛して下さると思つていたの」
言いわけはしたくなかつたし、こたえる言葉がなかつたので、私はだまつていた。

「あなたは結婚する時にも、結婚してからだつて、私に一度も愛してゐるとは

言つて下さらなかつたのね」

「どうでもいゝじやないか」

私は顔をしかめて立上ると、さあ食事にしよう、もう一度妻をうながした。いやつ、と、妻はいきなり私の胸にすがりついたかと思つたと、「愛していると言つて」と、烈しく言つて顔を埋めた。

「美つちやんに會つたことなんか、なんとも思つてやしないの、だけど、あんなことを讀むと、私とても寂しいの。ね、愛していると云つて」

しかし、私はバカと軽く妻を離した。

夕食の間も、食事がすんでからも、私達はそのことには觸れなかつた。私が幾分怒つたふりを装つて机に向うと、妻はしよんぼりと裁縫箱を取り出した。

私にはわざと背をむけているので顔はわからなかつたが、時々涙をすゝりあげていた。私はコクトオの「阿片」をひろげたが、文字は眼に入らなかつた。流

石に後悔に似たものがあつた。私がひとこと妻に向つて優しい言葉をさゝやき、彼女にくちすけをあたえさえすればいいことはわかつていても、そらぞらしい思いが先に立つてできなかつた。自分自身依怙地と思われる程の態度で、これまで誰にも與えなかつた一つの言葉を、今になつて妻に告げる気にはなれないのだつた。

勿論、いまの私の感情のおもてに、妻への憎悪がざらざらと浮び上つていると言えば誇張になる。私達の夫婦生活は、少くとも現在までに關する限り、一應取り立てるほどの破綻もなく繼續されて來た。おそらく妻が、これまでに彼女の幸福を疑つたことはなかつたであろう。平凡のなかに安住して息づいて行ける妻にしてみれば、單調であること自體を、幸福という文字に置き換えてみて、それでのみこんだ顔になつてゐるのも無理はなかつた。單調を支えている支柱の危なげを檢討してみることもないのである。無事息災は愛の所産だと、

納得してゐるのである。けれど、一旦その支柱がくずれ、夫婦がお互の感情を生そのままむき出しにしなければならなくなつたとき、私達はいまさらのようにおどろいて、單調の裏側にかくされてゐるものの姿に眼をみはるのではなからうか？ 小森すゞの場合が、やがて私達に訪れないとは斷言できなかつた。

一方が肉體の健康を失つたとき、夫婦ははつきりと相互の感情を暴露しなければならぬ。私は私の往診先に於て、あまりにも數多くそれを肯定する家庭をみせつけられていた。そしてそれは、官能の享樂をお互が共有し得なくなるるとともに、一層露骨に示されて來るのであつた。辛じて保たれている夫婦の均衡のなかへ、私は愛などという安手な言葉をさしはさんで悦に入るほどの氣にはなれなかつた。

私は愛そのものの存在は否定しない。けれど、少くも私自身のなかにそれがあつたとは肯定できなかつた。愛とは自己を相手のなかに完全に歸一させること

であるとの私の定義に従えば、私はどんな場合にも燃焼しきらない「私」というものが孤獨のまゝで取り残されるのであつた。私は相手のなかに生きることができなかつた。私は中途半端な「妥協」の上に立つたものを愛と呼ぶことを許さなかつた。たとえ、私が自分の肉體の一部を異性の肉體のなかにすべりこませたとところで、これはたゞ二億か三億かの精虫を相手に移譲したという事實にしかすぎず、やはりあとには空漠と孤獨とが残り、「私」はあくまで「私」として残されるのであつた。否、私はその行爲のさなかに於てさえ、相手への完全な没入を経験したことはなかつた。私は妻の肉體を抱いている時、たゞの一度も妻自體のことを考えていたことはなかつた。大抵の場合、私は以前に知つた女達のうちの誰かのことを思い起していた。時としてはその日に観た映畫や小説のことを思つていることさえあつた。そして、そうしたことは、無論妻以外の女の場合にも變りなかつた。始めて私が女の肌を知つたときも、私は埃

つばい喫茶店の二階で、年長の女の身體を狂暴に抱きしめながら、中學時代によく電車で一緒になつた赤い髪の女學生の顔を追想していた。女との本能的な交渉が終りを告げた瞬間、私は始めて横にねている女をまざまざと意識し、待ち構えていた孤獨に襲われるのが常であつた。「君は或程度に於ける不感症なのだ」或時私の友人のひとり、そんなことを洩した私にむかつて言つた。しかし、その言葉は當つていなかつた。私は肉體の快樂を知らないわけではなかつた。たとえ私の腦細胞が性行爲のさなかによそごとを思つていようとも、私の末梢神経は普通どおりの快美感を傳達していることには變りなかつた。私はそのおせつかいな友人を憎んだ。同時に私は、動物的な交渉によつて自己を相手に歸一できる男を侮蔑した。

考えてみれば、私は最初の女に欺かれたのではなく、彼女から愛を期待していた私の方が誤つていたのである。お互の完全な一致があると思つていた私が

おろかであつた。私はそれ以來、愛とか戀とかいつた言葉を、輕々しく使う人達を信用しなくなつた。異性に對する自我の滅却を完全に行い得る人が、私には萬人にひとりもあるとは思えなかつた。彼等の言う愛とは、決してほんとうの意味の愛でも何でもないので。「同情」か、さもなければ「好惡」の感のうちの「好」のパーセントの多いものを、「愛」として自己の内心に肯定すけ、いかげんな所で妥協しているのにすぎなかつた。最初の女に失敗した私は、間もなく不良の世界に自分からとびこんで行つた。どの女も、底を割つてみれば、結局うそつばちしか持つていないと信じこんだ私としては、一そはつきりと偽善の假面をかなぐり捨てた不良の世界の方に、はるかに心をひかれた。彼等の世界では愛などという生やさしい言葉は通用しなかつた。勝つか、敗けるか、たゞそれだけがあつた。女の肉體を獲た時が勝つたときであり、代償なくして女に逃げられた時が敗けたときであつた。「畜生、敗けるものか」私はこの言

葉を自分自身に言いきかせる合言葉として女から女を移り歩いた。けれど、やがて私は美智子を知り、今の妻と知り合いになつた。そしてこの二人ともが、夫々ことなつた形においてではあつたが、私はそれまで自分を處して來た合言葉の對象とすることはできなかつた。美智子の場合には、私は例によつて「畜生、敗けるものか」と心に言いきかせながらも、私はいつしか彼女との勝敗に結末をつけることをさけていた。一旦女から得るだけのものを得てしまえば、あとは二た月とその女との交際を持つたことのない私だつたが、美智子だけは例外であつた。私は美智子の肉體を知つてからも、彼女とわかれようとはしなかつたし、むしろ前にも増して親しさを加えた。私の心はなぜか美智子に「勝つ」ことをそれ程までに欲しなかつた。氣がついて、私は惡魔的な自分を取り戻さうとするのだつたが、美智子と會つているときは、勝敗よりも彼女との時間を少しでもたのしく過すことの方に、より多く心を使つていた。美智子は不思議

な女であつた。が、妻の場合には始めからちがつていた。彼女は何の疑いもなく、すぐに私にもたれかゝつて來た。勝敗の對象とするには餘り張合いのない女だつた。私は俗にいう、「のれんに腕押し」を経験しなければならなかつた。彼女は私の持ち合わせた測定儀では測ることのできない女であつた。私は多くの女たちの經驗からも無智を測定する方法だけは學ばなかつた。私は妻と四回目にあつたとき、彼女を京都への旅行にさそつた。彼女はためらいもなくそれに應じた。旅行の持つ意味さえ知らない女だつた。二泊三日、私はそのあいだ、遂に彼女の身體に觸れることもなく同じ床ですごした。彼女は無邪氣に京都の風物を喜び、夜は安らかに眠つた。私は彼女と京都へ行く前日、新しく廣小路で知り合つた不良少女と岐阜へ一泊旅行し、一晚中その女から烈しい接吻を浴びせかけられ、しまいには唇から出血するまでに噛まれた。そうした直後であつただけに、私は餘りにも勝手の違ひすぎる思いに、尙さら施す術もなかつた。

その後も、私は結婚までに何回か妻と同衾したが、最後までその身體には一指も觸れなかつた。……私は美智子や妻が私にしめしたものが、愛であるかどうかの判断に迷つた。そして私はそれを肯定することをおそれた。しかし、たとえば彼女達の示したものが愛であつたと假定しても、彼女達に對していただいたものはやはり愛ではなかつた。私は彼女達の場合に於ても、どうにもならない「私」を忘れることはできなかつた。が、私はやがてこの二人のうちから私の結婚の對象を撰ぶことに決めた。二人は私に向つて始めて愛に近いものを示してくれた女であつた。そして私は結局美智子の方をすてた。私は擧式の三日前に、妻となるべき女に性教育を施した。彼女は熱心にきいた。私は生殖器の名前をドイツ語やラテン語でなく、日本語で話してやらなければならぬのに幾分當惑し、話しにくかつた。私の二十二歳の三月だつた。

「美つちちゃん、——ほんとうにどんな御相談だつたの？」

妻がだまつていることの氣ますさにたえかねたように言つた。私は我に返ると、一行も讀んでいない本を伏せて彼女をみた。そしてひるまの美智子の頼みを、そのまゝ妻に告げてやることの可否について考えてみた。

4

腰椎麻酔を施した美智子の姉は、手術臺の代りにした机に毛布を敷いて仰臥していた。私は入念に手を洗いながら、改めてそうした彼女の身體を觀察していた。これから取りかゝろうとする行爲への心構えを、しつかりと自分につくる爲でもあり、いま一つには、それまで手術に必要な診察や前處置を施すあいだ、ときめきに似た一種の興奮を覺えずにはいられなかつた私の心を、落着かせるためでもあつた。美智子の姉は軽く眼をとじていた。露出された下腹部が

大きく波うつて、彼女の不安を代辯していた。火鉢は机の兩わきに二つ入れてあつたが、彼女の肉付きのいい大腿部にはこまかい鳥肌がみえた。美智子は姉の希望もあつて此の部屋に残つていたが、わざと視線をすりガラスになつた窓の方へ送つていた。が、やがて、薄いゴム手袋をはめた私が手術臺の前に坐ると、美智子の眼は吸い寄せられるように私の手許に移つた。同性の秘密を知ろうとする本能的な好奇心と、一つの負擔に耐えている姉に向つてのいたわりとが、美智子の瞳をかどやかさせた。私は何とはなしにちらりと美智子の方を一瞥すると、すぐに手術臺に向い合つた。腔鏡が挿入された。手術が始まると私はもう口を利かなかつた。頭にあつたすべての妄念を、私はその瞬間に完全に忘れ去るのだつた。もしも私に歸一に近いものがあるとすれば、こうした時間だけが、私に許されたたゞ一つのものであつた。五番、六番、十番、と、デラタートルは軽い抵抗を手に傳えて、子宮口を擴張しながら通過する。そのたび

に、うすい血を混えた粘液が金屬棒の先にねばりついて出て來た。十五番、――私は砲盤錐子かんしを取りあげた。ぶざまな恰好の器具が、小さな生命の萌芽にむかつていどみかゝつた。わずかな觸感を頼りに、私は慎重にそれを引き出した。魚齒のようなこまかい棘とげを持つた錐子の先に、血まみれな肉片がはさまれてあらわれる。それが今、私の手によつて、此の世の空氣を呼吸することなくして母胎から剝離された、一個の生命であつた。だが、私はそれを無雜作に汚物入れのなかに捨てた。そして私は更に新しい肉片をまさぐつた。血が、ゴム手袋を通して、私の手に生あたくかい感觸を傳えた。私の白衣の袖がよごれる。消毒器代りの鍋から立上る湯氣が、私の頬のあたりでもつれた。患者がかすかに息すいた。鉗子で充分に内容を除き去つたあと、私の手には有窓鈍匙どんぎがそれに代つた。子宮内膜が大きく搔搔把とされる。音にならないかすかなきしみ、筋層にまで達したことを傳える。血の匂いがクレゾールの刺戟臭にまじつた。手術は

二十分とはかゝらなかつた。

「さあ、それで静かにねかせておけばいゝよ」

私は手術臺の前を離れると、指の一本一本をブラシでこすりながら美智子に言つた。自分が今おこなつた行爲への反省はなく、たゞ手術後のこゝろよい疲労だつた。美智子は暫く放心したようにしていたが、私の言葉に氣がついて、あわてゝ叔母の佐伯春恵を呼んで、姉を別室に運び去りにかゝつた。すみませんでした、と、患者が幾分蒼ざめた顔で私に小さく言つた。私はふいに、既に身すくろいされた彼女の身體を、もう一度眺めてみたい衝動におそわれた。

「ほんとうに御心配かけて……」

私が火鉢によつて冷えた手をあぶつてみると、美智子がやがてもどつて来て、緊張した顔で言つた。

「でも、私、今つくづくそう思つたわ。磯谷さんが冷たい人になつてしまった

のが、やつとわかつた気がしたの。あゝした環境に毎日とじこめられていた。私だつて人間が變らないとは言えないわ」

美智子の口振りに冗談めいたものはなかつた。私が一昨日わかれ際にきかされたのと同じような言葉に眉をよせた。やはり、醫者という職業に結びつけて考えられている自分だと思ふと、不愉快であつた。「患者の家へ來たお醫者さんのまゝで歸つて行くとなさるの？」と、あの時私に怒りをこめた皮肉を浴びせかけながらも、その實、美智子自身、私を醫者というわくのなかで眺めていたのではなかつたか。

私は崩れた炭をなおしながら、「冷たい」という言葉についてもう一度考え直してみた。そして、結局私は「冷たい」という言葉すら、もはや信用することのできない男になつていたことに気がついた。冷たいとか、或はその逆に情熱だとか、そうした餘りに抽象的な言葉の無意味なことを私は知つている。抽

象は一つのものをはかる規矩にはならない。すべてのものは抽象のわくのなかから足をはみ出す。抽象はものの本態を定めるについては何の效能も持ち合わせない。一切のものは多面性に於て存在する。智性だけで生きて行ける人があるとも思えないし、またバツションだけで身を處して行けるものでもない。私達は燃焼と冷却とを、交互にはたらかせている。しかもその燃焼は常に不完全燃焼でしかなく、冷却は氷點にまで達することはできない。私達は徹し切れない中途半端なところで、うやむやと浮遊しながら生きて行く。そしてそれが矛盾ではなく、私達の本態である。だから「冷たい」などという言葉は、つまりは「愛」と同じく、たゞ自己内心の肯定に於てのみ容認されるものに過ぎない。

そんなことを考えながら、私が炭を火鉢のなかであちらこちらに置きかえているところへ、佐伯春恵が入つて來た。

「鈴子さん、とても静か。何ともないそうですわ。心配しましたけど、……しつかりしてらつしやるのね」

美智子の叔母は例によつてよく喋つた。おつかれになりましたでしよ、とか、お医者様つて御仕事も大變ですのね、とか、私こわくてとても手術なんか見て居られませんの、とか、わざとらしい言葉を愛想よく言つた。そして私がいゝ加減に相槌を打つていと、ふいと思ひ出したように、

「さあ、あなた達お二人で、お二階の方へ行つて少しお踊りになりませんか？ 今日ほこんなふうですので、會員の方はみんなおことわりしましたから、誰もおりませんのよ。そのあいだに、私は何もできませんけど、バンドでも焼きますから」

佐伯春恵は私の返事も待たないで、さあさあとせき立てるように念を押してから、妙に落着きなく部屋を出て行つた。何かをすつかり心得切つた感じで、

私はいやなものを味わつた。私と美智子とを眺めている叔母の眼には、野卑なものがあつた。だが、私は次の瞬間、美智子の言葉におどろかされた。

「ね、踊つて下さる？」

美智子は私のかゝっている火鉢の前に來てしやがむと、私の顔を真直ぐに見た。いくらか甘えかゝるような言葉に反して、その眼が燃えていた。私はぎくりとした。が、すぐに私は不快を増した。叔母の心得切つた態度も、結局は美智子に言い含められていたせいのように邪推されたのだつた。私は美智子の眞意を疑つた。私は美智子の瞳の奥から、彼女が私に求めているものを知ろうとしてみた。おととい、姉の代償としてその身體を私の前に投げ出し、それを結果に於て私から拒絶された美智子が、今になつて何を私から期待して踊ろうと言ふのだろうか？ 或は、屈辱への復讐に似た心で私を求めているのではなからうか？

「踊ろう」

私はきつぱりと言つて立上つた。美智子の求めているものが挑戦だとすれば、私はそれを避ける必要はないのだ。少くとも逃げることは私の心が許さなかつた。

二階は三部屋をぶつ通して板張りに改造してあつた。正面の壁に大きな姿見が取りつけてあり、長椅子が一つ、腰かけが五つ六つ適当な位置に配置してあつた。美智子は電蓄の傍に寄つてレコードを一枚一枚えらんだ。

「タンゴでいゝかしら？」

やがてレコードが鳴り出した。私は美智子の肩を抱いた。忘れていた何かふつと心によみがえつた。ほかに人氣もない部屋に、二人だけの影がもつれあつた。それは狂態めいた舞踏でもあつた。だが、すぐに私は美智子のステップの鮮かさに眼をみはつた。にわか仕込みの私のダンスではとてもリードするこ

とはできなかつた。一體、ホールなどで幾組かの踊りをみても、遊離感の見えないダンスは少ないものである。音楽からか、パートナーからか、ホール全体の空気からか、或はその他の何かから、大抵はどこかで多少ずれているものであつた。ところが美智子にはその遊離感というものが全くなかつた。なにもかも、びつたりと身につけて、巧みに足を運ぶのだつた。音楽とステップとに、無意識に陶醉しているふうであつた。「うまい」と、私は思わずつぶやいた。美智子は、ふふつと鼻で笑つた。

「だめ、年期が入つていないから」

二年半の間に於ける美智子の生活の一端に、ひよいと觸れた思いがないでもなかつた。曲のせいもあつたが、女の身體の動きは官能的であり、私はじりじりと私の内部にくい入つて來る美智子を意識しないではいられなかつた。

「クレゾールの匂いがするわ」

美智子がさゝやいた。何でもない言葉だったが、私はそれをおそれた。私の體臭を追想している美智子に氣がついたのだ。美智子の言葉に誘われたように、私は或る意地の悪さをこめて言つた。

「君が始めて僕に抱擁を許した夜、君の身體は汗くさかつた」

それは極めてまずい應酬の仕方だったが、私には別の考えがあつた。美智子は果してむつとした。

「失禮ね、何故そんなことをいうの、……むし暑い日だったのよ、あの時は」
私は踊りながら續けた。

「君は汗性だった。少し歩くと、すぐに鼻に汗を浮べた。……今だつて、きつと、ほんの二三回も踊れば、この寒さに君は汗をかくに違いない」

「それがどうしたつて言うの」

私は答えの代りに幾分亂暴にターンした。膝が觸れ合つた。

「磯谷さんは」美智子が私を正視しながら言った。「私の身體は何もかも、——もうすっかり知りつくしているのだという意味のことをおつしやつてい——

音楽が終つた。私達は腕を解くと、そのまゝの姿勢で暫く向い合つた。レコードがガーガーと同じ所を回轉した。私はやがて美智子から離れると、大腿に電蓄に近よつてレコードを止めた。そして私はポケットからたばこのケースを取り出した。だが、その手が美智子の手によつて押えられた。

「もう一曲お願いするわ」

なかば命令するような口調だつた。私は開きかけたケースをしまつた。美智子が再び同じタンゴをかけた。私は無言で美智子の肩に右手を廻した。美智子はゆるやかに旋回する。

「あなたは私の身體を知つていらつしやるわ。だけど、私の心は知らないのよ」

姿見に、抱き合つた二人の像が映り、瞬間に通りすぎた。

「おとといも、今日も、私は同じ着物をきて來たの、……あなたに最初におあ
いした時の着物なのよ、……もうすつかり派手になつてしまつたけど」

美智子は何時しか逆に私をリードして踊つていた。私はたゞ美智子の足に合わ
せてステップをふむだけだつた。そしてこのまゝ、私は美智子の求めている時
間にまで、やがて引きすられて行くのだろうか。美智子は私の胸に片頬を埋め
て、しなだれかゝるような恰好で踊つていた。

妻は私の歸宅したのも知らないで、夢中になつて本を讀んでいた。言葉をか
ける氣にもなれず、私はほんやりと妻の後に立つて、その姿を焦點のない眼で
見下していた。その氣配に妻が振り返つた。

「あら、いつおかえりになつたの」妻はいたすらを見つけられた子供のよう

あわてゝ本を伏せた。

「退屈だつたから、あなたの本棚から抜き出して來たのよ」

「なにを讀んでいたんだ」私はみすかされたくない自分の心をかくすように、すぐに訊ねた。

「いや、恥しいから」

「なんだ、見せてごらんよ」

私が腕を伸ばすと、妻はそれ以上はさからわなかつたが、面映ゆ氣に笑つてみせた。

「結婚の生體、——おもしろいわ、この小説」

私は一旦手に取つた本を投げやるように妻の前に返した。こうした小説を夢のようにあこがれて讀んでいる妻に嫌惡があつた。妻の氣持は私には推測できなかった。小説の表面を素通りして、そこに描かれた夫婦生活の幸福さだけに興奮し

ているのだ。そしてそうした空想を、私達の現實の生活を混和しようとしているのだ。私は「つまらない」と、吐き出すようにつぶやいた。

「だって、私達に似た所が澤山あるのよ」

「似てるものか」

「似てるわ。そつくりの所があるの。私、ひとりで思い出して笑っていたの」

私の否定が心外だったのか、妻は眞剣な顔で、私達と小説との共通點を指摘し始めた。たとえば、私達も結婚前に丁度こんなことを喋り合つたとか、結婚後三日ばかりは、私達もこの小説と同じに肉體關係なしで過したとか、結婚して間もなく、私が過去に他の女を知つていたことがわかつて泣いたとか、寢室の會話がどうだったとか、——聞いているうちに私は次第に烈しい焦燥を覺えて來た。言うまでもなく、私とその小説とのあいだには、餘りに大きな距離があり過ぎた。それは現在の私達の夫婦生活への反省でもなく、勿論小説への羨

望でもなく、たゞそらざらしさへの反駁であつた。第一、私は此の小説の主人公のように、妻を教育しようなどということは一度だつて思つてみたことがなかつた。それだけの自信もなかつたし、根氣もなかつた。ひとを教育しようとして眞劍になればなる程、結局それが自分自身の上にかえつて來ることは明らかな事實だ。そして自分自身の究明が不可能な限り、對者的な教育などというもの、永久に附焼刃の域を脱することができないのだ。私は夫婦生活に於ける技巧について疑問を持つてゐる。教育するとかなんとか言うものゝ、私に言わせればそれは畢竟「技巧」の變形でしかあり得ない。勿論、私達が全くの技巧なしで生きて行けるものでないことはわかつてゐる。如何に私達がすつ裸の世界を願つた所で、人間は原始の時代に於てすら既に幼稚な技巧を持つていた。けれど、私の考えによれば、技巧には自己を主張するための技巧と、自己を欺瞞するためのそれとの二つがある。そして私は、自己の姿をより眞實に現した

めに使用される技巧だけしか、その意義を認めることができない。「教育」という體裁のいゝ假面を剥げば、夫の得手勝手をいつわる爲の技巧が、みにくくさらけ出されるのだ。——「結婚の生體」の主人公は、寢室に灯をともしことは、お互いの尊嚴を失い、晝間の生活を夜の生活の連続たらしめるおそれがあるからと言つて避けている。そしてそうしたことによつて、家庭生活を清潔な氣持よいものにしようとしている。だが、一體なぜそんなことをしなければならぬのだろうか。清潔な家庭とはどんなものを指すのだろうか？、私は妻との寢室に灯をつけるのをためらつたりなぞはしなかつた。それが私達の性行爲に對して一層の快樂を與えてくれると思われる場合なら、電燈もまた私には必要である。動物的な興奮にひきゆがんだお互の顔をみることが、私達のひるまの生活を破壊する原因にはならなかつた。それくらいのことではぶちこわされるものだつたら、むしろ性行爲などは行わない方がましである。肉體の暴露によ

つて傷つけられるお互いの尊嚴なら、そんな上つ面だけの取りすました偽善者振りはかなぐりすてしまいたい。いや、それよりも、なにがお互の尊嚴だといふのだらう？、もし小説の主人公夫妻がお互を真に愛し合つてゐるのなら、ほんとうの愛には尊嚴もへちまもないのだ。絶體の歸一はも早相手を意識しない。尊嚴などという言葉のなかには、やはりかたくなな「自己」が介入してゐるのだ。

「本當に進歩した愛は與へる愛でなくてはならんと思ふ。奪ひあふ氣儘な愛ではなくて相手を生かし育てる愛情だ」——口先の定義なら私はもう澤山だ。なぜ多くの人は自分自身をいつわろうとするのだらう？ 私は妻に與える何物も持たない。妻から求めるべきも知らない。私はあくまで孤獨なのだ。

「おい、踊らうか」

突然私が妻に言つた。唐突だつたので、妻はきよとんとして私をみた。だが、

私は真剣なまなざしだった。

「踊つて下さるの？……うれしい」

妻はやつとよろこびを顔に現して立上ると、机や座ぶとんを取片付けて部屋を廣くし、ポータブルを押し入れから出した。

「何がいゝかしら？——ブルースになさるー

「クイックにしよう。テンポののろいのは御免だ」

私は狂暴なまでに目まぐるしい旋回がしてみたかつた。レコードがいくらか調子のすれた音を立て始めた。ターンからターンへ、私はいきなりから妻の身體を振り廻すようにして旋回した。美智子との苦汁に似た記憶が頭をかすめ、私はそれを無理に追ひ拂おうとつとめた。憎悪しながら抱いた昔の女。——疊がきしんだ。苦しいわと妻があえいだ。だが私はそれに構わなかつた。私は妻の身體から何かをさがし出そうとしているのだつた。旋回するたびに私の腕に

傳わつて來る妻の體重から、私は知ろうとしてゐることがあるのだつた。

私と妻とを結びつけてゐるきすな。——そこに殘された疑問があるのだ。歸一のない私が共に寢、共に暮してゐる女との間に、私のまだ知らない秘密がかくされていなければならなかつた。愛でも、性行爲でもない何かと、私を妻に結んでゐるのだ。

尺度のくい違いが私を妻と結婚させた。私の測定儀でははかることのできない女を、私は半生の伴侶としてえらんだ。そして今もまた、その尺度の違いが、私と妻とを結合してゐるのだろうか？ それとも、やがてそれが、私達の間をへだてる最大の溝ともなるのであろうか。

「無茶よ、そんな踊り方」

妻が息をはずませた。私はいつしかリズムを無視した旋回をつづけていた。

麻

藥

お願いします、とあわて氣味の聲で入つて來たのは、近所の派出所にいる顔見知りの巡査だつた。ひたいからこめかみ、首すじのあたりにかけて埃をまじえた汗がすじを引いており、その汗を、帽子をあみだにおしあげながらぐいと平手でぬぐい、今度はその濡れた手を自分が乗つて來た自轉車のサドルになすりつけた。巡査のうしろには、五十年輩の男と二十前後の女とが立つてい、二人ながら自轉車をひいていた。年輩の男の右手にまきつけられた手拭から、どす黒い血がにじみ出しているのが、私の職業的な眼を惹いた。怪我ですか、と

たすねると、巡査は、衝突したんです、とまだ落着きを取りもどさない聲でこたえ、連れて来た二人の方を振りかえつて、なかへ入るようにあごをしやくつた。男の方が待ちかまえていたように玄關にありがこみ、私の先に立つて診察室のなかに入つた。何かぶつくさ口のなかで言つていたが、早口なのと、聲が小さいのとで、私にはわからなかつた。男につづいて巡査、そのあとから若い女がおびえたように肩をすぼめながら入つた。出血はまだつづいていたが、傷はそれほどはなくて、腕關節のあたりから示指のつけ根へかけての、長さ八糎くらいの筋層に達しない裂創だつた。私はすぐに看護婦に縫合の用意を命じ、巡査にむかつて傷の軽いことをつげた、そうですか、と巡査は安堵したように笑い、又平手で顔の汗をなせてから、このひとつものん氣ですよ、すぐお宅の前で衝突したんですから、さきに先生のところへお伺いすればいいのに、ぶつかつた相手の娘さんを引張つて交番へ來、それからまたひき返してこちらへ

來たんですからね、出血も多いでしょうに手間のかかることをするものですよ、と、その語調は、男の行爲をさげすむとともに、つまらぬことで引き合いに出された自分を迷惑がつていふふうでもあつた。すると、寢臺の上にていた男は、巡査の言葉をもみ消そうとするように、そのとき急に大げさになりはじめた。看護婦が忍び笑いをもらすと、男はしかめ顔のかけからそれをにらんだ。

誇張された苦痛も不愉快だつたが、私はこうした患者がとかく治療を充分に行わせないので知つていた。一體が私達の職業は、自己の治療に對して忠實であるほど、患者には怨まれがちなものであり、病氣の治療とメスによる疼痛とを天秤にかけて上、敢て切開の方を捨て去つてしまふ患者が、餘りにも多いのだつた。私はすばやく手を洗つて處置に取りかかつたが、男は果して悲鳴をあげた。砂の一面に入りこんだ創口はかなり厄介で、ふき綿がふれるたびに、患者は足をばたつかせて身をもがき、縫合にかかると看護婦が男の身體をおさえつ

けなければならなかつた。氣の弱い人だなあ、と巡査は細い眼をしばつかせい、何日くらいかかりますかとたずねた。私が二週間とこたえると、ふうん、と何を感じたのかひとり大きくうなづき、かかえて來た書類を取り出してそれを繰りはじめた。私はにほこに火をつけて椅子に腰をおろし、軽い疲勞をなつかしみながら巡査の手許をぼんやりと眺めていたが、巡査は氣ぜわしくあちこちのページをくり、時々視線をあげて室のなかを見まわしてみたり、衝突事件の二人を交互にながめてみたり、一向に落着きがなかつた。患者はまだ寢臺の上上半身を起したまま、うらめし氣に眞新しい繻帶の右手をみつめ、若い女は顔を伏せて椅子により、横眼で巡査の方をぬすみみていた。しばらく沈黙がつづいた。私が眼顔で合圖すると、看護婦が茶を入れに奥へ立つた。巡査はやつと書類から眼をはなして顔をあげ、口をもぐつかせて何か言おうとしたが、うまく言葉が出ないらしく、また細い眼をしばいた。三十を少しこしたばかり

りと思われるのだが、面長な顔はしわだらけで、彼が發聲したり笑つたりするたびに一そうそのしわが數をまし、へんにひねた印象であつた。管内を歩いてゐる姿はしばしばみかけるが、膝關節をのばし切らない歩き振りは、ひよこひよことおどつてゐるようにもみえ、戸籍の異動調査に来るたびに、私が同人雜誌に關係してゐるのを知つてゐるせいか、きまつて、一度ゆつくり文化方面のお話がきききたいと言ひ、しかも一度も來たことはなかつた。好人物なことは、どもり氣味の早口にもあらわれていた。看護婦が番茶をはこんで來ると、ひよこんと頭をさげて受け、一口すすつてから若い女の方にむきなかつた。君がその、つまり、君の方からぶつかつて行つたんだね、とまるで彼の方がとがめられてゐるような訊きかたであつた。女は、はあと言つたきり、一そう深くうなだれたが、寢臺の上にならぬ男がすぐにそのあとを引き取つて狀況の説明をはじめた。要するに、男のいうところを綜合してみると、自分~~は~~ちやんと左側

を通行していたが、この女が自轉車をとばして路線を横切つて來、とつさだつたのでかわすひまもなく、前輪に突當られ、自分はアスファルトの上にひつきりかえつた。そのときはあつと思つただけだが、立上つて氣づいてみると、右手から血がしたたつており、血をみてすつかり上氣してしまい、前後の見さか
いもなく、女を引張つて交番にかけつけてしまつた、と言うのだつた。男は自分
分が左側を通つていたということ、女が横からぶつかつて來たということ、
何回もくりかえした。巡査はうなずきながらきいていたが、男の話が同じとこ
ろを堂々めぐりするのに次第にじれてくると、眉をひそめながら左膝で貧乏ゆ
るぎをはじめ、鉛筆の先をさかんになめた。その通りかね、と巡査はいいかげ
んのところで男の言葉をおさえて女にたずねた。女はこくと一うなづいた。
君の方からぶつかつて行つたんだね、と巡査が念をおすと、女はまたもうつむ
いたままこくと頭をたてに振つた。こまつたなあ、と巡査は私の方に救いを

もとめるように視線をむけ、いま交通事故はとでも取締がうるさいから、これはそのまま報告すると厄介なことになりますよ、なにしろ無灯火でさえやかましいですからね、まして怪我をしたとなるとねえ、と再び私の方に何かをさそうような視線だった。私はこみあげてくるおかしさを我慢して、わざと意地悪くだまつていた。人の好きそうな巡査が、この事件をどう處理するか、最後まで傍觀してみたい氣持であつた。巡査は私の無關心に氣の毒なくらいうろたえ、又氣ぜわしく書類をくつてみたり、鉛筆で耳をほじつてみたり、やがて誰にもなく規則第何條やらを小聲で讀んでみたりした。然し、結局私はいつまでもだまつているわけにはゆかなかつた。巡査は明らかに私が第三者として發言するのを待つてゐるのだし、それに氣がついてみれば、女の方も遠慮がちな視線を下眼づかひに私の顔にそそいでいた。私は億劫さと、心のひるみを押し出すようにして口を開いた。どうです、何もこれくらいのことで一々お巡りさん

の手をわすらわすこともないし、それにどちらからぶつかつたところにしろ、まあいわば双方の不注意でもあり、お互の災難でもあるから、一つあなた達二人で適當に話し合つてみたらどうですね、と、私が二人を交互にみながら話すと、巡査はそれを待つていたように、そうそう、まあこんなことは示談にしてもらうんですねえ、と、にわかにか元氣ついた聲で應じた。だが、二人で適當に話しをしてくれといつたところで、こうなつた以上結局私が仲介の勞をとるよりはかはなかつた。おせつかいなことでもあり、私としては一番不得手な仕事ではあつたが、乗りかかつた船といつた形になつてしまい、私は巡査にことわつて、まず男の方を奥の部屋にみちびいた。男はさすがに恐縮した態度で、私がかぶとんをすすめても敷こうとはせず、中腰にしがんだままの姿勢であつた。結局あなたの希望としてはどの程度の條件で話をつけるつもりなんですか、と、私は極めてまずい質問ではあつたが、さつきからの男への反感もあつて、

いきなり真正面からたたみかけた。男はそれに對して、へえ、といった間のびのした返事をし、左手でもぞもぞとポケットをまさぐつてたばこを取り出し、私のすつてやつたライターで火をつけてから、もう一度へえとくり返した。が、私はそのとき、男の瞳の底をかすめた、するそうな光をみのがさなかつた。さつきも言つた通り、衝突などというのはお互の災難なんだし、さいわい傷も輕かつたことだから、こんなことぐらいで賠償だとかなんとか荒立ててみても面白くないでしょう、と私が半ば豫防線を張るつもりでそう言葉を重ねると、男はやはりまた、へえとこたえた。不満そうでもあり、何か含んでいるようでもあり、私はこの返事に鼻白んだ。いらだつて來た私がかつこつと卓の端を指先でたたいでも、男はたばこばかりをくゆらしていた。がやがて、私も先々月女房を亡くしましてね、と、そんな思いがけないことをぼつんと言つたかと思つと、最初私の家へ入つて來た時と同じな、ぶつくさと口の中でつぶやくような

低い聲で、私に向つて家庭上のくりごとを述べはじめた。おそがけに出來た子なので、まだ小學校へ行つてゐるのが二人と六つの女の子が一人あるとか、税金がうんと來たので困つてゐるとか、家内の醫藥費や葬儀料にどれだけ要つたとか、同情の代償を期待した不幸の誇示は、私の心を白けさせる以外の何物でもなかつた。それで結局、と、たまりかねた私が話を結末に導こうとすると、男はまるでそれをさせまいとするかのように、例のへえという間のびした返事をし、またもとのくりごとに話題をもどしてしまふのだつた。ひどくまだるっこい話し振りにもかかわらず、いつまでも中腰のままである男の姿勢が、餘計に私の心に焦燥をかり立てた。それで結局、と私が何度目かの言葉をくりかえしたとき、男はやつと返答をあたえた。まあ、ですから、私も左側を通つていたとは言え、うつかりしていたと言えはいえぬことはないのですから、賠償とか何とかわけのわからぬことも言いませんが、治療費ぐらい出してもらいたい

ものですね、と、それが最後にきき出し得た男の本音であつた。私は再び男の愚痴をきくことをさけて、早々に診察室にもどつた。巡査は手持無沙汰に壁の油繪を漫然とみて、女はスカートの裾をいじくつていた。私は女を傍に呼んで、男の意向を小聲で告げた。巡査は私達から視線をそらして、わざときこえぬふりをしていた。女は何ともこたえなかつた。丸顔で、まつげは短かかつたが、愛くるしい眼許をしており、心持受け氣味の唇は肉感的だつた。化粧はしておらず、色のあせたブラウスの胸ホックは一つ千切れたきりになつて、スカートには大きなつぎがあたつていた。私はそうしてうすくたびれた身なりの彼女に、男の要求を話すことの酷を思はずにはいられなかつたが、然し、あの愚痴つぼくてそのくせ狡猾そうな男が、これ以上に妥協するともおもえなかつた。私は無言で彼女の返事を待つたが、女はいつまでもこたえなかつた。どうですね、そんなところでは、と私が催促すると、ふいに女は顔をあげて、私を

ま正面からみた。治療代はどれくらいかかるのでしよう、と、きつぱりした聲だつた。私はぎくりとし、はじめて不用意だつた自分に氣づいた。私は單なる示談の調停者という以外に、私の果すべき役割のあつたことに改めて氣がつき、内心うろたえないではいられなかつた。私はあわてて胸のなかで男の治療代の計算にかかつたが、急に私という人間が、一番するい立場に追いやられた思いであつた。私は何回かためらつた後、或る金額の豫想を女に告げた。それは普通料金の半分に近いものであつたが、私はおそるおそる女への反應をたしかめようとして眼をみはつた。女は無情なくらい無言だつた。私は一そうしどろもどろした。おうちのかたに話して、それだけ、出していただけないかね、と、私はそんなおろかしいきき方であつた。すると、女がかすかに笑つた。私はこの微笑を理解することができなかつた。そんなこと、うちの人たちに話せないわ、と女が再び私を正視して言つた。うちでは働いているのは私ひとりきりな

の、両親ともないのよ、お金を出すとすれば私が働くより他ないわ、と、捨鉢といふよりも、それは何かへの冷笑を含んだ鋭い語調であつた。私はいつしか自分の顔があからんで來るのを感じた。負傷した男のように、くどくどしく述べない女の言葉に、かえつてそれ以上の悲惨さが想像できた。いつまでにおはらいすればいいのかしら、とかさねてきいた女に、私はいつでも都合のできるときでいいとこたえるのがやつとであつたが、再び自分の行爲への後めたさを意識しないではいられなかつた。けれど、どうにかこの事件はそんなところでは、男は毎日ガ―ゼ交換に通うことにして歸り、女は近日中に金を持つて來る約束をして歸つた。巡査はあとに残つて、私の勞を謝した。くすぐつたさよりも、なにかにがいあと味であつた。人間色氣がなくなるゝ仕方がありませんね、あれで若い男だつてごらんさい、反對に自分の方があやまるぐらいが落ちなんですがね、と巡査はしばらくそんな雑談をして行つた。

男は翌日からガ―ゼ交換に通つた。婦人科を主としている私の宅に来ること
はさすがに氣がひけるからと、いつも時間外にやつて來た。何かちぐはぐな彼
の羞恥心であつた。傷の経過は良好だつた。

四日程した夜の七時頃であつた。例の自轉車衝突事件の女が治療費を届けに
やつて來た。おそくなつてすみません、やつと工面ついたわ、とその聲は甲高
くてよく通り、先日の印象とはちがつていた。通勤の看護婦はもう歸宅したあ
とだつたし、妻は丁度風呂に行つた留守だつたので、私が玄關に出た。が、私
はすぐに彼女の餘りにも變つた姿におどろかねばならなかつた。鮮かなグリー
ンの袖なしワンピースで、腰には思い切つたペプラムをつけていた。顔はどぎ
つく化粧つており、更紗模様のネックチーフが輪廓を一そう強くみせ、挑發的
な感じでもあつた。面喰つている私の前に、女は黒革の提げハンドバックのな
かから紙幣をぬき出して、無雜作につき出した。私は女と紙幣とを七三に見く

らべてためらつていたが、思わず、どこへお出かけ？ と、きかすもがなのことをきいてしまった。と、女はふふんと肩をすくめて笑い、お仕事よ、とからかつているような口調であつた。お仕事？ と、私がまたも下手な質問をおうむ返しにすると、女は今度は聲を立てて笑つた。

2

光澤のない土色の顔をした、一見三十餘りのすがめの女だつた。油氣のない蓬髪がひたひたに亂れかかり、着物はでれでれに垢じみていた。はらいたで苦しんでゐるから、すぐに來て下さい、とひどくせきこんだ口調だつたが、とろんとした瞳はむしろ彼女の方が病人ではないかと思えた。それに、彼女が告げた住所は私の家から随分へだたつてもおり、附近には内科醫が二人ばかりいるは

すなのに、わざわざ私のところまで呼びに来た點もいぶかしかった。あついででもあり、できればことわりたい往診だったので、私はその點の疑問をもらすと、女は一寸するそうに笑つてから、このあいだ自轉車の衝突とかで御厄介になつた妹にきいて來たのです、となにかをさぐるような表情であつた。しかしこの言葉は私の興味をそそつた。先日の女の印象や、それを妹と呼ぶ使いの女のひどい身なりから推して、彼女の家を知つてみたい氣持が私をうごかし、私は呼びに來た女を先に歸して、支度を整えると、ワイシャツだけの輕装で自轉車に乗つた。外はほこりつぱく、大型のトラックが通ると、風壓で片側に寄せられた砂塵が舗道の上でうすをまいた。わかりにくいところだから、江川通りを入つた所で待つてゐるとのことだつたが、使いの女は約束どおり角の電柱にもたれて、ものう氣に立つていた。遠くからみると一そう顔色が冴えなかつた。ごみごみしたみちを二三回まがつて案内されたところは、豫想してゐた以上に

ひどい長屋だった。南側に四軒、北側に三軒、背中あわせにならんだ七軒の長屋で、低い屋根はおそろしく彎曲して中央の邊りがへこみ、しかも東に行くほど棟がさがつていた。北側が一軒少いのは、東のはしの一軒が完全に倒壊しているせいで、従つてそれと背中を接した南側の家も、いまにもがらがらと來るうな危なつかしさであつた。なまじ空襲に焼け残つたのが不幸なような長屋だった。素つ裸の子供が三人ばかり、道で土いじりをしていたが、ぼかんとした顔で私の方をもの珍しそうにながめた。どの子供も、結核患者のように鎖骨の浮き出したからだだった。腹痛患者の家は東の端から二軒目にあり、私を通りすがりにみた家は、どれも一樣に二疊と四疊半くらいの二間きりで、たたみのしいてある家はなく、こんろや釜が雑然と取りちらかされ、家中は眞黒にすけていた。頭をかがめるようにして患家の軒をくぐると、十間は殆どなくてすぐ上りかまちになつており、悪臭がいきなり私の鼻を刺戟した。むしろの上

には敷きつばなしのふとんが四つならべられ、そのうちの二つを占領して、男が二人臥していた。六十前後の頬のそげた老人と、三十五六の比較的骨ぐみのがつちりした男だった。しかし私がそつと期待していた女の姿は見あたらず、よごれたシャツや、灰皿や、吸殻や、湯のみなどで部屋は文字どおり足のふみ場もなかつた。私はねている二人のうちどちらが患者であるかの判断に迷つたし、いま一つには、私のすわるべき適当な場所がみあたらなかつたので、とまどいながら立ちすくんでいた。もつとも、立つていると言つたところで、天井板のない梁から、部屋に入り切らないがらくたな世帯道具がむき出しのままつり下げてあり、頭がつかえるので、私は背中をまるめているより他なかつた。然しそんな私に、呼びに来た女の方は、まるでもう自分の役目はすんだとでもいつた知らぬ振りで、上りかまちに尻を下して、汗をふきながら、息苦しいのか、ぜいぜいとせきこんでいた。老婆のようにしわがれた咳だった。はらいた

はどなただね、と私は誰にもなくきいた。先生、俺だ、とすぐにそれにこたえたのは若い方の男だった。眉と眉とのあいだが狭く、血走つた眼の、鋭い表情であつた。私がどうか自分のすわる場所を選定して腰をおろすと、横にねていた老人の方が、物言いた氣に唇を動かしたが、それは聲にはならず、おびえたような眼の色で私を注視した。枯渴し切つたからだを持って餘すように片手をふとんから投げ出し、肩先でせわしく息すいていた。私は型の如く問診し、型の如く診察をはじめた。今朝ほど食べた天ぷらにあたつたらしいとの男の言葉だつた。二の腕から背中、胸の一部にかけて、七首でひたいを刺し抜かれた般若の首と櫻とが彫つてあり、うす暗い部屋のなかに、刺青の血の色だけが何かいきいきとして不氣味でもあつた。けれど、診察の結果、男のからだには異常はなかつた。疼痛を訴える胃のあたりにも緊張はなく、一寸觸れただけでも顔をひきゆがめて苦しむ患者の態度は理解できなかつた。私は腹部を診ている

様子をよそおいながら、そつと患者の表情を観察した。すると、痛い痛いとし
わだらけにして表情の奥から、男は時々うす眼をあけて私の方をぬすみみてい
るのだつた。私はいきなり患者の腕を取つてその皮膚をつまんでみた。刺青で
一面にいろどられているので注意しなければわからなかつたが、あきらかに無
数の注射による硬結が残つていた。私の豫想に狂いなく、それはモルヒネ中毒
患者に違いなかつた。私は靴を仕舞い、勝誇つたうす笑いを浮べながら、あな
たにうつ注射はない、と意地悪い語調で告げた。なぜ？ と、患者はさすがに
ぎくりとした様子だつたが、しいて空とぼけて反問した。あなたの腕をみてご
らんよ、僕はそんなのにごまかされる程ぼんやりしていないから、と私はいさ
さかむかつ腹でもあつた。刺青の男は片頬をひきつらせて、憎悪とも苦惱とも
つかぬ顔で、じろりと私を見上げた。傍のやせた老人は不精髯のあごをふぬけ
のように開いたままであつた。へんにしいんとした時間で、蠅の音だけが部屋

のなかにうなつていたが、急に刺青男がふとんの上に起き上つたかと思うと、態度を一變して私に哀願をはじめた。假病をつかつて呼んで來たのは俺が悪かつた、だけどモルヒネが切れて五日にもなるんだ、もう今にも死にそうだ、こゝろやつて口をきくのがやつとなんだ、頼むから一本だけうつてくれ、と、ふとんの上に手をついでみたり、合掌してみたり、それは醜態や滑稽さを通りこした氣味悪いすさまじさであつた。けれど、やがて私はそれ以上の場面に遭遇しなければならなかつた。刺青男が私に哀願をはじめると同時に、おれ、俺にも一本うつてくれ、と横にいた老人までがふとんを這いすり出して私の膝にすがり、更にそればかりでなく、それまで上りかまちで様子をうかがつていた使の女までが、かたわらににじりよつて來て、やはり同様の哀願をはじめたのだつた。泣くような、かすれた、三人の聲がかわるがわるつづき、彼等の手がふれるたびに私の皮膚は鳥肌立つた。老人が口を出すと、刺青男と使いの女とはひ

どくいまいました。その方をにらみすえては、更に老人以上の言葉で、私に一本の注射を懇願するのだつた。モルヒネ一家——私はふとそんな言葉を想像して、背すじに走る冷いものを覺えた。私はいつまでもたまつていた。下手な拒絶の言葉はかえつて相手につけ入らせるすきを與えることになると思つた。

私はこの家から逃げ出す機會をさがしていた。然し私の拒絶が動かしがたいことを知つたとき、刺青男の態度は再び豹變した。おいつ、といきなり、すごみを利かせた、おさえつけるような聲だつた。瞬間、刺青男の手がすばやくふとんの下にさし入れられ、キラリと光るものが私の眼先にちらついた。私が本能的に身をこわばらせるのと、短刀がすぶりと私の膝の先のむしろを通して、床板につき立てられるのと同時だつた。短刀の柄がぶるぶるとかぶりを振つていた。男はわざとつくつた冷笑を浮べていた。やい、素直に言うことをきかねえのか。私はその瞳から視線をそらして、ごくりと生つばをのみこんだ。恐怖と

怒りとが交錯し、私の唇はふるえていた。私は必死になつて何かを考えようとしていたが、何をなんのためにこんな場合考えようとしているのかは、自分にもわからなかつた。眼をそむけていても、短刀の光が吸いついたように網膜に映つて来るのだつた。するとそのとき、鮮明に一つの記憶が私の脳裡によみがえつて來た。學生時代、ある女とのつまづきから不良の仲間に入つていた私が、桃太郎一家とか稱する男達と市民病院の裏で喧嘩し、鼻血を吹いてたおれたときの自分の姿だつた。しかし、そうした自分を捨鉢にすることを勇氣のように誤算していた當時の私を思い浮べてみたところで、結局現在私が直面している短刀への恐怖を取りのぞいてくれるものではなかつた。おい、どうする氣なんだ、うつのかうたねえのか、と刺青男はもう一度底力のある聲で言つて、片膝を立てた。私は鼻先で笑つてみせようとしたが、わずかに肩がびくと動いただけであつた。どたん場に追いつめられながらも、私の心にはまだできる限り

の虚勢を示そうとする見榮が残っていた。男の手がのびて、床のつきささった短刀をにぎつた。殺される、と私は思った。然し私の危急は意外なことで救われた。お待ちちつ、なんてことするの、とその時かん高い女の聲がひびき、誰かが表から駈け上つて来て、私と刺青男との間に立ちふさがつた。馬鹿、先生をどうしようつて言うの、と、おどろいている私達の耳に、またもきんきんした聲だつた。先日の自轉車衝突事件の女で、いつかの夜治療費を持つて来たときと同じな、グリーンのワンピースに更紗模様のネツカチーフだつた。なんだ、いらぬところへ出しやばるな、と刺青男はうろたえながら彼女をにらみすえたが、その瞳からはいままでの殺氣は消えていた。私はこの先生にはお世話になつてゐるんだから、おかしな刃物いじりは止しとくれよ、と女が言い、手前が世話になろうと俺になんの關係があるんだ、と刺青男が毒づき、兄さんは今朝も一本うつたばかりじあないか、と女が應酬した。それがどうしたんだ、と刺

青男はひっこみのつかない身を、無理から威勢を張るように、短刀を右手のなかでもてあそんだ。ふふん、と女はやはりつつ立つたまま肩をすくめて笑い、ハンドバックの口金を引いて、なかから小さなガラス管を取り出し、ぼんと刺青男の傍に投げ出した。褐色の液の入ったアンプルであつた。おや、こいつはどうしたんだ、と刺青男は横眼でそれをにらんだが、もうその時にはとびつのようにアンプルをつかんでいた。俺にくれ、俺は死にそうなんだ、と、やせた老人が龜のように手足をばたつかせて刺青男の腕をとらえた。阿呆、と刺青男はそれをつきとばしたが、老人は再び武者振りついた。およしよ、みつともない、と女はにがにがしくしたしなめ、ほらお前さんにも一本と、今一つの注射薬を老人の前に放り出し、それまでぼかんと口をあいていた使いの女の前にも、やはり別な一本を投げ出し、びしんと口金の音をさせてハンドバックをしめた。注射筒を持つて來い、と刺青男が使いの女にわめいているすきに、女は私に表

へ出るようにせき立てた。私はどきまぎしながらも、早々に鞆をかかえて表に出た。女は私のあとからでてきた。ありがとう、おかげで助かつたよ、と私はなにか氣恥しいものがあつたが、禮を言うより他になかつた。女はそれにはこたえず、全く毎日あんなふうなだからいやになつてしまふわ、兄さんのこと、ごめんなさいね、と、どこか自分自身に言いきかせるような口調だつた。おどろいたよ、うち中がモヒ中だとは氣がつかなかつた、と私がいうと、女は、私は、私はモヒ中じあないわ、と口をとがらせて言い、でも、この頃は取締りがきびしくつてとても入らないの、今日もやつとあれだけ手に入れて來ただけど、いやねえ、麻薬の爲にはたらいでいるなんて、つくづくこんなみじめな生活に愛想がつきたわ、と、それは刺青男達への不満ではなく、やはり私には自嘲のよういきこえるのだつた。

みちで派出所の巡査にあつた時、巡査の方から人なつつこい微笑を浮べて近寄つて來た。このあいたの娘はどうしました、治療費は持つて來ましたか、とたずねたので、私は受とつたことと、男の負傷が全治した旨をこたえ、先日の往診先のできごとをかいつまんで話した。すると、巡査は何か思いあたることがあるらしく、しばらく小首をかしげて考えていたが、西原という家じあなかつたですか、と私にきいた。然し、例の家には表札は上つていなかつたし、使いの女に呼ばれるままに往診した私にはわからなかつた。たずねられるままに、私がモヒ中一家の容貌などを、記憶をたどりたどり説明すると、巡査は突然、ああそうだ、あいつに違いない、と叫び、そうか、そんなところにいやが

つたのか、と意外そうな口振りであつた。知つてゐるんですか、と私がきくと、いやきつとその爺さんの方は西原に間違ひありませんよ、ともう一度自分自身に念をおすように言いきかせてから、彼等についての知識を私に教えてくれた。

——かなり古い話だが、以前小山町で夏は氷屋冬はおでん屋をやつていた老人に西原という男がある。場所もよかつたのもうけこみ、若い妾までかこつてぜいたくに暮していた。六年程前、胃潰瘍の手術をして以來中毒になり、戸籍調査の折なぞ、手や腿をまくしあげて自分で注射している姿を何回かみかけた。中毒になつてからは店の賣りあげはすべて麻薬につきこんでしまい、生活は次第に苦しくなつて來たが、もともと財産もあり、もうけこんだ金も大きいので、貯金をおろしてはどうかやつていた。ところが、例の新圓切換の時、その貯金がばたりと封鎖され、あとは賣りぐいがつづいていた。まもなく女房は愛想をつかしてとびだし、あとへ妾が入つた。妾というのが、娼妓上りの女で、や

はりモヒ中であつた。だから、きつと往診を頼みに來たのはその女だと思ふ。刺青男の方はおそらく西原の甥にあたる男とちがいない。ばくちが本職で、住所は不定だが、二三度ばくちで檢舉されたこともあり、また西原の家で一緒に注射をうつてゐるところをみかけたことがあるから知つてゐる。ただ、彼までがどうしてモヒ中になつたかは知らない。おもしろいのは、その刺青男の甥が西原のところへ遊びに行くうちに、いつしか西原の妾とできてしまい、二人でみにくい争いをしてゐたこともよくあつた。去年の春、西原は店をたたんでどこかへ行方をくらましてしまつたが、そんなところに寝取られた女や、その情夫と同居してゐるとは、よくよくしみつたれ男といふより、やはりモルヒネが欲しいからだらう。刺青男の妹というのについては全く知らない。だがどうせその模様なら、彼女をパン助かなにかにして、三人がモヒ代やら生活費やらをかさがし、いい食いものにしてゐるのだらう。だけど、あの衝突事件の時には

まるでおどおどしていた女が、そんなふうとは想外だった。——と、それが、
巡査の私に語つてくれた話の大要であつた。私は自転車を持つたままの立話し
で陽ざしをさける木かげもなく、汗性の巡査はしきりに手拭をつかつた。通行
人達がいぶかしそうに私達をみて行つた。だけど、ああした手合はなんとかな
らないものでしょうかねえ、と巡査は例の氣弱そうな眼のしよぼつかせ方でき
いた。これには私も苦笑するより他はなかつた。なんとかならないかとききた
いのは私の方で、彼等に對する適當な收容施設の必要は、私達醫師が一番痛感
しているのだつた。實際、あんな奴はどこか中川運河へでもはまりこんで、お
だぶつになつた方がいいんですよ、どうせ生きていたつて、穀つぶしになるだ
けなんですからねえ、と、巡査はそう言つてから、自分で自分の非情な言葉に
おかしくなつたらしく、はつはつ、と急に調子はすれの大聲で笑つた。私はな
ぜかうろたえずにはいられなかつた。

それから二三日して、よほどのくされ縁とでもいうのだろうか、私はまたもモヒ中にかかわりあうような事件にぶつかつた。丁度その日は日曜で、私は朝からアルツイバアセフの「最後の―一線」を讀んでいた。陰鬱な彼の文章は私の心までも滅入らせるようであり、そこに描かれた氣だるいむし暑さにつつまれた灰色の世界は、そのまま現在の私の周邊であつた。梅雨のような濕氣をふくんだ空が朝から低くたれ下つて、部屋中が氣味悪くべとついていた。私はその本を讀み進んで行くことが半ば苦痛でもあつたが、それでいて私はそれを放擲することもできず、なにか意地のよくな氣持にかられながら、かなりな努力で一字一字をひろうようにして行を追つていた。死という、人間を究極のところまで追いつめた姿を前面におし出して、その背後でぎらぎらと瞳をかがやかせている作者と、私は真正面から對決してみたい思ひだつた。あらゆる場合に於ける死を否定して來た私であり、それがたとえどのようなように美しく彩られてい

ようとも、或はどのような種類の必然性で説明すけられていようとも、一瞬の「生」以上の強さを認めることのできなかつた私というものを、もう一度しつかりと凝視し、肯定つけてみたい、かたくなな心であつた。小説中の男や女が、次々と最後の一線をふみこえて死におもむいて行く姿にぶつかるときに、私はどきりよからだをこわばらせ、とまどいし、そして無理からに彼等への怒りを呼びさまそうとするのだつた。勿論、私は一度としてまだ生死の境を彷徨した経験もなく、自分をぎりぎりの立場においてながめたこともなく、そしてそれでいて、私がとりあつかう病人のすべては、大なり小なり自分を死の一步手前において観察している者たちであり、且つまた、そのうちの幾人かは死を肯定どころか願望さえしている者であり、そこに私がいつも言う、健康體である私と、病人である患者との、本質的に相容れないへだたりが存在しているのであるが、然し、私がいま讀んでいる小説のなかでは、肉體的に健康である多くの

人達までが、彼等自身の手によつてその生命をたち切つて行くのだつた。そしてそれを説明している唯一の鍵は、あまりにも平凡な「倦怠」という二字にか過ぎなかつた。私はこの言葉をおそれた。私のなかから倦怠を見出すことがこわかつた。私が本を読み、物を書き、喋り、はたらく、それらことごとくの私の行爲動作が、結局倦怠に根ざしていないとは、私自身斷言することはできなかつた。私達が眞に自己の妻をいつわりのないまなこで、追いつめて行くとき、最後にとり残されるものが、死線への歩みであると考えすることは、今の私としては餘りにも冒険であつた。がしかし、私はその時ふいと一つのこと氣づいた。永久に倦怠を知りそうもない人々の存在が、突然私の頭にかび上つて來た。私はこの思いつきに、なぜか身うちがこそばゆくなるような氣持で微笑をもらした。モルヒネ中毒患者。彼等こそ倦怠の片影すら知らない人間であつた。

二こと目には死にそうだとか死んでやるとかを口にしながらも、その實、死そ

のものについては一度として考えたことはなく、完全な廢人となり切つた状態
においてすら、彼等は一瞬の生、一瞬の快樂を追いもとめて止もうとはしない
のだった。彼等こそ典型的な快樂主義者であり、少くとも彼等にとつての麻醉
の一瞬は、逃避としてのいとなみではなく、完全な「生」への没入であつた。――
「私がそんなことを考えながら本の上をたどつているとき、ごめん下さい、と
どなるような聲で勢よく玄關の戸があき、入つて來たのは例の巡査だつた。先
生、すみません、どうしても手を焼いてこまつています、ちよつと派出所ま
で來てやつて下さい、とすつかりあわて切つた口調だつた。どうしたんですと
きくと、西原がモヒが切れて路傍にたおれていたのを、取りあえず派出所まで
收容したが、まるでもう狂燥状態で、壁にかけてある警棒をつかんで振り廻し
たり、インキ瓶をひつくりかえしたり、とても始末におえないから、頼むから
一本だけ注射をうつてやつてくれというのだった。途方もない話なので私もお

どろいた。警察官が麻薬取締の規則のきびしさを知らないはずもなし、私にこんなことを頼むのは見當ちがいも甚しかった。私は少し殿しい口調で、中毒患者には麻薬はうてないのだし、行つたところであなた達に手のつかないものがどうなるものでもないから、ときつぱりと拒絶した。巡査は困惑しきつた顔で、いつものように汗ばかりふいていたが、氣安めに何かほかの注射をうつてくれともいいから、とにかく一度顔だけみせて下さい、とそれはもう半ば哀願に近かつた。中毒患者が麻薬以外の注射でごまかされるなどは、餘りに甘い考え方だつたが、私だけを頼りにしている巡査の様子をみては、しぶしぶながら腰をあげぬわけにはゆかなかつた。私はまさかの時の用心に、鞆のなかのパントボンを抜きだして麻薬金庫のなかにもどした。(麻薬はすべて特別の金庫に保管しておくように定められてある) 派出所の前は一ぱいの人ばかりで、醫者が來た、醫者が來た、と好奇心にみちた眼でささやきあう人々をおしわけてなか

へ入つた私は、そこに展開されている光景をみたるとたんに、思はずぶつと失笑してしまつた。奥の宿直室の梁から、輪にした帯をぶら下げて、小さな臺の上に乗つた西原がその輪のなかへ自分で自分の首をつつこみ、さあ死んでやるぞ、畜生、死んでやるぞ、とあたりかまわずとなりちらしている最中であつた。帯を取つた浴衣はすつかり前がはだかり、だらしなく締めた下帯の横から罌丸がぶらぶらとのぞいていた。どこかでころんだのか、左の膝小僧をすりむき、血のにじんだ皮膚に砂がこびりついていた。人殺し巡査、俺を見殺しにするのか、と西原がわめくと、派出所の前にたかつた群衆がげらげら笑つた。派出所のなかに私を呼びに來た巡査の他に若い巡査が二人いたが、すつかり匙を投げたした恰好で、西原の言葉ににやにやしなから、人だかりを追つ拂おうともせず、椅子によりかかつたまま、たばこをくゆらせていた。しかしそうしたことより、私の注意をひいたのは、刺青男の妹がそこにいたことで、西原に向つて甲高い

聲でたしなめたり叱りつけたりしていたが、私をみるとすぐに寄つて来て挨拶した。私もこの前の禮を簡單にのべた。ほとほと手を焼いてしまったわ、止めれば餘計圖に乗つてわめき散らすし、放つといたつてどうせおどかしなんだから死ぬ心配はないけど、皆さんに迷惑をおかけするし、きまりは悪いし、今日くらい困つたことないわ、と女はすがりつくようにして語つた。今日は注射藥を持つていないのかね、と、ふと私がかうかうようにして言つても、だめ、あれから全然入らないの、と女は眞劍な表情であつた。さあ死ぬぞ、死んでやるぞ、と私の姿に氣づいた西原が前にもました大きな聲でやり出した。私は私の上に注がれている、總ての人の期待をこめた視線を意識した。面映ゆさと同時に、私は自分のとるべき進退に迷つた。この場を收拾する自信はなかつたし、それかといつて、今更になつて派出所まで不用意な心構えのまままで出て來た自分を後悔したとこで始まらなかつた。私はやがて宿直室にさがりこむと、巡查に

言つて障子をしめてもらつた。私自身が群衆の環視をきらつただけでなく、西原のへんな見榮を封じるためにもその方がよかつた。部屋には巡查も入らず、私と西原と、女との三人きりとなつた。私は西原の前に立つと、さて何からどう話したのか、鞆を持つたまま、まだ首を輪のなかにつつこんでいる彼の顔をみつめた。帯が丁度高く突出したのど佛の上にあたつており、西原は怒りとも悲しみともつかぬ顔で私をにらみつけていた。西原さん、と私はそう言つたきり、あとにつづける言葉をさがした。すると、その言葉にさそわれたかのように、西原の表情が急にくしやくしやになつたかと思ふと、今までつつこんでいた帯から首をはすし、私の前にくすれすわつて、ほろほろと泣き出した。家中で俺ひとりが邪魔者なんだ、モヒが入つても俺には一本もくれないで、自分達ばかりがいいことをしてやがる、みんな俺の死ぬのを待つてゐる、俺ほど可哀そうな男はない、みんながその氣なら俺は死んでやるんだ、けどどうう一

本だけうつてほしい、すつとした氣持で死んでゆきたい、先生、たのむ、二度と無理はいわない、此の世の思い出に一本だけなんとかしてくれ、とすつかり子供が駄々をこねる通りであつた。私は西原のぐちをきいているうちに、やつと自分の決心にふんざりをつけることができた。成否は別として、私はできるかぎり西原を説得してみるよりほかはなかつた。私の心にはふしぎにそれまで感じていた西原への憎悪はなく、ただひどくものあわれみ、いたいたしかつた。

私は自分自身をためすような思いで口を開いた。西原さん、とにかく僕は今日は麻薬は一本も持つていないよ、うそだと思つたらこの鞆をひつくりかえしてみるのがいい。また勿論あつたところで、中毒患者にはうたない。おそらくどこかの醫者もうつてはくれないだろう。そのことはあんたの方が僕よりもよく知っているはずなんだ。それに、ヤミのモヒだつて、今後は絶対に入手の見込みのないことも、あんたは知つているはずなんだ。あんたはいまざりざり一杯のと

ころまで來ているんだ。自殺するか、注射を止めるか、その二つしかみちは残つていないんだ。けれど西原さん、あんたは自殺できない。そいつは受け合つてもいい。いくら首に帶をかけたつて、下にあるふみ臺を思い切つて蹴ることはできないんだ。中毒患者は決して自殺できない。そうしてみると西原さん、あんたに残されたみちはただ一つだ。だが、僕がいまさら阿片アルカロイドの害毒について話したところで無駄なことはわかつている。あんた自身それを痛感しているはずだし、きつといままで何十回となく、注射を止めようと思ひ立つているにちがいないのだ。そいつは僕達がたばこをやめるところの苦痛でないことは知つている。だけれどね、西原さん、ここでもう一度考えて欲しいんだ。今はもうほんとうに最後のどたん場に來ているんだ。自殺か、やめるか、くどいようだがもう一ぺん考え直してごらんさい。と、私はいつしか西原を説得することよりも、私自身の言葉に興奮しながら、熱心にそれだけのことを相手

に語つた。西原はおとなしくきいていた。私が私の話の切れ目切れ目に言葉を添えると、西原はうなずいた。先生、やめます、と西原がまたもほろほろと涙を流して叫んだ。大學でもいい、養老院でもいい、どこかへ世話して下さい、いまの家にいたらだめです、今度こそやめます、世話して下さい、と虚偽とは思われない必死な聲であつた。私は思いがけない成功によるこび、私までが眼頭のあつくなる思ひであつた。私は巡査を呼んで西原の言葉をつたえた。巡査もよろこび、入院の方は私どもで骨折つてみましようとの言葉だつた。私は大學の醫師に簡単な紹介状をかいた。西原は入院先きがきまるまで一應家にもどることにして、女がつきそつて派出所をでた。

その日、私は二つの意外な事實に當面しなければならなかつた。一つは麻薬常習者であつた小説家、大宰治が自殺したことであり、今一つは、西原が行方をくらましたという巡査の言葉であつた。そしてこの二つながら、顔を逆手で撫ぜられたような不快を私にもたらした。折角巡査が骨折つてくれて養老院に收容することにきまり、(大學は室があいていなかった)巡査が西原の家へ行つたときは、もうどこへ行つたかわからず、刺青男だけがふとんのなかから首を出して、何しに來たのだと言わぬばかりの態度だつたとのことであつた。派出所の宿直室で流した西原の泪が、一時的な芝居にすぎなかつたと思ふことは、私自身あまりにみじめではあつたが、中毒患者にその中毒物質の禁斷を決意させ得ると考えた私が、結局は安易でもあり、おろかであつた。しかしそれにしても、中毒患者の内面生活と言つたものが、所詮は無自覺との境界線に於ける葛藤であり、その結果が、いずれとも決し得ぬままに、ただ一瞬の生、一とき

の快樂の世界に彷徨するものであると信じていた私にとつて、大宰治の死は、根底からそれを裏切るものであつた。よし彼が文學に行き詰ろうとも、戀人があろうとも、或は白痴に近い長男があろうとも、彼が麻藥課のリストにのつてゐるほどの常習者であることには變りなかつた。しかもその彼が、敢然として「一線」をふみこえて行つた事實――。それは果して、阿片アルカロイドによる「陶醉」も、倦怠という二字にはまさり得ないことを物語つてゐるのではなからうか？ けれど考えてみれば、私達ことごとくが既にあまりに多くのものに中毒されてゐる身であり、そしてその桎梏から逃れることを得ずに身もがいてゐる人間であつた。たれが物慾の泥におぼれていないと主張でき、たれが肉慾の囚虜になつていないと斷言できるといふのだらう？ 一片の愛情をさえ持ち合わせぬ女の肉體をも、私達は狂暴にだきしめることがあるのだつた。そしてもし、私達がこうした中毒状態における自己を、いつわりなく凝視してゆく

とき、私達が究極に於てえらぶべき唯一のみちが、自己を死と對決させることにあるというなら、これはおそるべき悲劇にちがひなかつた。

それから十日ほどして、私のところへ女文字のかなり部厚い封書がとどいた。

中村病院内野澤千佐子とかかれた差出人には記憶がなかつた。數枚の便箋に鉛筆でこまかく書きこまれてあり、文字は割にうまかつた。讀んで行くうちに、刺青男の妹とわかり、私の顔がほぐれた。……突然の不躰お許し下さい。無性にさみしく退屈です。手紙が書きたくなつたのですが、モヒ中の兄などに出す氣にならず他に書くとこがありませんので、先生のところへ出します。迷惑でしようが怒らないで下さい。私、狩りこみにひつかかりました。四日前から入院しています。注射は痛くて閉口です。おしりが急に二倍にもなつて腫れ上つた思いです。……と、そんな書き方で、たたみこんで来るような文章は彼女の性格を物語つていた。冒頭にことわつてある通り、ほんの退屈しのぎに書いた

手紙らしく、別段何の用件もなく、病院生活の模様などをかなり詳細に書いてあつた。所在なくベッドの上にねころんで、鼻唄でも口ずさみながら鉛筆をなめている姿を想像すると、私はみじめさよりもなにか愉快的な氣持の方が先に來た。……階段のつき當りにも病室の入口にも柵がしてあり、三名の警官が晝夜つききりで護衛してしてくれます。三度の食事にかかぬ結構な身分ですが、口はいやしくなり、手あたり次第に賣りとばして食べるものに替えます。給食はまずいからと、一食二十圓で賣つてしまい、芋や漬物を買つて食べる連中が多いのです。はまの女（遊廓の女）も同室していますが、彼女達は自由に外出できるので、それに托して賣ります。投薬されるスルファミン劑も市價三十圓とかのを十五圓で賣り、着物、帯、ズロース、なんでも賣らないものはなく、また食べないものはなく、はまの女がお客の捨てたみかんの皮を持つて歸ると、奪いあいで取つて食べ、たばこ代用はふとん綿です。このふとんは私達

よりやせています。ガラスをはずしてそこから逃走し、はずしたガラスを賣つて一石二鳥の成績をあげたり、羽織をといつてつきあわせ、便所の窓からそれに傳つて逃げようとして途中で切れ、腰骨を折つてつかまつた「新版くもの糸」もあります。昨夜は隣の女が夜中に突然分娩し、用意がなかつたので水でうぶ湯？をつかわせ、みんなが腰のものや片袖など出しあつて赤ん坊にさせてやりました。親は梅毒で、生れた子も顔一ぱいぶつぶつが出ています。あら、早いはしかだなあと誰かが言つたのには大笑いでした。近いうちに脱走しようかと思ひますが大して歸りたくもありません。かえつたところで私という人間の意志を喪失した生活が待つていただけで、ここの方がいいようにも思ひます。私自身の生活が欲しいと思ひます。こちらへおこしのついででありましたら、寄つてください、よろこびますから。……彼女の手紙から陰慘なものは感じられなかつた。そこに描かれてゐるものが、本能をむき出しにした極めて原始に近

い生態であつても、私は不思議とびちびちしたこだわりのない、むしろ明るさに近いものを印象として受取ることができた。けもののような欲情や、救いがたい無智や、私刑や、鬭争といったものが、或は彼女達の生活の大部分かは知らなかつたが、しかし、彼女達もまた、ある形における快樂主義者であることにはまちがいなかつた。彼女達は少くとも自分自身を外に向つて示そうとはせず、彼女達にとつては自己を示すことよりも前に、まず自分みずから自己のうちにて於て享樂することが必要であつた。そして自己を表現しようとしてあくせくしている私などに比較して、果してそのいずれがよりたくましい生き方であるかは疑問だつた。

その翌日、私は所用があつて上前津の方へ出かけ、かえりがけに水主町かこで市電を待つてゐると、偶然例の剃青男の妹——野澤千佐子にであつた。私が氣づかすにゐると、むこうから聲をかけて來た。ゆうべ病院を逃げ出して來ちやつ

たの、一晚防空壕で過したのよ、とこだわりのない笑いだつた。まつ暗だつたのですりむいたのだと言つて私にみせた二の腕には、なるほど赤いみみすばれができていた。いくぶんやせてはいたが血色はよく、化粧はしていなかつた。これから家へかえるのかときくと、まだ決心がついてないと答え、近所の友達のところへ行くか、とにかくあのへんまで行つてみてからの氣持次第よ、もどりとくなくないんだけど、でもやつぱり歸つてやらなきあいけない氣もするの、と、ふときみしそな口振りでもあつた。市電はなかなか來なかつた。十五分以上も待つたころ、詰所にいた監督ができて、尾頭橋附近が火事ですから、當分電車は通じません、と、格別氣の毒そうにもない顔で告げた。停留所はもう長蛇の列ができていたが、苦情を言つたところではじまらず、結局歩くより仕方がなかつた。尾頭橋附近なら私の家から近かつたが、途中に臨港線の堤防があることだし、たかはくくつていたものの、さすがに足は自然早くなつていた。

悪いことに風の強い日だつた。千佐子も私にならんで足をはやめた。化粧はしていなくとも、どこかけばけばしたところがあり、連れだつて歩くのには幾分氣のひけるものがないでもなかつたが、火事のために歩かされた人通りが多く、みんな氣忙しそうで、私達に注意するものはなかつた。山王橋の坂をのぼりつめると煙がみえた。火事は大きいらしく、黒煙が廣範圍にわたつてひろがつていた。方向を見定めていると、千佐子が突然いけない、私のところしいわ、と叫んだ。いわれてみれば確にその方角だつた。駈けようか、と私が言うと、千佐子はええとこたえたが、すぐに、いいわ、走つてみたつて仕様がないわ、あんな家、いつそなくなつた方がさつぱりしていいわ、と、どこかすて鉢な語調だつた。近づくに従つて火災の範圍も明らかになり、江川から東、二百メートル四方ぐらいに燃えひろがつていた。赤塗りの消防車が見え、Pressの社旗をひるがえした新聞社の自動車や、ジープが幾臺も駐車していた。えがらつばい

風が喉を刺戟し、熱氣がかつと顔を掩つて來た。荷物を持った罹災者や、野次馬や、消防手や、警官がごつたがえし、歩く度に人にぶつかつた。千佐子はいつしか眼を血走らせ、焰の中心にある自分の家に近づこうとするかのように、人々をかきわけて進んだ。私はなぜかこのまま彼女とわかれて歸るのが悪いような氣もし、またそれを言い出す機會を失つて、千佐子について行くより仕方がなかつた。しかし私達はすぐに交通遮斷の繩張りによつて行手をさえぎられた。繩をくぐろうとする野次馬を警官がすつかり渴れた聲でとなり散らしていた。私には何のために千佐子が、いまはおそらく焼けつくしたに違いない自分の家に近づこうとするのか、わからなかつたし、それにもまして、私が一體なんのためにこうしているのかわからなかつた。ただ無暗にいらだつた心だつた。つくだに屋をまがつた細いみちに人氣がなかつたので私達はそこへ入つた。大通りで消防車が汲みあげる水がこのあたりまであふれ、下はひどくぬかるんで

いたが、千佐子のはねのあがるのもかまわず先に進んだ。細いみちはかぎ型になつており、その角を曲ろうとした途端、私達ははげしい罵聲に思わず足をとめた。畜生、こんなところにいやがつたのか。そして肉體と肉體とがぶつかり合う音がし、またなにかをわめく聲がそれにつづいた。私達はそこに餘りにも豫想外な光景をみなければならなかつた。西原がぺたんとしりもちをつき、おびえ切つた眼をあらぬ方にむけて居り、その前に制服の男が威丈高につつ立つていた。西原はいつもの浴衣で、袖はちぎれ、泥だらけになり、ぼろぎれのように引きさけていた。制服の男の方は、丁度私達の位置から背をむけているので顔はわからなかつたが、例の派出所の巡査であることにはまちがひなかつた。きさきさまつ、と巡査はひどく興奮しているらしく、言葉はふるえてどもりがちだつたが、きささまが火をつけたんだらう、と、それは威嚇するというよりもむしろおさえかねた憎しみにみちた聲であつた。しかし私はその言葉の意味を理

解するとともに、わけもなくうろたえた。千佐子は動かさず、いつしか私の腕にすがつていた。おいつ、立て、と巡査が西原の襟くびをつかんだ。西原は焦點のない瞳で、しばらくその顔をみていたが、操り人形のようにふらふらと立ち上つた。巡査が少し手をゆるめたようだった。そのとたん、どこにどうして持つていたものか、西原の右手にきらつと光るものがあつた。あつ、と私と千佐子とが一樣に聲をあげたが、その時にはもう巡査はうつと低いうめきをあげて膝をついていた。西原の表情からはじめてうつろなものが消え、残忍な微笑がやせこけた片頬に浮んだ。叔父さん、あんた、と千佐子のかすれた聲に、西原がはじめて私達の方へ視線をむけた。私にとつては、いつか剃青男に七首をつきつけられたとき以上の恐怖だった。巡査は左のわき腹をおさえてうめきながら立ち上ろうとしていた。突然、西原がけらけらと笑い出した。殺してやつた、どいつもこいつも、真吉も、糸子も、みんな俺が、ざまあみろ、すぷりとやつ

たんだ。西原はまだ笑いつづけながら、ひよろひよろと前に出た。眞吉とか糸子とかいう名前は知らなかつたが、それが誰であるかは私にはすぐにわかつた。西原が更に一步前に出た。私の腕にからんだ千佐子の手に力が入つて、それが小きざみにふるえた。くそつ、と、その時、たおれて来た巡査が這つたまま西原の足にしがみつき、西原の身體がその上に折りかさなつてくすれた。

確

證

△おのれをあばくことも所詮は自己
辯護の一手段であるかも知れない▽

眼をとじて、少女は、眩暈に耐えている様子だった。最初診察室に入つて來た時の蒼白な顔が、まず私をおどろかした。あきらかに極度の貧血で、歩いて來られるからだとは見えなかつた。第一扉口から椅子までの距離が、途中で昏倒しそうで危なつかしかつた。立つているのが、既に彼女には負擔であることを思わせた。崩れすわると、廻轉椅子が不快なきしみを立てて、三分の一ほどまわつた。私は机上の扇子を執つて、ゆるやかに胸先へ涼を送りながら、少女が臉をひらくのを待つた。

午ちかくになると、診察室のなかは蒸し風呂のようになる。南むきで、容赦なく陽がさしこむ。採光をよくするために、正面二間一ぱいがガラス窓になつており、それがしめ切つてあるので、温室そのままであつた。あけると、ほこりが大へんなのだ。電車通りに面しているのだが、舗装してなく、トラックでも通ろうものなら、もろに砂塵が舞いこんだ。わずかな息ぬきに、廻轉窓だけはあけてあつたが、それだけのことで、日に四回は拭かないと、砂がジャリつく。クレゾールを入れた手洗いまで、覆いはかけてあるものの、少し油断すると、底に砂が沈澱するのである。家の前の打水ぐらいでは、とても今年のおつさには追いつかなかつた。

血の氣の失せた少女の額には、汗がじつとりとにじみ出ていた。十七か、十八にはまだなつていないだろう。肉付きの薄い、貧弱な肢體であつた。型のくすれたブラウスは、色あせて、かつての臍脂の鮮かさを想像するのはむづか

しかつた。その下につつまれた乳房は、恐らくまだ充分には隆起していないだろう。手も足も細く、脛には、ところどころ膿痂疹のあとがうすい暗紫色の斑点になつて残つていた。たしかに、彼女の栄養状態は充分とは思えなかつた。白麻のスカートのわきスナップが一つ、千切れたきりになつているのが、私の注意をひいた。

やがて、少女は眼をひらき、はにかんだように鈍い微笑を示そうと試みた。が、口のあたりが、わずかにひきつただけであつた。待ち構えていた私が、すぐに容態をきいた。

「出血するんです」

やつと聲になつたという感じである。心の深みで、なにかをこらえている切なさがあつた。少女はしかし、出血する患部がどこであるかを言いはしなかつた。が、これは訊く必要もなかつた。いや、訊いてはならなかつた。きけば、

若い醫師の前ではりつめてゐる羞恥の糸を、無慙に切りさいなむ結果であつた。何時から、とか、疼痛の有無とか、要點だけを押えて行く二三の簡単な質問をした後、私は早速少女を診察臺にあげた。せき立てるような高壓的な態度が患者のためらいを無視して行く意味に於て、かえつて好都合なことを、經驗から來る習性として身につけていた。まだ相手が腰かけている中に、ゴム手袋をはめ、手を洗いにかかると、大抵の患者が、肩をびくんとさせて、それから、私の意志にあやつられてゐるかのようになり、あわてて身仕度にかかるのであつた。はりつめたままの羞恥を、そのままの状態で、ぐいと一氣に診察臺にまでつきやるにも似ていた。

問診のときから、既にある程度の豫想はあつたが、内診の結果は果して不完全流産に間違ひなかつた。貧弱な少女のからだに似ず、かんし鉗子の先にはさまれて出た暗紫色の胎盤は、ぶざまに大きかつた。まだ性器の發育さえ充分でない少

女から、三十女の奔放な欲情を、なまなましくつきつけられた思いであつた。職掌柄、若い娘の同種の疾患には随分遭遇しているものの、さすがにこの年令の者は少なかつた。敗戦後の混亂した世相に結びつけて考えてみるより先に、見知らぬ男への愠りが、胸につかえた。が、義憤ではない。だしぬかれたままいましさである。つぼみのうちに手折られ、横取りされた不愉快さであつた。私自身、女に對する自己をうぬ惚れ、事實かなりあくどいことをしてまで、數多くの女を體驗して來ただけに、この感は疎かつた。少女自體への愠りが、不思議にないのも、それだつた。診察臺から降りて、私に背をむけて身づくろいする少女の臀は、切りそいだように小さく扁平であつた。

出血の原因をきかされたとたん、少女の顔は一そう紙のように蒼ざめた。再び眩暈がおそつて來るのか、立つたままの少女は、椅子のもたれに體重を支えるように片手をつき、眼をとじた。消えやらぬ肚立たしさが残つていた私には、

何かその動作が少し芝居じみて見えないのでもなかつた。私はひどく事務的な口調で、今後の健康上の注意を述べた。きいているのか、いないのか、眼をとじた少女の姿勢は變らなかつた。私の言葉だけが、白々しく空轉している感じだつた。ちようど、視線の正面に少女の腰のあたりにがあり、またもや、スカートトのわきスナップの千切れているのが、氣になり出すのであつた。反應のない相手に、私は自分のおかれた位置を、次第にもてあました。私は患者日記にむかつてペンを執つた。

「お名前は？」

どきりとして、少女は眼をひらいた。瞳をすえると、一重まぶたの切れ長な眼だけに、怒りに似た色がみえる。

水田さち子——十七歳、と、少女は不自然に甲高い聲で名乗つた。

「住所は？」

「小屋畑の、——武藤さんのところにご厄介になつています」

ああ、といったふうには、軽い感歎をこめて、私は改めて少女を見直した。

今月のはじめ頃から、武藤かねの二階に寄宿している少女のことなら、私も既にきいたことがあり、或程度のことは知つていた。武藤かねの饒舌と世話好きとは、近隣でも定評があり、私はかね自身の口から、少女のことを三度ばかりも、繰り返してきかされているのであつた。もつとも、その時はさして氣にも止めず、また例の吹聴かと、きき流していたのだが、いまその少女を、こうした境遇において眺めてみると、やはり一つの感慨がないでもなかつた。記憶にあつた少女の身の上が、かなりの同情をともなつて胸によみがえつた。

饒舌の種類にもいく通りがあるが、武藤かねのは、同じことから何度でも根氣よく繰りかえす方である。それだけに尙さら、きき手の方はやり切れない。

至るところでしやべりまわつているうちに、誰と誰とに話したかを忘れ、次に

會うとまた最初から説明し直すのである。二度三度となるたびに誇張と潤色が加わり、やがてそれを自分でも眞實と思ひこんで行くのであつた。亭主は、織物會社の守衛をやつていたが、武藤家といへば先ずかねの顔を思い浮べ、亭主の方は、大樹の蔭の雜草の感じだつた。文字通り口八丁手八丁で、家計の半分は主婦が小ヤミでまがなつてゐる。守衛の給料は知れたものだつたし、殆んど毎年産みつづけた子供が五人あり、武藤かねは、たばこ、ビール、米、生地など、知己を頼つて小ヤミに駆けまわるのである。時價より一圓か二圓安くするのだが、それだけのことで、買手は武藤かねの口うるさいのを我慢した。だから、必然的に家庭に於ける亭主の發言權は少ない。病氣に對しては大げさで、従つて私とは親しかつた。親しさを押しつけられたと言つた方が正しい。世話好きだから、何人もの患者を紹介してくれる。くすぐつたい有難さだつた。

話はそれだが、武藤かねから聞いた少女の話というのは、こうである。

その少女は、昨年の暮、母親と二人きりで奉天から引揚げて來た。母の出身地が和歌山縣の田舎であつたところから、その知る邊を頼つて、一時身を寄せた。血がつながつていゝというだけのうすい縁籍で、はじめから迷惑を露骨にあらわした素振りであつた。ところが、引揚げ前からの無理がたたつてか、正月を迎えると同時に母が寢こみ、まもなく死亡した。家人の厄介者あつかいは母の死とともに輪をかけ、娘はいたたまれなくなつて飛び出した。やはり遠縁にあたる人が小牧にいたるときいていたので、そこを頼つた。一月あまり、納屋の二階にかびくさい家財道具などと一緒に生活していたが、そこも居づらくなり、再びとび出した。當もなく名古屋に出、ふと思いついて某ダンスホールを訪れた。奉天の女學校に在學當時、教師について聲樂を勉強していたので、ホールの歌手になろうと思つたのであつた。年の若さに管理人は首をひねつたが、結局身の上に同情されて、話がきまつた。家は管理人の宅に下宿した。が、

やがて、その管理人が怪しい素振りをみせはじめたので、ここもながくはつづかなかつた。始めからそれが目的の、男の親切であつた。ホールで親しくなつたダンサーのアパートに同居させてもらつて、織物會社の事務員になつた。そしてこの會社に、武藤かねの亭主が守衛をしていたのである。しかし運の悪い時は仕方のないもので、たまたま會社の公金が紛失し、その嫌疑が彼女にかかつて、讖首れた。日本の土をふんで以來、つまづき通しの半年であつた。夕食どきの雑談に、亭主からその少女の話をきくと、武藤かねは無性に同情してしまつた。うちへ引取つて世話をする——一旦言い出したら、もう亭主では手がつかなかつた。駄々つ子そのままであつた。もともと、武藤かねが、少し度外れな世話好きであるのは、一つにはひどく弘法様によつて「人助け」をするのである。彼女の言葉を藉りれば、弘法様のお告げによつて「人助け」をするのである。戦前には武藤かねの家には誰かが決つて居候していた。乞食には必ず物をくれ

でやるように、子供までがしつけられていた。但し、世話した擧句は、大ていあと足で砂をかけられるぐらいがおちであつたが、武藤かねにしてみれば、この「不義理な奴」ばかりであることが、彼女のなさけ深さを誇示するために、一そう有利な手段ともなつていた。戦争以來、悪い病氣を忘れてくれたと、ひそかに安堵していた亭主は、またぶりかえしたかと眉をひそめたが、口には出さなかつた。少女はすぐに引取られた。どこかかたいところで、將來のためにもよく、女ひとり^りが自活できる程度の収入のあるところをと、武藤かねは本人以上にやつきになつて勤め先をさがし始め、この依頼は私もきいていた。

——そんな話を、次第に鮮明に思い起すとともに、私の心にあつた彼女への同情の心も、いつしか、かなり強いもの^のにまで押しひろがり^がはじめていた。外地を知らない私には、奉天から引揚げて來たという一事だけで、すぐさま悲劇的な物語を聯想してしまう甘さがあつた。或は二十五歳という私の若さから來

る、感傷かも知れない。が、それと同時に、私はこの貧弱な肢體を持つた少女の、過去に於ける性生活までも、やはり同じ憐憫の眼を以て迎えるようになっていた。それは、さきほどの、少女自體を抜きにした、見知らぬ男へのいきどおりとも、一脈相通するものがあつた。つまり、受胎という動かし難い證據をつきつけられながらも、まだしも少女の性の眼覺めを過少評價しようとする、得手勝手な臆測であつた。一片の愛情は勿論、刹那的な快樂さえも知らずに——或はもしかすると暴力による強制によつて——ただ人形のような無智と無力さとして、男の欲情の下に轉がつた少女を、私はふいと想像してみた。そして、こんな、推定し得る可能の限界を超えた臆測に、私は自分ながら苦笑しないではいられなかつた。けれど考えてみれば、私はこの少女から、私自身が傷つけられるのをおそれていたのである。かなりな放蕩もして來た私であり、また婦人科醫としての知識から言つても、女というものの正體の大半を知つていると自

負している私には、このみすばらしい小娘が、ある方面に於て私と同等な、またはそれ以上のものを體驗しているとは思いたくなかつた。

私は少女に、強心劑と葡萄糖とを注射したのち、しばらく通院するように告げた。

歸りがけ、彼女は何か物言いた氣に一寸口許をうごかしてためらつていたが、やがて、「武藤の小母さんがあとで來ると言つていました」と、ふいに哀訴するような眼になつた。私はこの言外の意味を了解することができた。武藤かねに、眞實の病狀を話されることをおそれているのだ。だが少女は、私の返事も待たず、いくぶんしつかりして來た足取りで、逃げるようにして去つた。

一時間ばかりすると、武藤かねが來た。入るなりの騒々しさで、「どんなあんばいだったなも」と、不安よりもむしろ好奇心で輝いた顔であつた。私は持てあまし氣味に、だが少女の去つたあととひそかに用意しておいた言葉で、好い

加減な病狀の説明をはじめた。わざと意地悪く、なるべく相手が知りそうもない専門的な用語を引用して、言わば、私自身まだ出くわしたこともない、奇妙な病氣ができ上つたわけだが、どうやら武藤かねは、けむりにまかれた恰好で納得してくれた。「そうかなも、そんなもんかなも。なんだか知らんけど、あんな若いこが、……病氣ておそろしいもんだなも」私はふき出しそうになりながらも、心はどこか後めたかつた。こうまでして少女の過失（私は殆どもう過失と信じこんでいた）を、辯護してやらねばならない自分が、わからなかつた。「とにかく、あの子も……」と、武藤かねはまたもや、既に私に語つた少女の經歷を再び繰り返して説明した後、からだの方のことは勿論先生のご厄介だが、お顔が廣いんだから、どこかい勤め口をさがしてやつてくれと、これとても何度目かの依頼であつた。早口な語尾にうるさいほどなもをつけるくせがあり、しかもそれが妙に尻上りな調子で、聞き馴れていても、一々だめを押されてい

るようで、いやな感じだった。

2

めまぐるしく動く武藤かねの黒ずんだ唇をみているうちに、突然、啓示のよ
うに閃めいた考えであつた。いや啓示といつてはいけない。これは本來、神の
示し給う正しき教えについて使われるべき言葉である。それでは、胸底の小は
こに眠つていた私の小悪魔を、ひよいとたたき起されたと言うべきであろうか。
いや、これもまたうそだ。もつと以前から、機會をねらつて毒牙をといでいた
というのが正しい。私は改めて水田さち子と呼ぶ少女の扁平な臀を思い浮べた。
私の心を、ある残忍な考えが占有しはじめた。つい先刻まで、彼女に對して抱
いていた私の同情は、洗い立てれば、すぐに加虐的な欲望に變貌する性質のも

のであつた。

事實、私は、妻の歸省の話が出た時から、既に一つの期待をひそめていた。

もともと餘り健康でない妻は、夏にむかうと共に衰弱が目立ち、血沈も下りはじめた。妻の希望もあつて、暑いうち二た月ばかりのあいだ、實家へ歸つて保養させることに決めた。私の傍におれば、毎日の注射などには好都合であつたが、やはり安靜を心がけていてもつい臺所などもすることになるし、一つには別居による、強制的な禁慾生活を行うためであつた。妻の實家は岐阜縣の奥で、いまだに少し入つた所では熊が出ると言われ、山峽の空氣は新鮮だつた。で、十日ほど前、妻は實家にもどつたが、その時の私の氣持を、極めて俗っぽい表現をかりて言うなら、つまり、「鬼の居ぬ間に洗濯」という、あれに似たものであつた。但し、妻を鬼になぞらえるのは適切でない。私達の夫婦生活に於て、妻が多少でも私を束縛していると思つたことは、先ずなかつた。逆に、彼女は

餘りにも無智で従順だった。結婚後も、私は他の異性との交渉を持つのに、何ほどの制御も感じたことはなかったし、それらはすべて、波瀾と呼ぶにさえ足らぬ、小さな波を起しただけで、結末をつけた。いわば、私は家庭内での暴君であつた。貞操などというものを一笑に附し、夫婦生活を、單なる便利主義的な形式上のこととし、お互の自由には一切干渉しないとうそぶいていた。が、
肚をさぐれば、自己の放埒への僞装であつた。相手の弱みにつけこみ、自分の傲慢さには眼かくししているばかりか、その傲慢のままを押し出している姿であつた。妻には何一つできないのだと、たかをくくつていたのである。おそろく妻の側から、これと同じ言葉が吐かれ、行われたら、私は滑稽なくらい狼狽するに違ひなかつた。が、いずれにしても、妻が約二カ月ものあいだ、私と別居するといふ事實は、私に少なからぬ影響をあたえずにはいなかつた。二十二の春に結婚して、今年で三年間、内地だけで六ヶ月の海軍生活を除いて、

病人を取扱う職業の私は、二日と不在したことはなく、また妻の歸省も、五日を超えることはなかつた。ただ、いまこうして妻の長期に亙る不在に臨んでも、所謂、空聞の寂しさをかこつ氣持は殆んどなかつた。それは自分でも不思議なほどなかつた。それよりもむしろ、そのあいだを、全くの無爲にすごすこと自體に、不甲斐ない自分を覺えていたのだ。あたえられた機會を、腕こまぬいて見送つてゐる姿が、ひどくお人好しな、しみつたれた男に見えた。自分がそこまですで家庭的に枯渴し、世帯じみていると思いたくなかつた。學生時代、ある女との失敗に起因したというものの、われとわが身をおとしめてまで、放埒な社會をさまよつて來た私が、ただ妻を持つたというだけの世間的なわけで、ただちに私の生活を、その規準のなかにおしはめることはたまらなかつた。勿論一方的な辯明であることはわかつていた。理屈にならない獨善なことも知つていた。けれど、妻にさえ、私は、私の「個」のなかにふみこんでもらいたくはな

かつた。私はこの獨善的なおのれの心に言いきかせるためにも、貞淑な夫を鼻であしらわねばならなかつたのだ。

もし私が水田さち子のために適當な勤め先を世話するとすれば、その後の二人がどのような経過をたどつて行くかは、容易に豫想されるような氣がした。私は、私の胸の下におしひしがれる、やせた少女のからだを思い描いて見た。小鳩の首をしめるに似た、冷酷な快感だつた。私は眞劍になつて、適當な就職口を、心の中にさがしもとめた。

翌日から、往診のあいまをみて、知己をあたりはじめた。思い立つと、私はもうこの計畫に夢中になつていた。さち子そのものへの興味ではない。とぎすましていた毒牙の對象を得た、野獸の行爲に等しかつた。さち子は毎日増血劑の注射に通つた。経過はよかつたが、何かおすおすした態度で、診察中も殆ど口をきかなかつた。それもまた、私は善意に解釋つけた。彼女のために奔走し

ていることは話さず、むしろ私も強いて冷淡な態度を持した。成果をたのしんで計畫を伏せておく、子供っぽい氣持だつた。某化粧品店と、病院の見習看護婦と、商事會社と、木工所の事務員と、それが知己の範圍内で擇んだ候補であつた。電話したり、直接足を運んだり、外は目まいする程の暑さが續いていたし、ばかばかしい努力はともかく、かえりみれば、おのれの行爲への惛りは拭いきれなかつた。究極の目的が、あきらかに肉體の代償を期待したおせっかいであるだけに、その不潔さに、酸性の唾液がにじみ出た。私はそうした自己に當てはめるべき、最も適切な言葉を知つてゐる。曰く、「おためごかし」——これでは、武藤かねの話にあつた、ダンスホールの管理人の行爲と、かわりなかつた。しかし、いざ實際的なものに當つてみると、くどいほどきかされていたはずのさち子の經歷も、如何に杜撰なものであつたかを悟らねばならなかつた。「學校は？」ときかれるたびに、まず私は口ごもつた。奉天の女學校を何

年まで行つたのか、どの程度の學力があるのか、見當もつかないことであつた。

「そろばんは？——タイプは？——」私は一そうしどろもどろした。肚をみすかされているような居心地悪さだつた。「人物は保證してくれますね」ええ、と困惑した顔で、あいまいにこたえるより他なかつた。

→通りあたつた後、おのおのの條件が出そろつたのを待つて、はじめてさち子に就職の話を切り出した。さし出がましい行爲と、唐突さをカバーするため、責任の大半を武藤かねになすりつけて、彼女の依頼で仕方なくさがしてみただといふ口吻であつた。が、内心は得意だつた。當然相手の感謝を期待していた。實際、化粧品店にしる、病院や木工所にしる、かなりいい條件だつたし、それは、私の顔を立ててくれたせいも随分あつた。それに、私は將來の口うるさい噂や紛糾を警戒して、あらかじめ、既にさち子が私と或種の關係のある女であるようなことを、雇主のそれぞれに對してほのめかしておいた。さち

子を憎伏させることを、既定の事実と決めこんだ、強引で、狡猾な苦肉の策であつた。

「まだからだの方もつきりしませんし、もう少し考えさせていただけませんかしら」

私の言葉が全部終つてしまふまで、氣になるほどの無表情さできいていて、最後に言つたのが、それだつた。むげに好意をつつ放された不快は、思わず私の顔にまで出たに違ひなかつた。

「むろん、別に急いだ話ではないんだけど、ただ……」

私はまたしても、武藤かねに依頼されたのだという意味を繰り返さねばならなかつた。自分で自分の言葉の、整理のなさが、心とがめた。さち子の無言と無表情とが、ひどく非情なものに見えた。聞いていないようにさえ思われるのであつた。けれど、考えようによれば、これは、肉體の秘密を知られた唯一

の男に向つて、精一杯の虚勢を保とうとする、かたくなな態度とみえぬこともなかつた。が、いすれにしても、私は今になつて自分の輕卒を恥じなければならなかつた。もつと氣ながに待つべきであつた。せきこんだ行爲が、相手の心に意識的な冷淡さを導き出す結果になつたのである。ふいに同情の押賣りをするのは、たしかに彼女の傷口をつつくにも似たことに違ひないのだ。

「氣がむいたときに、またそう言つて下さい。いつでも先方に話しますから」
止むなく、そんな結びをつけたが、後味の悪さは、ごつんと残つた。

「私、いま、……中華語ができますから、そちらの方でなにかないかと、さがしていますの」

こんどこそ、假借なく、思ひ上つた私をもみくちやにする言葉であつた。眞向から、私の親切に拒絶を示した反抗だつた。年の幼なさから來る、エチケツトの貧困と解釋づけてみても、さすがに、私の失敗は動かしがたい事實であつ

た。

その日から、さち子は注射をうちに來なくなつた。弱みを、すばりと指摘された心の疼きがあつた。手のなかに入りかけた珠を、ひよいととり落した、あの氣持である。ひとり相撲だつただけに、尙さらいけなかつた。その頃、實家にいる妻から手紙が來て、私がないと思つて浮氣なんかしているのじやないでしようね、とそんな意味のことが拙い文字で書いてあり、皮肉られているよ
うで、焦燥をあおり立てる結果になつた。

二三日經つた或る日、修繕に出しておいた懷中時計を受取つて、時計屋を出た私は、ちようど、むこうから歩いて來るさち子の姿をみとめた。距離があるので、先方は氣づかぬ様子だつたが、最初に診察室を訪れたときと同じな、そしてその後もすつとそれを着ている、色あせたブラウスが、すぐに眼をひいた。まぶしく照りつける陽のせいか、いくらか血色も出てみえたが、なぜか今日の

さち子は心たのしそうな、浮き浮きした足取りであつた。小さな風呂敷包をばんぼん投げ上げながら、その様子は、今まで診察室のなかで示した態度とはまるでちがつたものであるだけに、ちよつと奇異な印象を私にあたえた。もつとも、一面から言えば、始めて年令に相應した無邪氣さを發見した思いでもあつた。まもなく、さち子は私をみとめた。東の間、おどろいた眼で立止つたが、すぐにくると身をひるがえしたかと思うと、五六歩は足早に、やがて逃げるようにして、もと來た方へかけ出した。色あせたブラウスの臍脂が、ひよいと鮮明に陽射しを反射した。私は反射的にあとを追おうとしたが、思い止つた。呼び止めて聲をかけるべき話題はなかつたし、そこまで膝を屈した態度はとりたくなかつた。

駆け出したさち子を惜しむ心が落着くとともに、軽い安堵がそれに換つた。

これもまた、私の自惚れには違ひなかつた。女性のみせる羞恥に、ふいといつ

入る間隙を見出したような氣持になる、虫のよさであつた。いや、さち子の示したものを、羞恥とみることからして、既に速断であつたかも知れない。けれど、その時の私としては、あれ以來急に注射をうちに來なくなつたことや、私をみて身をひるがえしたことなどを思いあわせて、それらが、或るほのかな感情を基底とした、一連の行爲のように思われて來たのだつた。そして時間とともに、この考えは次第に動かしがたいものとなつて、根を下した。が、まるでそれを裏書きするように、その夜、さち子が私の家を訪れた。

さち子はガーベラの花を持つて來た。「ひるまはどうして逃げ出したりなんかしたんです」と訊いた私にはこたえず、いきなり、「これ」と背中にかくし持つようになつていたので、私の眼の前へつき出した。いたすらつ子がよくする、あの姿勢であつた。何かの感情を押し殺すために、わざと振舞つた粗暴さのようにもとれた。私は微笑しながら受取り、室のなかへ招じ入れた。さち子に

ガーベラの花をあてはめてみることに、滑稽だった。彼女のみすぼらしさと、あまりにちぐはぐで、花の強烈さだけが遊離していた。嬌慢に咲き切った真紅の花は、花瓣の一枚一枚までが、ぎりぎり一杯のきびしさで咲いているのだ。たつた一枚の花瓣が凋落してさえ、忽ち、花の全生命が奪われるかと思えるのであつた。むしろ、毒々しいまでの、妖婉な女にこそふさわしかつた。

「お勤めの方、世話していただこうと思つて、伺いましたの」

またしても、室に入つたとたんから、たたみこむような、せつかな口のきき方だつた。けれど、私はほくそ笑んだ。とうとう來たと言つた感じだつた。もつとも、花瓶に花を挿そうとして、背をむけていたので、これはさち子には氣づかれなかつた。わざとゆつくり花を挿し、振返ると、さち子は困つたように眼を伏せた。私はすっかり勝誇つていた。椅子に腰をおろし、さち子にもすすめたが、うなづいただけで、かけなかつた。こうしていると、ちようどいつ

かの日と同じに、さち子の腰のあたりが視線の真正面に來、再びスカートのわきスナップの千切れを、いやでも見せつけられることになるのだつた。私が發見してからでも、十日あまりになるのだし、その無頓着さに、あきれた。一そう、ガーベラの花とは遠のいた印象になつて來るのだつた。私はふと、それをさち子に注意してみたい衝動におそわれた。

「もう、からだの方もよくなりましたし……」

私がだまつているので、さち子が催促するように語を重ねた。その言葉に、私はふいとある奇妙な氣持を味つた。それまでから、いきなり要點だけを切りこんで來るさち子の態度に、ある物足りなさを感じてはいたが、今の一言が、ひどくそつけない響きを持つて、心を押しした。どこかに不逞を感じさせる不満であつた。が、すぐにそれが、或る儀禮的な前置詞を省略されたせいで、氣づいた。一體が、患者が醫者にむかつて、自己の疾病の輕癒を告げる場合、殆

ど例外なしに、「おかげさまで」とか、又はそれに類する言葉が、その上にかぶせられるのが常であつた。勿論形式的のことであり、言葉のはずみとでも言つた方がいいことに違いない。私としても、これまで、それを氣にとめたこともなく、こんな紋切型の修辭を期待するはずもなかつた。にもかかわらず、いまふいに、さち子の言葉からそれが除外されてみると、奥歯の抜けたような思ひがあるのは、ふしぎだつた。無邪氣さとか、世間馴れぬせいだけでは、片附け切れぬものがありそうであつた。意識の外にはみ出して來る、さち子の性格の一端とみるのは、思ひすごしだろうか？

「で、どこが希望なんです。……病院なんか、個人のところとちがつて、氣樂でいいかも知れないけれど」

たばこに火をつけると、私はいくぶん切口上になつていた。最初に病院を出してみたのは、絶えず私がいろんな用件で訪ねて行くところだけに、何かに

つけて好都合だと思つたからであつた。野望をひそめての、誘導だつた。けれど、さち子は言下にこたえた。

「私、集團生活はいやですの」

「それなら、化粧品店にしますか」

「人前に顔をさらす仕事も、いやですわ」

「それじゃ、……」

明確に意志表示のできる少女であつたことが、意外だつた。意外というより、一そ、不愉快であつた。むしろ、一切を私に任せ切つて来るぐらいに、お高く止つていたのだ。はなからみくびつていたのである。大げさに言えば、他愛なくつかまえたと思つた甲虫に、いきなりかくしていた針で刺された思ひであつた。

「近くですし、木工所の方へお世話願えませんかしら」

私が紹介したうちでの、一番条件の悪い木工所を擇んだ理由は、不可解であ

つた。そこまで依怙地になつてゐるのかと、一應うたがつてもみた。

「とにかく、もう一度先方によく話してみなければ解らないけど、まあ、どちらにしろ、きくだけきいてみましょう」

私はにわかに言葉をあいまいにして、氣乗りのしない返事になつてゐた。

3

服装が異つていたので、遠目には人ちがいかと思つた。背景にしている黒ずんだ塀から、純白のワンピースが浮かび上つて、鮮かだつた。ふつくらとしたドルマン・スリトプに、思い切つてウエストを締めたスタイルも、悪くはなかつた。ハンドバックも、白革のサンダルも、今までのさち子とは、およそかけ離れた立派なものであつた。軽いねたみが私の心にあつた。例の、わきスナツ

プの千切れたスカートの方が、こうなつてみると、どれだけ安心感をもたらしたか知れない。然し、近よつてみると、化粧は下手くそで、口紅のあかさだけがいやに目立つた。午後の陽射しをまともに受けて、むせるような脂粉の香であつた。さち子はひとつ微笑しただけで私が近寄るのを待ち合わせず、道を知つた案内人でもあるように、先に立つて歩き出した。またも、心のどこかで待ち設けていた、謝禮の言葉をはぐらかされた思いに鼻白みながら、あわててさち子とならんだ。

「履歴書かいて来た？」

ええと、さち子は左手に持つた、新聞紙でまるくくるんだものを示した。

一昨日の夜さち子が訪ねて来たあと、なにか釋然としないものが残るには残つたが、結局私は、改めて木工所の主人に連絡をとり、さち子を引き合わせる手はずに運んだ。ここまで来て、引き退る術はなかつた。木工所というのは、

私の家から徒歩で二十分の距離にあり、主に洋家具などをつくつてゐる、かなり手廣な工場であつた。主人は、些事に無頓着な氣兼ねのいらぬ人であつた。

「自轉車には乗れるだろうね」

ふと、きき忘れていた重要なことを思いついて、さち子にたずねた。豫想外だつた彼女の服装へのおどろきが、まださめ切らず、肩をならべていることに、勝手にがいな面映ゆさがあつた。

「全然だめなの」

さち子は言下に首を振つた。氣がつくと、いつのまにか、私もさち子も、すっかり馴れ馴れしい言葉づかいになつていた。診察室という、なにか重苦しい雰圍氣から解放せられたせいかも知れなかつた。

「母が日本趣味に育ててくれたから、自轉車なんか、見ただけでも恐いの。でも、お琴や踊りなら、多少自信あるわ」

奉天で聲樂を習つたという武藤かねの話とは、幾分喰違うものがあり、どこまでが本當か、ちよつと信じかねる思いであつたが、しかし、それは別として、私はさち子の返事に、思はず顔をあからめねばならぬ當惑があつた。というのは、實は、木工場の主人が先日そのことを私にたすね、その時私はとつきの獨斷で、乗れます、とこたえておいたのであつた。

「自轉車に、乗れなきやいけないのかしら」

私の様子を察してか、さち子がやや不安氣にきいた。

「いや、そんなことはないよ」

あわてて打消したが、かくし切れない周章があつた。

話はすぐきまり、明日は月曜で電休だから、あさつてから來てくれということになつた。履歴書にはかんたんに眼を通しただけで、「これくらい書ければ、事務の方は大丈夫でしょう」と、やはり実用的なみかただつた。私は流し眼に

のぞきこんだが、奉天市云々の數字が見えただけであつた。恐れていた自轉車についての質問は、再び本人に向つてくりかえされた。私は視線のやり場に困りながら、なにかに祈るような氣持でもあつた。見えすいた當座の言い逃れにせよ、この場合、どんなにか乗れると言つてほしかつた。が、さち子の返答は正直であつた。私は面も上げられなかつた。主人はしかし、格別意にとめた様子もなく、若いんだから、二三日稽古すればすぐ乗れるようになるさ、と、あつさりしていた。救われたという氣持は、同時に自己の卑劣をはつきりと意識させるものであつた。

かえりがけ、さち子を誘つて附近の喫茶店に入つた。私には、一氣にさち子との間を、結末にまで導いてしまいたいと、はやる心があつた。さち子が新しい勤務に出る以前に、つまり今日か明日のうちに、お互の距離を決定的なところまで短縮しておく必要があつた。彼女が勤めに出れば、午前八時から午後

四時半までの間は、完全に私との個人的な交渉を遮断されることになるし、午後六時から、私の夜の診察時間になつていた。その上悪いことには、休日までがくいちがつているのだ。どちらにしたところで、こんな小娘にいつまでも手を焼いている私であつてはならなかつた。延引すればするほど、押しつけ親切の恰好がつかない。

さち子の紅い唇が、妙に心をかり立てた。けれど、話題はなかつた。奉天における生活などきいてみたが、餘り話したくない様だつた。亡くなつた父について、「奉天では誰でも知つてゐるくらいの人だつたの。その娘が、こんな風にうらぶれていると解つたら、きつと、地下でなげくに違いないわ」それ以上はそらして語らなかつたが、その語調に、自棄を思わせるものはなかつた。そんな、焦點の合わない話題をもつてあそびながらも、私の頭は抜目なく、喫茶店を出てからの計畫を追求していた。

けれど、それは、思わぬ闖入者によつて挫折された。——ちようど、私は入口から真正面にあたる位置のボックスに、さち子と向い合つて腰を下していたが、その時、表のガラスを、派手なグリーンの影がよぎつた。何氣なく眼はしで追うと、その肩のいかつた歩き方に見覚えがあつた。井口夏子——そう悟ると、思わすぎよつと、たじろぐものがあつた。あわてて面を伏せたときには、おそかつた。僅かの差で視線が合い、夏子は軽い叫びをあげたかと思うと、もうためらいもなく店のなかに入つて來た。

「お久し振りね、どうしていらつしやるの？」

迷惑を通りこしたはげしい羞恥だつた。百人もの視線を一時に浴びた思いである。かつと頬がほてつて來るのが、自分でもわかつた。夏子は私の思惑には容赦なく、思いがけないところで會つた喜びを今にも手を握りそうな様子に示しながら、どもり勝ちな早口で傳えた。前のボックスにすわつたさち子の存在

など、はじめから無視した態度であつた。せめてものことに、夏子が無言でいてほしかつた。無言でさえいてくれれば、おそろく大部分のひとがそれと氣づかすにすむのだが、口をきくたびに、顔全體の筋肉が醜くひきつり、誰の眼にも、此の女が何かの病氣におかされていることが歴然とするのであつた。猿の嬌聲に似た、おそろしく神經をたかぶらせる聲であつた。

ここで、一應、井口夏子のことを説明しておく必要がある。

二カ月ほど前、所用があつて、上前津の方へ出かけた時のことだ。事故でもあつたのか、上飯田行の折返しがいままで待つても來ず、私はいらいらしながら電停に立つていた。二十分も待たされ、あきらめて、金山まで徒歩で出ようと決心したとき、ふと注意をひいたものがあつた。ちやうど、築地口から來た電車が、満員の乗客を吐き出したところだつたが、そのなかのひとりの女が、

私の眼にとまつたのである。氣にかかる歩き振りであつた。もつとも、不用意にみれば、大抵の人が、なにか物倦氣な歩行ぐらいいに見逃がしてしまふにちがいない。ごくわずかな緩慢さであつた。然し、それが或る種の歩行をカヴァーするための緩慢さであることが、私には直感として來るものがあつた。知らぬまに身につけた、職業的な眼のせいでもあるであろう。とにかく女は、餘程の忍耐的な習練の結果に相違なく、速度のおそささえ除けば、ほとんど氣づかれぬくらい巧みに歩いてはいたが、それは、醫學用語でいう、^{チアレキ}兩癱にまちがいなかつた。そして、極めて軽度ではあつたが、常態のそれに比して、^{アトロヒ}萎縮さえも兩脚にあらわれているのであつた。女としては、いかり氣味の肩も、歩行の平衡を保つためと知れた。但し、私はこうしたことを決して長時間觀察していたのではない。彼女の上に、小兒麻痺かなにかの後胎症と思われるものを發見すると同時に、すぐさま視線を他に移した。相手を傷つけることをおそれたというより、傷つ

けた相手から、おのれにはね返つて来るものを防備する心であつた。ただ、彼女もまた上飯田行の折返しを待たらしく、私たちの列に近よつて来るのを見ると、金山まで徒歩で出ようとした私の決心は、消え去つた。やはり好奇心があつた。はつきりした病名をつきつめなければ後味の悪い醫者としての心もあつたのかも知れない。電車を待つあい、私だはさとられない程度の觀察をつづけた。二十一、二になつてゐるだろうか。美貌とはいえないまでも、輪廓のはつきりした顔は、どこかにいどむような魅力があつた。化粧も、うまい。服や装身具にしても、趣味の悪さを除けば、りゆうとしたものであつた。ただ、額のあたりに、痼性らしい青すじが斜めに走り、さすがに病的な印象であつた。私その他、彼女に注意をはらつてゐる者はなかつた。

待ちあぐねた乗客をつめこんで、電車は起點からすでに満員だつた。偶然と言おうか、私とその女とは、最後部の窓際にもみくちやにされながら押しつけ

られることになった。電車の動搖につれて、女の髪が、私の鼻あたりを、くすぐたく刺戟した。力の喪失した兩足で、重心を支えることは困難らしく、カブに來るたびに、私の胸へ烈しく肩をぶつつけて來た。じかになだれかかつて來るので、彈力を持った感じではなく、妙にぐにやりとした重量であつた。女はその都度、ひどくすまなそうに頭を下げるのだが、口は利かなかつた。物言いたげに唇をひくつかせるだけで、結局聲にはしないのだ。それが、顔面の筋肉までがおかされていて、思うように喋れないせいでと推察がつくと、頭を下げられるのがかえつて心苦しかつた。その位置にいる自分に罪があるような、落着きの悪さであつた。やがて、女はポケットから切符の綴りを取り出し、その一枚を切り離そうと試みるのだつたが、無慙にも、その指もまた自由を半ば奪われていた。麻痺が來ているのだ。車の動搖から安定を保つのと、兩手で切符を切り離そうとするのと、その二つの動作は、健康な者の想像を超えた、異

常な努力に相違なかつた。意にまかせぬ動作にいらだつて來ると、次第に、女の手や顔に、舞踊病様の徴候があらわれて來るのであつた。整つた顔も、次第に醜くひき歪んで行くのは、見るに堪えなかつた。

リットル氏病！——單にこれだけの觀察で診斷を下すのは、はやまつている。然し、まずそれに間違いないと、信じた。何度かためらつた後、遂に思い切つて言葉をかけた。

「失禮ですが、僕が切つてあげましょう」

女はあつげにとられて、私を凝視していたが、ふいに、ぐいと引しぼつたように顔をひきつらせると、始めて、すみませんと聲を出した。調子外れに高い、痙攣性の叫びであつた。おどろいた周囲の眼が、一齊に私たちの方へ集つた。心の構えがなかつただけに、私はかつと上氣した。女は私よりも一區手前で下車したが、その時もう一度、痙攣性の聲で謝意を述べた。

よくよく奇遇の運命であつた。その後十日ほどして、私は再度その病女に出あつた。やはり同じ電停で、しかも女は同じ築地口から來た電車から降りて來た。遠くからみるなりもう親し氣な微笑で、顔はひきゆがんでいた。

「こないだはすみません。——またお會いしましたのね」

相手してみれば純粹な感謝には違ひない。だが、私の方では受けたくない感謝である。出來れば逃げ出したかつた。私は仕方なく曖昧に微笑してみせた。

「どちらへいらつしやるの、お遊び？」

私の意向などは全く考慮の外にあつた。私の困却を知つて、わざと意地悪く話しかけて來るようにさえとれた。が、私はよくよくうかつであつた。訊かれるままに映畫を見に行くところだとこたえ、そればかりか、うつかり、その題名までも告げてしまつたのである。とたんに、女はうれしそうな悲鳴をあげた。實際、悲鳴と言つた方が正しい聲であつた。

「ちよūdいいわ、私も行くところなのよ。一緒に参りましょうよ」

僻易しても、それが通じない相手であつた。返事に窮すれば、はにかんでい
るとでも思つたかも知れない。この向う見すな神経にはあきれる他はなかつた。
病女と行動を共にしている自分を、想像するだけでも、やりきれなかつた。ど
うにも恰好がつかないのだ。あざけつてゐる衆目が、痛いほど感じられる。診
察室を一步外に出、私の受持患者の地域を離れた以上、も早私達二人を、醫者
對病女として眺めてくれる人があるはずはなかつた。とんだ茶番狂言の、戀人
同志にでもみられるのが關の山だ。しかも、嘲笑の穂先で痛手を受けるのは、
私だけであり、女の方は、その圏外に立つていられるのである。むしろ、彼女
の智能程度が疑わしかつた。そこまで自覺のないのが意外であつた。むろん、
リットル氏病に於て、ある程度の痴呆のあらわれることは、それほど稀なこと
ではなかつたが、彼女の場合、他の方面には別段智的缺陷があるとも見えな

つたし、結局、病氣への自覺とか、羞恥とか、そう言つたものだけが、都合よく障碍されているとしか思えなかつた。他人迷惑な、選擇的な障碍である。が、しかし、相手に自覺がないとすれば、私はますます彼女の申出を拒絶しがたい羽目に追いこまれて行くのであつた。障碍を受けている彼女の中樞に於ける連絡路が、私の一言によつて、いきなり、ひよいとつなげれないとは、斷言できなかつた。私の返事次第で、忘却の彼方にある一つのいまわしい想念を、ふいと呼びさまして來る懸念は、充分にあつた。或る程度の痴呆にしろ何にしろ、矯正すべき可能性のない缺陷に關する限り、その無自覺はいたわるべきであつた。羞恥する當人より、羞恥を強いたあとのおのれの立場が、避けたかつた。私は複雑な表情で彼女に同意をあたえた。

極力會話をさけた。喋りさえしなければ、一應、美貌の部類に入れる女であつた。だから、映畫館での二時間の暗黒と無言とは、ありがたかつた。ただ、

休憩時間に、ハンドバックから板チョコを出してすすめられると、どきりとし、身の處置に困つた。砂をかむ思いの板チョコだつた。

「お茶でも飲まない」

遠慮會釋もなく、おのれの思考のままに、引きすつて行こうとするのである。

六番町の麻雀屋の娘であること、毎日退屈で持てあまし、五日に一度は映畫に行くこと、家は兄夫婦と自分だけが自由に放任されていること、名は井口夏子ということ。次々と、ひきゆがんだ顔面から、奇妙な聲が飛び出して來るのであつた。そしてそれが終ると、今度は、私のことを根掘りにしてきき始めるのだ。私はやむなく、吉岡という偽名をつかい、會社員だとうそをついた。手紙を封するためには、兩親がひどくうるさいからということにしておいた。眞實の住所や名前を告げようものなら、手紙どころか、家まで訪ねられそうであつた。

考えてみれば、私はただ、妻があるということのみ話しておけば、それで一切が清算されていたのである。あとになつて、私はそれを話さなかつたことを、どれだけ後悔したか知れなかつた。こんな病女にむかつてさえ、でき得れば獨身ぶつてみたい意地汚い心であつた。

井口夏子はしちくどく、再會をせまつた。餘儀なくそれも約した。もちろん、それはすつぽかして行かなかつた。

「吉岡さん、あなたこの間どうなさつたの、随分待つたのよ」

あごをぐいと引きつけ、それから下唇をひんまげ、今度は逆にあごを斜め上方につき出し、始めて聲になるのである。あごの運動につれて、兩肩がいかり、またさがつた。

「明日、遊びにいらつしやらない？ お店が休みだから、兄さんたち出かける

のよ、私ひとりきり。ねえ、いらつしやいよ、……暇がないなんて、そんな、……一時間でもいいわ。三十分でもいいわ、会社の歸りにでも寄つて下さればいいじやないの、市電を下りたら五分と歩かなくてもいいのよ、すぐわかるわ。……大丈夫、お兄さんたちが歸つて來ても、吉岡さんのこと、すつかり話してあるのだから」

會社とか、吉岡とかをきくたびに、おのれの入る穴をさがしたいほどの氣持であつた。さち子の方を臆病な眼でうかがつてみたが、彼女は素知らぬ顔で、壁にかかつた油繪をみていた。

ひまがあつたら行くと、やつとそれだけの言質をあたえて、夏子とわかれ、喫茶店を出ると、文字通り虎口をのがれた思いであつた。が、同時に、夏子のことを、さち子にむかつてどう説明すべきか、私はいそいで頭をはたらかせねばならなかつた。

豫期しない病女の出現に出鼻をくじかれて、私はすっかり不機嫌になつていた。さち子と氣ますいわかれ方をしたことへの忿懣が、すべて、夏子への憎惡に轉嫁された。積み上げた石を、夏子の一觸によつて、基底がち打ちこわされた、いまいましてさであつた。喫茶店を出てからも、さち子に對して、何の説明も辯明もできなかつた。説明すべき言葉がなかつた。市電の切符を切つてやつたのがきつかけで、一緒に映畫に行つたなど、ばかばかしくて話す氣にもなれなかつた。話しても、うそに聞えると思つたし、まして、病女への同情を、ひけらかしてみるのは、氣恥しかつた。代償を期待しないゆきすりの惻隱の情が、思いがけない結果を招き、始めから含むところのあつたさち子への同情の押し

つけが、いつまでも同じところで堂々めぐりをして居るのは、皮肉だった。しかし、それはそれとして、私には、夏子についてあまりにも無關心なさち子の態度が、うす氣味悪かった。正直のところ、辯解しようにも、そのきつかけさえもなかつた。たつた一言でいい、「どこの人？」とでもきいてくれた方が、どれだけ助かつたか知れなかつた。無視された焦燥だった。私自身が無視されているのだ。帰宅後、私は熊のように室のなかを歩きまわつた。机にむかい、かり立てられているようにペンを執つてみた。さち子に手紙を書こうとしてみたのだ。が、一行の文句も出て來はしなかつた。餘りにも幼稚なおのれの行爲が、すぐに反省された。そらぞらしいくどき文句は、書きたくなかつた。私はいつしか、最初の意志に反して、田舎の妻への手紙を書いていた。けれど、それは尙さら私に空白感をもたらすものでしかなかつた。

先日、ガーベラを持つて訪ねて來たことと言ひ、その夜の意外な訪問といい、

さち子には、或る意識的な冷淡さのあと、ふいと豹變した狎れを示しかけて來るところがあるのかも知れなかつた。夕食後、心のわだかまりを投げやるような思いで、散歩がてら家を出た私は、出あいがしらにさち子にあつた。

「あまり暑いから、夕涼みに出たの。どこかお出かけ？」

くみし易いとみくびられているのは、私の方であつた。頭からなめてかかられていたので、が、それは後に至つて氣づいたことであつて、その時の私は、單純にさち子との邂逅を喜んだ。持前の自惚れのなかへ、手易くおのれをおとし入れた。はしやいだものをかくし切れず、私はすぐにさち子を誘つて歩き出した。

市内とはいうものの、すつかり田舎だつた。盡きた命數を無理矢理ひきのはされてゐる老朽車が、單線でのろくさと走つてゐる電車通を、一步なかへ入れば、一帯の田地である。蛙ばかりが、かしましく鳴いてゐる。たまに夜空に青

白く光る市電のスーパークでも見えなければ、ひどく山家に來たような錯覺におそわれる。もろこしが人の背丈ほどのびてい、私はわざとそんな道をよつて歩いた。時々、蚊の集團が、顔にまとわりついた。湿度の高い、ねつとりとした晩であつた。道は細く、自然、より添う形になつたが、私は無意識を装いながら、露わになつていゝお互の二の腕を接觸させてみた。子供じみた遊戯であつた。けれど、私は、十七の少女をくどくには馴れていなかつた。どこかにずれがある思いで、もどかしかつた。觸れ合つた肌を、敢て避けようともしないさち子の態度を、そのまま安直に信じていいかどうか疑問だつた。自分からふれさせておきながら、さて、その收拾がつかぬ形であつた。いつそ、迂遠な言葉は一切ぬきにして、いきなり肩を抱きすくめるのが、最も手近な道にも思えた。暴風的な行爲が、逡巡や反省を吹きはらつて、そのまま一つの麻痺状態にも似たものなかに導き入れてしまうのではないかと思つた。つまり、今だに

私は、肉體の眼覺めを知らないさち子というものを、想像していたのだ。診察室のなかで受けた、最初の印象の殘影であつた。性行爲への羞恥や、おそれや、快樂や、陶醉や、それら一切のものが開花しきらぬうちに、亂暴にしいたげてみるのが、一番有利なようにも思えた。が、しかし、やはりためらいがあつた。

唐突な直接的行爲は、過程の必然性を一足とびにしているだけ、それだけに危険も多かつた。たとえ見えすいたトリックにせよ、相手の尊大をそこなわない程度の必然性を、男性の側が構えてやるのが、順當なことには違ひなかつた。詭計と知りつつ、知らぬ顔を装つてはまりこもうとする心。乗ぜられた形で、逆に乗じて行こうとする心。これが、大部分の女性に共通した心理であることを、私は經驗で知つていた。

やがて私は、われとわが身への憫笑を強いておしのけながら、齒の浮くような言葉のを始めた。結構、三文芝居のくどき文句であつた。ふいと、思春期

の少年にかえつた錯覺におそわれるのだが、よみがえれば、やはり鼻持ちならなかつた。こうした場合のいつもの手段で、極力將來に於ける責任を回避した言葉を擇び、愛情とかそれに類する字句は、一切使わぬように注意した。つきつめてみれば、わが一瞬の肉慾を滿せと、威丈高に出ている言葉で、ただ、如何に修辭を以てそれを偽瞞するかの、陋劣な言葉の遊戯であつた。

「でも、奥さんに悪いわ」

さち子がほつんと言つた。言わせるだけ言わせたあとの返事が、それであつた。無言の持つ効果と、そのあとに來るおのれの言葉の影響とを、心得きつてゐる態度にもとれた。だが、妻を指摘されたおどろきはなかつた。例の病女のように、さち子までが私を獨身と思つてゐるはずはなかつた。近所でもあり、武藤かねの所に下宿してゐる以上、私の家庭は些事にいたるまでつつ抜けてゐるはずである。それよりむしろ、私はその返事を、多分に肯定に近いものだ

解釋づけた。奥さん云々の裏には、もしそうした社會的條件さえ巧みにくぐる
ことができるなら、——或は私がそれを無視する態度を強く示すなら、——敢
て私との矩を超えることをがえんじようとする、女らしいパラドックスである
と思つた。むろんこれとても、私の御都合主義な解釋にはちがいない。

私はふんと鼻で笑つてみせ、さち子の手を取つた。かすかに肩をびくつかせ
ただけで、彼女は素直だつた。

「つかれたわ、私」

羞恥をそぐらかすためとも執れた。

私が立止ると、さち子も立止つた。顔をそむけ、私の視線から逃れていた。
肩を抱いて唇を近寄せると、いきなり思いがけないはげしさで拒んだ。

「なぜ？」

さち子は駄々つ子のように頭を振つた。けれど、こんな場合、なぜときいた

私はおろかであつた。どんな女にせよ、それが適格にこたえられるはずはなかつた。私自身でさえ、なぜ接吻しようとしていいのか、ほんとうにはわかつていながつた。私のなぜは疑問のなぜではなく、強要のなぜであつた。

私のあごのあたりまでしかないさち子を抱きすくめて、私はじつと彼女がかぶりを振り止めるのを待つた。薄うべらな胸は、これ以上力をこめれば、音を立てて折れるかとも思われた。さち子の肩ごしに、私は星の多い夜空をながめていた。ひよいと魂だけが遊離した感じで、私は腕の中のさち子を忘れかけた。が、やがて、私の胸につつ張つていた抵抗が、ふいに喪失した。ぐつたりとさち子の顔が埋まつて來た。思いがけず、髪の香が強く匂つた。私は柔くさち子の兩頬を支えて面を上げ、唇を重ねた。生あたたかい感觸だつた。さち子は臉をとち、喪神したかにさえみえたが、東の間、私の舌の先でさち子の舌が律動的に纏れた。はつとし、思はず舌を引くと、さち子の舌が私の口中へそれを追

つた。細い手が、蛇のように私の首にからんで來た。そして、繼續される繊細な接吻の技巧——。してやられたと思つたのは、その時であつた。自己の敗北を是認しないわけには行かなかつた。屈辱を押し殺すようにして述べた、先刻の乳くさい甘言が胸にかえり、心は無慙に打ちひしがれた。自分がこの上ないお人よしに見えて來た。私は白け切つた顔で、さち子の身體を離した。

『かえろう、あまりおそくなるから』
吐き出すように言つた。

その夜、私は泣き出したい氣持で自慰をこころみた。まるで、中學時代の私のように——。しかし、その時の私にとつては、まだしも自慰の方が、空白のなかから救つてくれるもののように思えた。

あくる日の午後、リットル氏病の女を訪ねた私の行爲は、自分ながら説明の

つかないことであつた。あれほど嫌惡していた女のもつである。往診をすますと同時に、何かの糸に操られてゐるかのやうに、知らぬまに、足がその方向にむいたというのは、半ば當つてゐる。が、やはり、うそでもあつた。或は、おのれの魂を、われとわが手によつて、どこまでしいたげ得るものか、ためしてみたい氣持が働いたとも言えぬことはない。私は、私の内奥にある小惡魔を信じ、むしろそれを誇つてさえいるのである。不潔さに於て、自己を強がつてゐる姿。だから、さち子との口づけによつて、だらしなく打ちくだかれた小惡魔を、再び何らかの手段で、呼びもどしてみなければならなかつた。敗北感は、時間をおけば、鬪志にかわる。さち子に對する、第二の挑戰を開始する以前に、私はまず、井口夏子という病女に於て、私自身が醜惡さに耐え得る限界を、計つてみようとしたのかも知れなかつた。けれど、これとても、所詮はこじつけの域を出るものではない。やはり、「知らぬ間に」というのが、もつとも適切

なのであろう。

住所はすぐにわかった。ちやうど二階の窓からぼんやり外をみていた夏子は、私をみると、きやつきやつと言つたような歡聲を上げて駆け下りて來た。よるこびのために口が利けず、顔はことさらみにくくひきつた。眼覺めたように私は自己の位置に氣づいた。そして、來た早々から、私にも早や後悔のほぞをかまねばならなかつた。夏子は手を引くようにして私を奥へ導いた。麻雀臺が隅に取片附けられ、昨日の話の通り、家人の不在を物語つていた。

「こんなに早く來て下さると思わなかつた。早びけしていらつしやつたの」
私にはまだ、會社員の吉岡という男になりすます、心の準備ができていなかつた。

「顔色が悪いわ、どうかなさつたの」

成程、顔色は沈んでいたが違くない。浮き浮きする理由はどこにもなかつた。

變形した忍耐力だけが、今の私を支えるすべてであつたのだ。

かつて、これに似た経験があつた。學生時代の記憶のなかに、私はふいとそれをさぐり當てた。身の置き所のない嫌悪をおし怵えながら抱きしめた女の映像が、夏子の顔に重なりあつて浮んだ。失敗した最初の女への報復めいた心から、われと頹廢のなかに彷徨していた頃の話である。當時、私はその女を、黄痘アルスという綽名で呼んでいた。まつ黄な、どぎついドーラン化粧のせいであつた。服装は、きまつてけばけばしい原色だつた。横にころがした方が早そうな、ちんまりした體軀で、顔の造作もそれに相應したまるまつちいものであつた。思いつてその不細工さをもとめて、イクテルスと呼んでみることにしたが、まだ幾分なりとも私の自尊心を保護してくれるものであつた。私はその女を、數回にわたつて抱擁した。女は、激して來ると、聲をあげて泣き、身もだえた。翌朝、私の肩やあごのどこかには、齒型と一緒に、必ず黄色いドーランがこびり

ついていた。私までが本ものの黄疸にかかったような恐怖におそわれ、どきりとしたものであつた。けれど、その女のことなら、私はまだ單なるカルカチュアの一齣として見すごしておくことができた。双方ともが、刹那の快樂を得ようとする以外、何の目的もなかつた。お互の肚をさぐり合つてみたり、うそを構えてみたりする必要は、毛頭なかつた。ただ官能を通して挑みあう二人であれば、それでよかつたのだ。要は、私自身、おのれを馬鹿にして、戯畫の一面に身を置いてみることであつた。だがそれに反して、夏子の場合、これはも早カルカチュアどころのさわぎではなかつた。私がこの身を持つて入る安住の地は、どこにもなかつた。

夏子は私に會社のことなどを、くどくどしくききはじめた。そんなことより話題を知らない女なのであろう。見當違ひの場所で、男の歡心を買うのに躍起になつてゐる姿だ。私は否應なしに私の設立した幽靈會社の内容を説明しなけ

ればならなかつた。私の會社は、廣小路のビルの一室をかりている闇を主體とした商事會社であり、私はその下つ端事務員であり、朝九時から午後四時まで帳簿に支配されている男であり、そして、……夏子の質問が進むにつれて、更に私が次男坊であること、家には兄弟がうようよしていること、両親はきびしくてなかなか遊べないこと、まだ戀をしたことはないこと、そして、……私はわが手で掘つた穴のなかに、次第にすべりこんで行かねばならないのであつた。

「私ね、かくしとくことが嫌いでしよう。だから、吉岡さんのこと、ちやんと兄さん達に話してあるの。——一度おあいしたいつて言つてたわ」

もう澤山だつた。彼女の兄や義姉に、これ以上吉岡という男の説明を試みる勇氣はなかつた。早口に喋り立てようとして、はげしい歪曲運動を示す夏子の顔をみていると、私までがづられて、顔をひきゆがめそうになつて來た。いや、

すでに、私の顔はおそろしくまがつていたかも知れない。

「今日、私のために早びけして下さったの」

「あゝ」

「すみません、無理言つて、でも、叱られない？ 會社で」

「あゝ」

「いいわね、たまのことだもの」

「あゝ」

「社長さん、うるさい人？」

この堪らない憎悪から逃れ得る唯一の道は、即座に夏子の家を辭し去るよりなかつた。私は何度たたみを蹴つて、物も言わずにとび出そうとしたか知れなかつた。だが、そうして、この家を辭し去つたあとに残るものが、昨日さち子の場合に味つたのと同じな、みじめな劣敗感でないとは斷言できなかった。お

のれのみにくさに耐え切れなかつた、ぬけがらのような自分を意識するに違ひなかつた。愛を否定し、神を信じ得られなくなつた私にとつて、許された道と言へば、わずかにおのれの醜悪さを、面もそむけず凝視して行く生き方より他になかつた。そうだ、私は私の憎悪を克服しなければならなかつたのだ。

私は亂暴なほどの唐突さで、夏子の腕を取つて引き寄せた。平衡を失つてゐる病女は、他愛もなく膝にくすれかかつた。

「いやッ、——そんなこと、——結婚するまではいや」

阿呆が！ 虫けらのような病女は、私との結婚をさえ考えているのだ。私は女の痙攣した唇に、私の唇をぶつけるようにおしあてた。齒と齒がにぶい不氣味な音を立てた。これは、しやりこうべとしやりこうべとの接吻だ。

「いや、結婚するまではいや」

女は猿のなき聲でくりかえした。結婚という世俗的な埒を唯一の武器にして

いることに、無性に吐が立つた。私は夏子をたたみの上におし伏せた。左手がうじ虫のように、彼女のからだを、胸から下腹部に向つて這い下つた。主要な筋肉が麻痺状態にある病女を凌辱することは、あまりにも容易なことであろう。抵抗は皆無にも等しいのだ。けれど、やがて、夏子の白い下半身を裸體にさらけ出した瞬間、私の淫蕩な手はたと止つた。暴力による凌辱が、果して私の心に勝利感をもたらすものであろうか？ 私は夏子をかき抱いたままためらつた。夏子の顔を凝視した。夏子はただ、いや、いやとくりかえすばかりであつた。

五分——そう、おそろく、實際は一分かそこいらしか経過していなかつたのであろう。が、私はかなり長い時間に思えた。ふいに、夏子がまぶたをとじ、がつくりと顔をそむけた。彼女としての精一杯の緊張を示していた肉體が、一時にぐつたりと弛緩した。ちようど、昨夜のさち子が私の胸に顔を埋めたときのように……。私はにたりと氣味悪く笑つた。勝利の歡喜だつた。女は遂に肯

定したのだ。あきらめにせよ、何にせよ、この瞬間に於ける夏子の意志を獲得したのだ。私の手は、再び無作法にうごきはじめた。私の肉體は、再び強引な行爲でいどみかかつた。そして、夏子はわずかに甲高くうめいただけで、私はおのれの欲情をほしのままにした。

私の瞳は、夏子の顔から動かなかつた。彼女の全身のなかで、もつとも醜惡なものを示す、唇の上を、まじまじとみつめた。これに如何に耐えるかに、私の刹那の生命がかかつているのだ。肉體のうごきにつれて、次第にはげしくひきゆがんで、まるで斷末魔の人を思わせる口許をみながら、如何に私の末梢神經が快美感を傳達してくれるかが、私の今日の運命を決定するのであつた。私は狂暴に自己の肉體を酷使した。

生活のすべてを「勝敗」で支えようとする態度のなかには、何か氣障つばい自分のポーズが感じられる。意地になつて齒をむき出していても、詮じつめれば、エゴイズムのごまかしであり、優柔さを無理から強がつているところがないでもない。それに勝敗などというものが、つまりは主觀の問題であつてみれば、やはりどこかに、自己妥協がある。無意識にせよ、有利な點だけを數え立てようとするのである。しかし、それにしても、長年のあいだ、勝敗という旗じるしを眞正面におし立てて、がりがりした生き方を送つて來てみると、いつしか、ごまかしのポーズも、わが身にそなわつたものになつてゐる。今さら他のおのれをさがしたところで、見當らないし、見當つたところで、身につかな

い。勝つか、敗けるか。——例えば、約束する。正時間に相手が来ない。だが一分過ぎれば私は待たずに歩き出す。それで、勝つたと思う。時間を守つた點に於て。待たなかつた點に於て。そして相手の来なかつたことへの追究には、眼をつむる。他愛ないと言えば、實に他愛もない。

もつとも、大部分は、對異性間に關してのことである。私がこんなものの考え方をするようになってから、もう六年ばかりになる。そのいきさつについては、以前に書いた小説のなかで、簡単に觸れておいた。要するに、女に失敗したのである。愛情などというものが、いかにうそつばちなものであるかを教えられたのである。抱き合つてみたところで、涙を流しあつてみたところで、結局は、お互がどうにもならない自我をかかえて、同化のまねごとに過ぎない遊びに酔つていたのである。一皮剥げば、憎惡が、皮下脂肪組織のように、ぎらぎらと浮び上つて来る。どたん場に追いつめられれば、むき出しな自我だけが

取殘される。そして私は、頼すりしたいほどの氣持で、私の自我を信じた。自我は、行く手にあるすべての障礙物を手段をえらばずおしのけようと試みる。

——六年間、漁色に等しい生活だった。自我を基底とした闘争が、それを支えた。そしてその勝利を決定する唯一の「確證」こそ、肉體の獲得であつた。

一週間ばかり多忙だったし、さち子に會わなかつた。敢てその機會をつくろうともしなかつた。一旦唇を合わせた女なら、それほどまでにいそぐことはないはずであつた。今度會う時が、「確證」をつかむときであると信じていた。

網にかかつて來る魚を待つ、あの期待を信念にまでねじまげた心であつた。そんな或日、さち子の勤め先から電話があつた。さち子が昨日から休んでいるが、からだでも悪いのか、それとも勤めがいやになつたのが、いずれにせよ、無斷缺勤は困るから、一度たしかめてほしい、とのことであつた。大まかな主人ではあつたが、仕事のことだけは嚴格だつた。早速調べてみましょうと答えたも

の、何かあるという不安な豫感が、直感的にひらめいた。病氣なら、あの口やかましい武藤かねが、放置しておくはずはなかつた。何らかの事情で、下宿の者には會社へ行くと佯つて家を出ているに違いないと、推測した。しかしそうだとすると、これは調べようのないことであつた。直接武藤かねのところへ行くことは、さち子の立場を窮地に追いこむおそれが、多分にあつた。當惑して、決心のつかないまま午後の往診に廻つてみると、全くの偶然だつた。私はさち子の姿をみとめたのであつた。

さち子は大學生と一緒にだつた。電車を待つ人ごみのなかに、より添つて立つていた。私の方からは背姿しか見えなかつたが、それと氣がついた時には、いきなり顔を逆手でなせられた思ひであつた。果して、と、心に潜んでいた豫感の的中に、強いてほくそ笑んでみようとしたが、やはり、じかにみせつけられるのは残酷だつた。學生はスーツケースを足許に置いていた。服装からしても、

おそらく名古屋の學生ではなかつた。この土地で大學と言えば、名大以外にはなく、それが私の母校であるせいもあつて、(但し私は専門部出身だが)後姿をみただけで、大抵の場合、他地方の學生と區別することができた。こわいもので、知らぬ間に身にしみこんだ校風は、どこかにあらわれているのであつた。然し、いつまでも自轉車を徐行させているわけにも行かず、すぐにハンドルを横に切つて二人から離れた。長身な學生に、伸び上げるように話しかけているさち子の姿が、へんになまめかしく、後に至るまで心に影をさした。

然し、ふしぎに嫉妬はなかつた。いや、嫉妬する前に、あわててそれを押えつけて、すべてをさち子への闘志に轉換しようと、われと盲めしいた努力をしていたのかも知れなかつた。瞥見した學生の横顔が、いやにのつべりした印象であつたことに、安堵を交えた輕侮があつた。

あくる日、再び會社からの電話におどろかされた。まださち子が出動してい

ないというのである。前日みたところでは、どこか遠方から訪ねて来た學生の歸宅を見送つてゐる様子だつたし、當然今日は出勤してゐることと信じていた。午後にも、何かの用事にかこつけて、一度會社へ行つてみようかなどと思つていた時であつた。昨日早速調べて返事すると言つておきながら、放置しておいただけに、ばつの悪さはなかつた。顔の見えない電話口が、せめてものことに救われた。しどろもどろ言い譯して受話器を掛けると、びつしよりと腋窩に汗をかいていた。

結局、不利とわかつていても、武藤かねにあたつてみるより他ない羽目であつた。

「へえ、ちつとも知らなんだなも。會社へ行つとることだとばかりかし思つとつたでなも」

言い出した方が氣のひける、大げさなおどろき方であつた。

「食事のことはひがむといかんで、自分の辨當は勝手に詰めるようにしとつた
るんだけど、毎日ちやんと詰めて出てつとつたがなも。……もつとも、そう言
や、昨日あつら、ちよつと歸りがおそかつたようだがなも。……そうそう、今
日は、會社の用事で直接蟹江の方へ使ひに行つてくるだけで、他に用事がない
から、大抵二時頃にはかえつて來るつもりだとか言つとつたけどなも……」

ただ幸いなことに、武藤かねは私のさち子に對する野心には全然感づいてい
ない。それどころか、私までが彼女と同類な、「人助け」のひとりだと信じて
居り、さち子の勤め先まで世話したり、こうして缺勤を心配して訪ねて來たこ
となどを、ひどく恩に着ているのであつた。相手が口がうるさい女だけに、こ
れは極めて好都合なことであつた。だから、ぼろを出さないためにも、私は早
早に引きさがる必要があつた。當分知らぬ顔をしていくれと頼み、歸宅した
ら、一度私のところへ來るように傳言を依頼して、辭した。勿論武藤かねは、

さち子の無斷缺勤を注意するために呼びつけるのだと思ひこみ、快くそれを引受けた。

「どうで、男でもできたぐらいのこつたないかなも。十七と言や、まあそろそろ色氣がつくころだし、この頃の娘は早いでなも」

最後に言つた武藤かねの言葉に、擲擻されたような不快が心を刺した。

さち子は三時ごろ訪ねて來た。心待ちにしていた私の出迎えに對して、その表情は怒つたようにかたかつた。それが、私に接した時に示す、彼女の虚勢に似た何時もの表情とは思つてみても、やはりもたれかかつて來る甘やいだものが受け止めてみたかつた。「何か御用でしたかしら」その聲もきびしく、詰るような語調にさえ聞えた。

對蹠的に、すがり寄るようにして話しかけていた學生への態度が思ひ出された。私もまた、わざとつくつた無愛想で、さち子を促して表へ出た。行く先は、

さち子を待つ間の心に決められていた。先日のような、おもわぬ闖入者によつてさまたげられるおそれのない環境でなければならなかつた。さち子に缺勤の理由を糺す、と、いうより、會社の方へうまく口をあわせるように、打ち合わせておく必要があつたし、それより何より、私は今日こそ一舉に、私の「確證」をつかんでおかなければならなかつた。考えてみれば、官能を通しての喜びなど期待できそうにもない貧弱な肢體の少女に、これほどまでに躍起になつてゐる自分が、ふとみじめであつた。ひとり相撲にりきみかえつて、土俵にとび出したまま、ひつこみのつかなくなつたおのれの尻ぬぐいを、遮二無二不潔な溺情に求めようとしている姿であつた。私もさち子も、みちみち、反目しあつた二人のように、一言も口を利かなかつた。今日もまた、むせかえる暑さであつた。

私の家から、十分ほど歩けば花街がある。そのなかの、香月堂と呼ぶ氷屋が

心に決めた場所であつた。五坪ばかりの土間をのぞいて、奥に六疊と四疊半との二間がある。奥は客には使わず、家人の居間になつていたが、私が無理言えは、貸してくれる目算はあつた。女將は以前、内膜炎で長く通院していたことがあり、私とは心易かつた。二號で、ひるまは彼女の他には無人だつた。手傳いの女中が、夕方になると通つて来る。花街へ来る遊客めあての、殆ど夜だけの商賣であつた。だから、なまめいた土地がらへの考慮さえ除けば、うつてつけの場所に違ひなかつた。他に思い當る適當な所はなかつたし、旅館のように、直截に一つの目的を示唆するものは避けたかつた。

花街の入口にさち子を持たせて、香月堂をのぞいた。しきいをまたぐ前、一本道で見透しになつた後を振り返つたが、遠目での表情はわからず、純白のワンピースが眩しかつた。皿を洗つていた女將は、愛想よく私を迎えた。

「すまないけど、奥の部屋、一時間ばかり貸してくれない？」

わざといきなりから要件に入り、これだよ、と小指を出して意味あり氣なうす笑いを浮べてみせた。面映ゆさを、野卑でごまかそうとする手段であつた。女將はちよつとのあいだけげんな面持だつたが、すぐに心得顔にうなずき、「先生もすみに置けませんね」と肩を叩いた。私は、構えていた心をくじかれてうろたえた。すると、女將は男のように哄笑し、ひとり合點に振舞いはじめた。酒の用意はいいか、隣りの部屋におやすみになる仕度をしておこうか、何なら鍵を預けて一時間ほど出て行つてもいいが、などと、尻こそばゆさを通りこして、餘りの氣の利き方にいやみがあつた。私はあわててそれらを打ち消すと、逃げるようにとび出して、待たせてあるさち子を手招いた。その場所に立ち戻つてまで、迎えたくはなかつた。さち子は眞直ぐに歩いて來た。わざと持した氣位の高さにも見えた。私に従つて奥へ通り、女將には眼もくれなかつた。

六疊の部屋に、卓をはさんで向いあつた。女將は冷えたサイダーを置くと、

この暑いのに障子をたて切つて、ごゆつくりと挨拶して去つた。てれかくしに、私はさち子が背にした壁の小窓をあけた。窓の外はすぐ黒塀になつて居り、それを越して、隣り合わせになつた妓樓の二階がみられた。もつとも、視野の關係で、手すりだけしか見ることはできなかつた。しばらくは、氣まずい沈黙であつた。サイダーを飲み、貝柱をほほばり、たばこを吸い、私は話の緒口をさがした。

『どうして、會社を休んだんだね』

結局、そんなまじい質問しか出なかつた。さち子の視線は、私の方にはなく、どこかあらぬ方に、ぼんやりと注がれていた。こたえるべき心をまとめている様子ではなく、無視した不敵さであつた。さり氣なく、私はさち子の瞳の行方を眼はしで追つた。部屋すみの用筆筒の上の、置時計であつた。さち子は秒針の動きを眺めているのだ。私自身、なにかに刻みこまれているいらだが、ふ

いと心をよぎつた。

「それを、尋ねるために、お呼びになつたの？」

つと、視線をもどすと、さち子はまとわりつくように冷笑して見せた。そして、急に強く構えたまなざしで、きつぱりと言ひ切つた。

「昔の戀人が訪ねて來たのよ」

明らかに先手を打たれた。紫煙のかけから片眼をつむつて、私は故意につくつた蔑みを鼻先に浮かべながら、おくれればせにも態勢を整えようと努めた。

「どこの學生なんだね。……大阪かどこからしいが」

「ごらんになつたの、私達？」と、わずかにさち子の顔をおどろきの色が掠めた。

「みたよ、いやでも眼につくところを歩いていたんじゃないか」

「和歌山にいた時に知り合つたのよ。ちようど夏休みだから、訪ねて來てくれ

たの、もう半年になるかしら……」

『勿論君の戀は自由だが』急に不貞腐れたように、あけすけな追憶をみせはじめたさち子に、私はいそいで言葉を重ねた。「然し、無斷缺勤はこまるんだ。

會社から何遍も電話をかけてよこす。僕がこんなことをいうのは、いらぬおせつかいには違くないが、一先就職の口を利いた以上、僕としての立場もある。いや、そんなことは別としても、ひとから苦情の出ないだけのことはしておいてほしいね。悪く言えば、もつと要領よく立廻ってもらいたいんだ』

『これから氣をつけるわ。だけど、私、もうあそこを辭めようかと思つてるの』
『辭める？——なにか面白くないことがあるのかね』

『別はないけど、ただ、いやなの』

今度は、ひどく惡戯つばい笑い方であつた。私の世話した會社に何の未練もないことを示して、意識的に私の自尊心をからかっているのだと思つた。

「辞めたければ、やはりそれだつて君の自由だよ。——だけど、それなら、今日はどこへ行つてたんだね」

「訊問されてるみたいね。朝からお金の工面で駈けすり廻つてたのよ」

「お金?——」

どこかまだ開け放しになつていた心の扉を、いそいで鍵をかけて廻る思いで、私はそつとさち子を警戒しなければならなかつた。異性とのかわりに於て、私は必要以上に、金錢については小心になつていた。さり氣ない會話のなかにさえ、それが出て來ることを、極度におそれた。私のつかみ得る「確證」は、たとえ聊かなりとも金錢で換算し得る性質のものであつてはならなかつた。私の勝利感を不動のものにするためにも、私と女との物質面に於ける交渉を、でき得る限り回避しなければならなかつた。私はさち子が、思いもかけぬ妖婦ではないと斷言すべき根據は何一つとして持つていないのだ。それどころか、今

にして思えば、會うに従つてそれを裏書きするような性格のはしばしが、ひよいひよいと順次におどり出して來たとも言えぬことはなかつた。ひと皮ひと皮、さち子は私の前に假面を脱ぎすてて來たのだ。裸體に追いつめたときのさち子の本音が、いまのひと言ではなかつただろうか？

急に無言になつた私に、さち子は今日の缺勤について説明しはじめた。——前に述べた通り、さち子が名古屋に出て來て最初に勤めた會社は、公金紛失の嫌疑を受けて辭めさせられたが、そのとき、武藤家がその金を立替えた上で、さち子を引取つた。返さなくとも催促する人ではなかつたが、さち子としては、やはり心苦しいし、まして新しく勤めに出た以上、たとえ月賦でも返済したいと思つていた。ところが、武藤家へ來るまでに下宿していたダンスーのところに、冬物などが入つた荷物が、まだそのままあすけたきりになつていた。目ぼしいものはあらかた賣りつくして、もうポロばかりだが、少しでも何とかす

るために、どうせ二日も休んだことだし、今日出かけてみた——と、いうのであつた。勿論私は半信半疑であつた。彼女の純白のワンピース一枚を賣り拂つても、それぐらいの金が工面できぬはずはなかつた。

「それで、金はできた？」一步一步、自分のふみ出す位置の足場を用心しながら、私はきいた。

「半分ばかり——まだ、千五百圓足りないの」

私はだまつた。これ以上立ち入つた質問をすることは、私をのつびきならぬ窮地におとしぬる危険が、多分にあつた。私は再び、睦じ氣に語り合つていたさち子と學生との姿を、思い描いた。と、それをみすかしたかのように、さち子が言葉を重ねた。

「そのお金、昔の戀人にくれてやつたんじやないかと疑つてらつしやるのね。駄目よ、かくしたつて、そうあなたの顔に書いてあるわ。だけど、見當ちがい

よ、そんなこと。——あのひとにも、相談してみたんだけど、だめ、五百圓ほ
つちしか持つてなかつたわ」

「……………」

「あのひととは、ままごとみたいなおつきあいで、ままごとみたいなわかれ方
だったの」

「じゃあ、いつかの子供は——」

「やつぱり、そんなことを考えていらつしやつたのね」

さち子は今度は聲を立てて笑つた。私はあわてて二本目のたばこを取り出し
た。

「私の子供は——口にするのもいやなくらい、きたない男……………」

私はこれで、完全に話題を失うことになつた。私はたばこばかりをやけにく
ゆらした。その時、隣家の妓樓から下あろう、氣だるい三味線の音が、急に鳴り

始めた。素人耳にも調子外れとわかる、稚い音色であつた。さち子はふいとその方へ、一重瞼の黒い瞳を移した。勿論妓樓の部屋のなかは、私達の位置からはみることはできない。しかしさち子の瞳は、忘れていたなにかのあこがれに心奪われたように、いつまでも耳かたむけたままの姿勢であつた。はじめてみる、彼女の無心の表情でもあつた。今日もまたさち子の唇はあかい。二階を見上げていたので、あごのあたりが幾分つき出したようにみえ、それが、なにかを待ち設けているような風情にも見えた。私は残り缸かなたばこを灰皿のなかへねじこむと、卓を片手でおしやりがてらた。こむにも等しい姿で、さち子の手を握りひき寄せた。

さち子はさからわなかつた。唇が重なり合つた。再び、蛇のようにうねる舌先——その律動的な感觸に追いつめられるように、私はさち子のからだを次第に横ざまにしようとし、肩に廻した手を、うすつべらな背中を傳つて這い滑

らせた。その刹那、思いがけず、私はつきはなされた。

「だめ、そんなこと」

私はくずれた體勢を整えようとした。膝に、卓の脚がぶつかり、空になったサイダーの瓶が倒れた。

「いけないの、——私の頭のなかは、いまお金の心配で一杯なの。それどころじゃないの」

これほど無慙に私を叩きつける言葉は他になかつた。たかぶりかけた心は、みるみる現實の意識へ引きもどされた。私はさち子の言葉の狡猾さと、野卑におどろいた。これはあきらかに交換条件の呈出であつた。代償としての肉體でしかないことを、私にはつきりと示したのであつた。私は無理からの努力で、せせら笑つた。

「僕もまた、口にするのもいやなくらい、きたない男かも知れない」

ぶざまな恰好で抱き合つたままの二人のからだは、たたみの上に轉がつて、にぶい音を立てた。さち子はそれ以上の抵抗を試みようとはしなかつた。しかし、またたきさえもせずいきびしく構えたさち子の瞳が、肉體のあがらゐ以上の鋭利さで、私の心に深く切りこんでいた。烈しい挑戦であつた。ありありと侮蔑と憎惡の色が私の次になすべき行爲を監視しているのであつた。心のひるみをおさえて、私はその瞳のなかに突進するような思いで、肉づきの悪いさち子のからだを犯し進んだ。私の抱擁が最後の目的をなし遂げた瞬間こそ、さち子の瞳から、侮蔑も憎惡も、一切が消失するものと信じた。祈るにも似た心で信じた。が、しかし、私の豫想はくつがえされた。さち子は實に凝然と、私の視線に堪えた。わずかに、おのれの肉體の一部にすべりこんで來る異性の欲情を意識したとき、眉根のあたりにしわを寄せて顔をしかめたにすぎなかつた。しかもそれをしも、私には極度の嫌惡の表白として映つた。そうだ、さち子の

今の瞳こそ、リットル氏病の女を抱きしめた時の私の瞳に他ならなかつた。私
はわが身の醜悪さの反映を、さち子に於てまざまざと見出した。畜生！ 私は、
叫ぶような思いで、さち子の貧しい肉體にぶつかつた。さち子は軽く臉を合わ
せた。だが、やがてその唇のあたりには、かすかな嘲笑の色さえ浮び上つて來
るのであつた。

6

あなどつてかかつたのが、最初からのつまづきであつた。態勢を整えるいと
まもなかつた。少しづつ剝がれて行くさち子の正體におどろくばかりで、すべ
てが後手後手の連続であつた。年齢と貧しい肢體への誤算を、今になつて後悔
しなければならぬのは残酷だつた。

肉體の抱擁が、決して「確證」を掴むことに直結していかないことを、さち子ははつきりと教えてくれた。肉慾の充足は、そのみをしては、勝利感をもたらずものではなかつた。烈しい侮蔑と憎惡の瞳を思い起すたびに、心は無慙にたたきのめされた。わが身への嘔吐と、手痛い敗北感とを、齒をくいしばつて我慢しているのが、私の姿であつた。りきみ返つて、今にみると毒づいている、泣虫小僧の空威張りに等しかつた。まだしも娼婦を抱きしめた方がよかつた。娼婦との性交なら、單なる商取引の一つとして見過すても残されている。そこには、少くとも勝敗に關するものは何もない。一定の金を支拂いさえすれば、規定の時間内に於て、女は無難作に商品としての肉體を提供してくれるのである。最初からの目的が、鬱積した精液の放流だけに限られている。わが身にはねかえつて來るものはなく、もし萬一あるとしても、それは、金錢によつて肉體をあがなつたことへの不潔感でしかあり得ない。ところが、私にとつては、そ

んなちや、ちなヒューマニズムは無用の長物なのである。私は肉體もまた、時によつては商品と見なすのに、いささかの呵嘖も感じはしない。しかも、娼婦に對して、肉體以上のものを求めるのが既に茶番狂言であり、娼婦が男と共にオルガニズムに到達すると思うのが、同様ばかばかしいことである以上、これはあくまで一方的な商取引なのである。私たちは自分勝手に末梢神經を興奮させ、自分勝手に精液を射出し、ぐつたりとし、満足し、自分自身のために金を支拂つて歸つてくればいいのだ。娼婦との性行爲を輕蔑するのなら、むしろこのマスターベーションにも等しい一方的な取引を、非難すべきであらう。だがしかし、一旦女に對して商品以外のものであることを望むとき、そこに始めて、勝敗を伴うきびしい闘争の世界へ、私たちは足をふみ入れなければならぬ。そして、この女を商品以外のものとする唯一の鍵は——闘争に於ける勝利を決定する「確證」は——それこそ、その「確證」こそ、快美感に到達しようとし

で努力する女の肉體のうごめきであり、それに達した時の全身の痙攣であり、そしてそのうめき聲でなければならぬ。燃え上る肉體こそ勝利を確約づけるただ一つのものなのだ。娼婦さえも、その身を焰のなかにこがし切れば、既に商品として彼女ではなくなるのだ。そうだ、それこそ私の「確證」なのだ。

私はさち子の腫のなから、あの憎悪と侮蔑の色を消し去らない限り、おのれの惨敗を自認しなければならぬ。あの腫に、陶酔の歡喜を發見しないかぎり、私の勝利はもたらされないのだ。

田舎の妻の手紙には、來月の中旬には歸つて來るとあつた。それまでには、私はどうあつてもさち子に打克たなければならなかつた。四時半に會社を退けて來るさち子を待ち合わせて、私は一時間の淫蕩な時間を持つのが、殆どの日課になつた。場所は同じ香月堂と決つていた。

私の手が彼女の肉體の露出をこころみるとき、さち子の腫には、タイムレコ

「ダーのような正確さで、侮蔑と憎悪とが浮び上る。いらだつた私の肉體の躍動を意識すると共に、かすかな冷笑が唇のあたりにただよう、閃光にも似た痴情の放射の瞬間が去ると、彼女はけろりとして、いつもの無表情にかえる。――眼尻の切れた一重瞼のせいだと、私はさち子の侮蔑の色を説明づけて見た。空しい自己慰安にすぎなかつた。性生活の經驗の未熟さによる、或程度の不感であるとも考えてみた。身に言いきかせるおろかしい辯明でしかなかつた。知る限りの技巧を弄してもみた。より一そう自分を敗慘者の位置におとしめる結果にすぎなかつた。陰毛さえもまばらな少女に、私はおのが鬪魂をかたむけつくしているのであつた。

「お金、なんとかしていただけないかしら」

ある日、さち子が遂にそれを切り出した。拒絶などあり得ないと言つたふうな、自信あり氣な態度であつた。私はもうおどろきはしなかつた。いつかは必

す來ると思つていた言葉である。けれど、やはり思い迷つて返事につまつた。

私が今、さち子を商品と思ひこみさえすれば、私は至極簡単に救われたであらう。あれ以來、十回の抱擁とみて、一回が二百圓足らずだ。そう算盤を置けば、

私は手易くおのれの救いを見出すことができるのであつた。だが、も早ここまで追いつめられた以上、私は今さらになつてこの鬭争から手を引くことばできなかつた。勝負の放擲は、敗北と變りないのだ。「確證」を得ぬうちに、代金を支拂つてはならない。が、それにしても、私には今敢てさち子の申出を拒絶する勇氣はなかつた。拒絶と同時にさち子を失うのがこわかつた。そしてその後、依然として侮蔑と憎惡だけが、私の心に灼きつけられたように残るのがこわかつた。

さち子にはこたえず、私は猪突するような無謀さでそのからだを抱えた。一切をうやむやのうちに葬り去ろうとする卑劣な行爲であつた。それとも、性交

の連続が、やがては憎悪を消滅させて行くとしても、私は思っているのであろうか？……

「だめよ、今日はからだが汚れているから」

さち子は勝誇つたようにあごをしやくつた。(うそだ) 私はそう心に叫び、かまわずさち子のからだにいどんだ。が、うそではなかつた。私の手に、がさこそと氣味悪いゴム引布の觸感がふれた。束の間、私はためらつたが、やがて私はそれをしも無視する態度に出た。私の持つ生理的な知識にさえ眼をつむつて、野獸のような執拗さで、私はボタンのありかをまさぐり、あせつた。さち子の眼に、今だかつて示したことのない、極度の憤怒が浮ぶのを、私はみた。

「左りッ」

命令するようなさち子の聲であつた。私の求めているものの在りかを、教えただのである。そして、私はこのさち子の命令に、まるで走狗のごとく、唯々と

して従うのであつた。

井口夏子から頻繁に手紙が届いた。父母がうるさいから通信は一切しないように言つたのだが、抱擁後の夏子は、そんなことでは歸さなかつた。男の名前で出すからと言われれば、断りようもなかつた。吉岡などという偽名で手紙が着くはずもなし、そのまま放置しておけばよかつたものを、つかうかうかと、手紙の連絡場所を教えてしまつたのが、決定的な失敗であつた。その時の夏子には、何か鬼氣にも似た、すさまじいものがあつた。一刻も早くこの場から逃れたい心に追いつめられて、前後のわきまもなく、友人のM——の住所を教えた。後悔したがもうおそい。以來、三日にあげず、下手くそなふるえ字の手紙である。M——の手前にも、いい加減に何とかしなければならなかつた。手紙を渡されるたびに、顔がほてつた。が遂に、何回目かの夏子の誘いの手紙に、

無視し切れなくなつて出かけた。この上知らぬ顔をきめれば、いきなりM——のもとへ訪ねて来るおそれが多分にあつた。うそでかためているこちらに弱身があつた。

指定して來た場所に、夏子は落着きなく立つていた。きよろきよろとあたりを見廻し、遠くからみていると、操り人形のような、ぎこちなく小ぜわしい首の振り方であつた。私に氣づくくと、例の動物的な歡聲をあげて駈け寄つて來た。せめてのことに、走つてさえくれないければいいのに！

「薄情ねえ、ちつとも會つてくれないじゃないの」
「忙しんだよ」

私はもう、會つた最初から憂鬱になつていた。

「うちへ來てちようだいって言つても、ちつとも來てくれないでしょ。だから、きつと兄さんたちに氣がねしてらつしやるんだと思つたの。本當にそんな心配

いらないうたけど、……それで、今日はこんなところへお呼びしたんだけど、
實はお友達のところをお願いしといたのよ。ええ、すぐこの先にあるの。お友達
のお父さんが旅館をやつてらつしやるのよ。だから、お部屋借して下さるの」
私はさち子のために香月堂の奥座敷を借りる。夏子は私のために旅館の一室
を借りる。私は相手への憎悪に耐えながら夏子を抱擁する。さち子は私への憎
悪に耐えながら私の慾情にその身を提供する——これは何という皮肉なことだ
ろう。

しかし、夏子の一途な心がおそろしかつた。たとえ無智のさせた行爲にもせ
よ、男との會合に、旅館の室を借りておく、というのは軽い氣持では見過せな
かつた。當然一つのものに期待をひそめている、と、いうよりも、あからさまに
男にむかつて強要しているとみて差しつかえなかつた。わずか一度の抱擁が、
そこまで彼女の情焰をかりてるものがあつたとはい、私自身信じがたい氣持であ

つた。が、考えてみれば、白晝この病女と衆目のなかを歩きまわるよりもまだしも旅館の方がよかつた。少くとも抱擁の瞬間に至るまでは、その方がよかつた。

五分と歩かないところはその旅館があつた。屋號の書かれた硝子戸もうす汚く、どうみても連れ込み宿の感じであつた。夏子は先に立つてその裏口がら入り、ちようどそこにいた主人らしい男に親しそうに話しかけた。四十餘りの、額の四角な男だつたが、無愛想なまでに無表情なのが、かえつて有難かつた。すぐに女中が出て来て奥へ案内された。たのしさを伴わない、尻こそばゆい二人だけの時間が来た。ふと夏子に、世故にたけた三十女を感じた。

外見の貧弱さに似ず、案外立派な部屋で、たたみも新しかつた。ほかに客はないのか、しいんとして、どこかで蟬のなき聲が、表の暑さをしのばせた。杉鉦の天井板はこつたものだと、なるべく視線をよそへむけるようにしていると、

いきなり夏子が痙攣性の早口でしゃべり出した。怨みごとと、よろこびと、私
のその後の詮索と、——なぜ彼女の病氣が、一そ口も利けないところまで進ん
でくれなかつたのかと、私はむしろうらめしかつた。

『あ、そうそう、私つたら、うっかりしてて、このあいだからかんじんのこと
を訊くの忘れてたのよ。吉岡さんつて、おいくつ？』

『いくつに見える』（なんてくだらない話題なんだろう！）

『さあ……二十五くらい？』

『あつた』

私は苦笑した。私の年令をあてたものは、これまで殆どなかつたのだ。老け
てみえるのではなく、やはり誰もが醫者という職業にこだわつていたのであつ
た。

『私は、ちようどになるの』

「うん」

「ね」と夏子は一膝乗り出し、「いつ、結婚して下さるの？」

私の持つ常識の範圍を、大膽不敵にとびこした質問の仕方である。どう努力しても、この女の神經には歩調が合わせられなかつた。

「結婚なんて、僕はまだ考えたこともないよ」(苦しい遁辭)

「するいわ、そんなの。こんなふうになつたら、一日も早く結婚するのが本當じゃない？」

「どうでもいいんじゃないかなあ、そんな形式的なこと。僕は當分考えたくないね。思うさま青春を享受したいよ」(またしても齒の浮くような、苦しい一辭)

「男の人はそれでいいけど、女はいやよ。ねえ、まだ結婚できないの。おうちのひとが反對なさるの？」

發聲の都度、ゼスチュアの都度、夏子は私に學生時代のノートを思いおこさせる。

Little'sche Krankheit——リットル氏病

Diplegia Spastica infantilis——小兒痙攣性截癱症

Choleatische Krampf——舞蹈病様痙攣

Athetotisho Bewegung——アテトーゼ様運動

私は大學の臨牀講義室で、學用患者を前にしているような錯覺におそわれて來るのであつた。

「結婚のことは別としても、そんなに青春を享樂したいというのなら、なぜもつと會つて下さらないの？ あれからもう、三週間にもなるのよ」

「そんなに、遊んでばかりいられないよ」

「なぜ？ 忙しいたつて、誠意さえあれば、少しぐらいのひまはみつけれられる

はずよ」

「すつからかんで、遊ぶどころのさわぎじゃないだよ」

「お金ないの？」

「ああ」

「お金ぐらい何さ、あたしがみんなおごつたげるわ。お小遣いあげてもいいわ」

「……………」

「なぜそうならそうと言つてくれなかつたの。だから薄情だつて言うのよ」

「……………」

「ね、本當に、お金がいつたら言つて下さればいいわ。それぐらいのこと、よくつてよ」

ふと心を掠めた狡い考えを、私はあわてて打消した。そこまで夏子をだまし切りたくはなかつた。赤子の手をねじるにも似たことはしたくなかつた。けれ

ど、一旦打消したその考えは、すぐにまた、私の心にむくむくと頭をもたげはじめた。

右から左へ——夏子からさち子へ——

私がいま、夏子との抱擁の刹那に到着したとき、——おそらくそれは必ず到着しなければならぬことだ——先日のおさち子と同様に「それどころではないんだ。頭のなかには金のこと一杯なんだ」と言いきえすれば、私のこの狡い計畫は、確實に達成されるのであつた。夏子は何のためらいもなく、むしろ嬉々として、私の奸計に乗るに違ひなかつた。

右から左へ——

だが果して、それが最も賢明なさち子への報復の手段になるであろうか？

私から金をしぼり取つたと信じてほくそ笑むさち子を、私はその時、心の底からあざ笑うことができるであろうか？ 私がさらに新しい私自身の憎悪に耐え

なくて濟むと、誰が斷言できるといふのだ。

私は、たとえ一時にもせよ、僅かばかりの金のために、奴隷にも等しい状態で、この病女の前にひざまづかなければならない。いやそればかりか、二千圓の金は、決してさち子の瞳から、憎悪と侮蔑とを消し去るものではないのだ。むしろその時こそ、私は永久にさち子の瞳にそれが残されることを、覺悟しなければならぬ。そしてまた、報復は、斷じて勝利ではなかつた。

右から左へ——夏子からさち子へ——

憎悪と侮蔑と、そして私の「確證」と——

私は溷濁して來た頭のなかで、そんな言葉をくりかえしながら、顔は次第に苦痛のしわを刻みはじめていた。